機械の花嫁

小松左京

ケイブンシャ文庫

小松左京（こまつ さきょう） 一九三一年一月二八日大阪市生まれ。京都大学文学部卒。経済誌の原子力問題担当記者、父の経営する町工場の工場長、漫才の台本書きなどを経て、六二年「地には平和を」でデビュー。六四年処女長篇「日本アパッチ族」を発表。七三年発表の「日本沈没」はミリオンセラーを記録。日本SF界の重鎮。

カバー・とり みき

機械の花嫁

小松左京

ケイブンシャ文庫

機械の花嫁

小松左京

ケイブンシャ文庫
1
101
390

ウーマン・リブが勝利を治めた地球。男たちは、安逸の日々を求めてやまない女性たちを見捨て、宇宙へ飛び立った。彼らが孤独な宇宙の果てで、失なわれてしまった〝女らしさ〟を見い出したその対象とは……。表題作「機械の花嫁」ほか、巨匠がつづるロボット・アンドロイド・テーマの傑作SF作品集。

勁文社

ISBN4-7669-0145-2 C0193 ¥390E 定価390円

ケイブンシャ文庫

好評発売中

小松左京
機械の花嫁

平岩弓枝 伊東昌輝
茶の間の人間学

川上宗薫
恐怖の顛末

王 貞治
回想

S.ワインスタイン H.アルブレヒト
青島幸男・訳
にわとりのジョナサン

機械の花嫁

小松 左京

ケイブンシャ文庫

勁文社

目次

機械の花嫁

終りなき負債

仕事がおわってフレイミング・マシンのスイッチを切った時、足場の所にまたあいつの姿を見つけた。垂れ下った頬にいつものようにニヤニヤ笑いを浮べ、かきのようにべっとりした眼で俺を見下ている。——してみると今日はもう土曜なのだ。

「いい天気だな」と奴は言った。残忍で冷酷で、自分の残忍さを楽しんでいる口調だ。黒いメタル・プラスティックの防護コートは、例のように光線ピストルでふくらんでいる。

「作業表をとってくる」と俺は言った。

すると奴は、指の間にはさんだカードを、俺の鼻先でゆっくり動かしてみせた——俺の中にぐっと硬い怒りがつき上げた。九十キロもありそうな、奴のでぶでぶ肥った体は、スチールグリッドの足場の上で、一瞬危機にさらされた。手すりの下三十メートルの所には、いま俺がうちこんだばかりの速乾セメントがにぶく光っている。——だが奴は、俺が臆病者で、いくら怒らせても安全なことを知っていた。俺自身も、その危機が、無力な怒りによってかもし出された、想像上のものにすぎないことを知っていた。俺は奴の手から作業表をひったくった。

「ふくれるない」奴は馬鹿にしたような薄笑いを浮べて言った。「手間をはぶいてやっただけじゃねえか」

会計所の建物の前にはすでに列ができていたが、奴はすごみをきかせてすわりこんだ。支払機には奴がカードをさしこんだ。出てきた給料袋の封を切ったのも奴だった。

「一枚、二枚、三枚……」

奴はほかの連中にも見えるように札を数え、いつもの額をポケットにいれると、俺にあのいまいましい紙切れを押しつけた。

「あと千五百二十六枚だ。——もう少しだな」奴は歯をむきだして笑い、車にのりこんだ。

「あばよ。——また来週の土曜日にあおうぜ。怠けるなよ」

ほこりをたてて走り去るクロームメッキのホバークラフトを見送りながら、俺はまるで薄くなってしまった給料袋と、二百五枚目の支払い済み手形をにぎりしめて立ちつくしていた。手形の右肩には2847とナンバーがうたれ、債権譲渡のスタンプと金額と日付けと——それに俺の祖父と、親父と、俺自身の署名があった。こんな紙切れが、もうあと千五百二十六枚も、奴の手もとに握られているのだ……。

*

——奴に初めてあったのは、貧民窟の無料宿泊所だった。その時俺は一番隅の寝棚にねて

いた。奴は三人の男と一しょに、どやどやはいって来て、ものも言わさず俺を表にひきずり出した。連れの一人はカバンをもった猿みたいな男、あとの二人はひとめでそれとわかるロボットだった。多分ギャングがよく使う、もぐりの違反ロボットだったろう。——スラム街の一角をとりこわしている工事場の裏手で、ロボットは俺の両腕をとって板塀(いたべい)に押しつけた。

「なぜ、ずらかりやがった？」奴は俺を見すえてどなった。

「何のことだ？」と俺はふるえ声で言った。——その時にはもう完全にちぢみあがっていた。

「お前の親父がくたばってよ。——葬式もすまねえうちに姿をくらましたじゃねえか。死骸(しがい)をおっぽり出したままで」

「こわかったんだよ」と俺は言った。「俺、病気だったんだ。親父が死んで——それからがよくわからない」

「今もどこか具合が悪いか？」猿みたいな男は妙な眼付きで俺を見て言った。俺は首をふった。

「どうでもいいや」奴は猿男のカバンからぶ厚い紙の束をとり出しながら言った。「とにかくこれにサインしな。サインぐらいできるだろ？」

「何のためだ？」

俺は手を後にまわして、しりごみしながらきいた。

「何のためってことがあるかよ。すりゃいいんだ。すんだら働き口を世話してやる。わざわ

ざ見つけてやったんだぜ」

「こりゃいったい何だい？」俺は鼻先につきつけられた厖大(ぼうだい)な支払い手形を見て、あんぐり口をあけた。「俺はこんなもの……知らんぜ」

「お前が知らなくてもこっちが知ってるんだ。ほら、こりゃ裁判所の支払い命令だ。ちゃんとお前をお名ざしだぜ」

「俺が何をしたっていうんだ？」

奴がふりまわす裁判所の令状とかいうものを、俺は横眼で見た。薄葉紙にタイプされた文字が少し見えた。……ノ全国月賦販売協会ニ対スル支払債務ハ……ノ長男ガコレヲ引キ継グモノトシ……。

「いやだというのかよ」奴はいきなりばかでかい光線ピストルをぬいて、俺の鼻先へつきつけた。

「俺達ゃ政府から許可をもらってる債権取り立て会社のもんだ。会社は月賦屋の方から、四十パーセントびきでお前にたいする債権を譲渡されたんだ。泣こうとわめこうと、いただくものはいただくぜ。いやなら裁判所にたのんで監獄で働いてもらう。——そうしたら、暗い所でコキ使われて、かせぎはビタ一文、払い終るまでお前の手にはいらないぜ」

「しゃばが恋しかったら、いう通りにしなよ」猿が俺にエターナル・ペンを押しつけた。

「さあ来な、坊や。一つ、字のうまいところを見せてくれ」

「俺はなにも月賦で買ったおぼえはないぜ」俺は弱々しい声で、抗議した。
「誰もお前が買ったとはいってねえ」奴は鼻で笑った。「買ったのはお前の祖父(じじい)だよ」
手形の第一支払人のところに、祖父の署名を見つけた時、俺の体から最後の力がぬけた。
俺は奴らもこわかったが、監獄の方がもっとこわかった。今の監獄がどんなところだか、浮浪者達にきいて知っていたからだ。——第二支払人のところに署名しながら、俺はおずおずときいた。
「祖父(じい)さんは、いったい何を買ったんだい？」
「そんなこと知っちゃいねえ」奴はぎゅっと顔をしかめながらそっけなく言った。「俺達はお前から借金をとりたてりゃいいのよ。売ったのは月賦屋だからな。——八十四年月賦の五十年分だけはらいこんだ残りの債権を買いとったんだ」
二千枚ちかくある手形に署名しおわるのは、二時間からかかった。それがおわると奴等は俺を海岸の工事場へつれて行った。そこの現場主任は、俺を見るなりきいた。
「政府株はいくら持っている？」
「政府株って何だ？」俺はききかえした。
「こんなうすのろ使いもんになるか？」
頬に傷のある主任は奴——アイザワと言った——をふりかえって眉をしかめた。

「世間知らずなだけさ。体力表はここにあるが、ＩＱはいいぜ」
アイザワが投げ出したカードを見もせず、主任は唾(つば)をはいた。
「あてにならんな。お前ンところじゃ非合法手術もやる医者がいるんだろ」
「いやならよそへ行くぜ」とアイザワは言った。「こいつは失権者だし、若いと来てるから売れ口はごまんとある」
「お前がこの薄のろから、株をかすめたんじゃないか？」
「人ぎきの悪いことを言うな。親父が急死して書きかえの暇がなかったんだ。株はさし押えられたし、文句のねえところさ」
主任は鼻をならして汚れた札をとり出した。
「五十」
「六十だ」とアイザワは言った。「身柄は俺達がひきうけるんだ。飯場の厄介(やっかい)にならない」
「逃げたらどうする？」
「逃がすもんか」猿男が歯をむき出して笑った。「こっちにもだいじな玉だ」
六枚の十クレジットをとり上げると、アイザワはポンと俺の肩をたたいた。「じゃ土曜日にな——しっかり働けよ」
これが四年前に俺の身の上にふりかかってきたことだ。その時までの俺は、長期月賦のこ

となぞまるきり知らなかった——もちろん今では骨身にこたえるほど知っている。仕事の仲間にも親の代からの月賦に苦しんでいる連中がたくさんいた。しかし最高百年まで支払い期間が認められているとはいえ、祖父から三代にわたって、支払い債務をうけついでいるのは俺ぐらいのものだったろう。

元来俺は——おかいこぐるみというほどじゃなかったが、子に甘い親父の羽掻いの下でぬくぬくと育ち、世間知らずのお坊ちゃんだった。親父は俺をあまやかしてしたい放題にさせ、俺も毎日のらくらして暮した、だからこそ、親父が死んだあと、浮浪者になっても働く気なぞなかったのだ。しかし親父の死後三か月目に奴が現われてからというもの、俺の生活はまるで変ってしまった——生れて始めて強制され、監視され、ふみつけにされて暮すようになったのだ。

俺はその工事場でもぐりの人夫になった。もぐりの人夫って、どんなものか知ってるか？　奴等は機械以下なんだ。国際ロボットカルテルが、労働組合の抗議を口実に、作業用ロボットの生産を制限していたから、こういう工事場では重作業の労働力がうんと不足していた（その実カルテルは、組合のダラ幹と組んで価格のつり上げをやっていたんじゃないかと思う）。作業用ロボットの値段は高いが、もぐり人夫の賃金はべらぼうに安い。そこでこういうところでは、もぐりの人夫がたくさん働いていた。ロボットとちがって償却や破損に気を使うこともなく、必要な時にやとい、いらなくなればくびにすればいい。

組合にも属さず——正規の組合員なんて、俺達から見れば大名だ——死んでも涙金ですむ。彼等は何の社会保障も身分保障もなく、目くされ金につられて生命をまとの危険な作業をやる——危くって、とても高価な作業ロボットなんか使えないような仕事をだ。一度足場がくずれて作業用ロボットと人夫の一人が海へおちた時、監督の奴は虫の息で杭につかまっている怪我人の肩をけとばしてこうどなったものだ。

「ばかやろう！　お前らのかわりはいくらでもいるが、作業用ロボットは一台しかないんだぞ！」

——もぐりの人夫なんてこんなものだ。

彼等の大部分は俺同様失権者、つまり政府株をもたない連中だった。政府が株式会社組織の営利事業になって以来、政府株、すなわち行政株式会社の株を十株以上もたないものは一切の公民権——実は一切の人権を剝奪されるのだ。政府は物価操作一つで、この安い労働力をうんと作り出す事もできた——こんな常識的な事を知らなかった俺は、馬鹿と言われてもしかたがない。もっともはじめから知らなかったのか、知ってて忘れたのか、その点はっきりしなかったが。

ともあれ、俺の生活は、がんじがらめにしばられてしまった。一週間のうち五日は超過勤務、三日は深夜業、日曜も出勤するし、大祭日以外に休みなんてない。奴がそうしろと命じたのだ。そうしなければ月四十クレジットの月賦代がはらえないからと奴は言う。俺はスラ

ムのボロ下宿におしこまれ、そこのおやじは俺を監視していた。奴は給料の三分の二をとり上げ、三日にあげず俺の働きぶりを見に来た。俺の方は、反抗しようの逃げようのという気は起こらなかった。奴がこわかったし、監獄がこわかったからだ。世間知らずだったから、よけいにそうだったんだろう。とにかく奴は正式の令状と、三代署名入りの手形を持っていた。——俺はくる日もくる日も、ただ夢中に働いた。下宿から仕事場へ、仕事場から下宿へと、単調で苛酷な日々が、驚くべき早さですべって行った。そして——すでに四年たった。いや、たった四年しかたたなかったというべきだろうか？　俺の前にはすぎさった四年の歳月とまったく同じような、単調できびしい日々が、まだあと三十年分も横たわっていた。そしてこの頃では、作業の合い間に、ふと遠い水平線を眺める時など、たまらない気持で思いつめるようになっていた。——何だってこんなに働かなくちゃならないんだ？

その思いは、ある日年よりの人夫に話をしてから、いっそう具体的なものになった。

その人夫はアイザワが俺から給料をまき上げていくのを見ていたが、あとから俺を物かげによんでこう言った。

「お前、債務の交換をやらないか？　俺の方は月二十クレジットであと十年——だけど俺は癌であと一年も生きられないんだ。——これは絶対に内緒だぜ」

月賦債務の交換は、仲間うちでちょいちょいやっていた。例えばこの老人のように月二十

クレジットで十年分残っているが、とてもあと十年は生きられないという場合、月十クレジット、三十年分ぐらい残っている若い男と、債務の交換をやるのだ。双方の合意があれば手続は登記所ですぐにできるし、失権者でも書記につかませれば大丈夫だ。こうすれば老人の方は一月あたりの負担額がへるし、若い方は負担がふえても期間が短かくなり、総額はへる事になるから、結局双方とくをするってわけだ。老人は俺の分が月四十クレジットときいて、がっかりしたようだった。それから二人はしばらく話しこんだ。——老人も、親の買った家の月賦をしょいこんでいるのだった。家の方は、とうの昔に住めなくなってとりこわされ、いまでは別の家をやはり月賦で買って住んでいる。月賦販売トラストの圧力で、家を借りるより、月払いで買った方が月あたりならうんと安くつくようになっているのだ。

「若いのに、四十クレジットであと三十年とは大変だな」と老人は同情にたえないような顔つきで言った。「一体あんたの祖父さんは何を買ったんだ？」

「さあ、何を買ったのかな」俺は言った。「買ったと言う事さえ知らなかったんだ」

老人はびっくりしたように俺を見た。

「四万クレジットといえば大した買物だよ、売渡証や保証書は？」

「親父が持ってたかも知れんが——俺は見たこともない」

「お前、まったく甘ちゃんだな」老人はつくづく呆れたように言った。「ものの値打ちってものを知らないのか。四万クレジットと言えば、親子三代かかってもはらい切れねえほどの

ものだぜ。そんなものを、何だか知らない、どうなったかわからない、なんてすましてる手はないぜ。一応現物がどうなったかしらべて見ろよ。スクラップになっていても、親父が転売していないかぎりそれはお前のもんだからな。もしまるまる残っていて、転売できたら、これはひろいもんだぜ。俺のボロ家でさえ、解体して売ったら、ちゃんと一年分の月賦代は出たんだから」

　老人は世間知らずの若者をさとすように、何としてでも品物の行方をさがせとくどくど言った。そして最後にちょっと意味ありげにこうつけ加えた。

「あの取り立て会社の連中にゃ気をつけた方がいいぜ。月賦屋の方は上品にかまえているが、あの連中なら何でもやる。――殺人でも横領でもな」

　老人に言われるまでもなく、そのことは長い間俺の胸に固いしこりになっていた。いったい俺の祖父は、こんなに長い月賦で何を買ったんだろう。それはいま、どこで、どうなっているのだろう？　とうに廃品になって土にかえったのか、それともまだ残っていて、誰かが持っているのか？　俺は自分をあきらめさせるため、四年という間、このことを思うまいとつとめて来た。知ったところでどうにもならないと思ったからだ。しかし今、それを見つければいくらかの金になるかも知れないという希望のもとに、あらたにこの問題をふりかえるようになった。それと同時に俺は今までおさえにおさえてきた怨恨も、またあらたによみがえってきた。――死んだ祖父は、自分の欲望のために、孫の俺がこんなにまで辛い日々を送

る破目になることを、知っていたのだろうか？　子孫を債務の軛につなぐことを見こした上で、なおかつ買うほど、それほどまでに切実な値打ちのあるものとは、いったい何だろう？下宿のぼろベッドの上で、俺は夜ごとうなされたように考えつづけた。苦しむのはいい、虫けらや、檻の中の獣のような生活もかまわない。だが苦しむのには、それだけの理由、それも具体的な理由がいるのだ。――何のために、俺は四年間を馬車馬のように働かなければならなかったか？　どんなもののために、これから先三十年間も働かねばならないか。俺の一生を食いつくすことにきめられている、そいつの姿を、ほんのひと眼でもいいから見たいものだ。

　金のこともあったが、むしろ復讐に似た気持で、俺はその品物の行方を知る機会や手がかりをねらっていた。しかし何といってもひまがなさすぎた。アイザワが何か知っているんじゃないかという気もしたが、奴にはとりつくしまもなかった。月賦会社にあたって見ようか、家の近所できいて見ようとか、プランはいろいろねったが、実行にうつす寸暇もなかった。それでも俺は、蛇のように執念ぶかく探す機会や、ちょっとの手がかりを待ち続けた。そしてついにある日――手がかりは向うの方からやってきた。

　その日、昼休みの時間に、事務所に俺あての電話がかかってきた。こんなことははじめてだし、取り立て屋以外に心当りもなかった。しかし電話の声は、ききおぼえのないだみ声だ

った。

「イノウエ・タロウ?」向うはきいた。

「ああ」

「本人かい?」

「そうだよ」

相手は長いことだまっていたが、ついに決心したように言った。

「あって話したいことがある」

「あんた誰だい?」

「月賦のことだ」

それだけで俺にとびつかせるに充分だった。

「今夜八時に仕事がおわる」

「下宿の方へ行こうか?」

「まずい——本通りの角で待っていてくれ。八時半」

猿面の姿がふらりと仕切りの後から現われたので、俺はあわてて電話を切った。最後に疑わしそうにこう言うのがきこえた。

「まちがいなく、本人だろうな?」

猿面は妙な顔で俺を見ていたが、俺はわくわくする思いを押えるのがやっとだった。

仕事がおわると俺はとぶように下宿へ帰った。門を出しなに、アイザワの車をちらと見たような気がしたが、かまっていられなかった。月賦のことで何か俺に知らせようとしている奴がいる。品物のことならありがたいが、どんなことでも知りたかった。あまり急ぎすぎて、時間がすこし早かった。本通り角には誰の姿も見えなかった。俺ははやる胸を押えて、もう一つ先の角まで行き、そこからひき返した。さあいよいよ始まるぞ、と思いながら。——通りの向うから、誰か黒い服の男が、道を横切ってきた。背の低いがっちりした男だった。向いには一台の車が駐車していた。男は角の照明灯の手前までくると、ちょっとたちどまって、俺の方を見た。

「イノウエか?」

彼は低い声で言った。俺はうなずいて近よって行った。色の黒い、眼の鋭いその男は、俺の顔を見るなり、驚愕の色をあらわして、口走った。

「イノウエ……じゃ、お前は……」

その駐車していた車から、薄水色の光芒が走った。男は宙にかけ上ろうとするように手足を縮めてのけぞった。俺は走りよって男の体をだきとめた。しかしその時は彼の顔は紫色に変色し、最後の痙攣の底からかすかなしわがれた呟きがもれただけだった。

「ちくしょう……アイザワの奴……」

うった車はライトを消したまま黒い獣のように走り去った。反対側の辻から、これも音も

なくパトカーが近づいて、四つ角の光景を見つけて赤ランプに灯がはいった。その時もう一つの影が、通りを横切って走って来て俺の体にぶつかるように男の体をささえた。

「逃げなさい、早く！」黒い服の娘は口早に言った。「三つ目の角を曲って待ってて」

俺は建物の暗がりを伝って、夢中で走った。有権者章のない俺を、警察の訊問から救ってくれた娘の顔を、見きわめるひまはなかった。角を曲った暗がりにぴったりよりそって俺は向うのようすをうかがった。その時俺は何か手帳のようなものを握りしめているのに気がついた。さっき男を抱きとめた時、内ポケットからすべり出たらしかった。

現場のごたごたは一時間ちかくつづいた。その間俺は辛抱強く待っていた。救急車も来て、やがて車はかえっていったが、娘はどう話をつけたのか、こちらへむかってあるいて来た。その時気がついたのだが、彼女はかるく足を引きずっていた。その姿にも、顔にも見おぼえがあった。

「こんばんわ」娘は暗がりの俺にむかってほほえんだ。

「なぜ助けてくれたんだ？」

「あら、御近所のよしみよ」と娘は言った。それで思いだした、下宿のすじむかいのアパートにいる、リエというかしこそうな娘だった。

「コンノはあなたになんの用だったの？」

「彼はコンノっていうのかい？」

「そう、私とおなじ探偵社の男。私はタイピストだけど、彼は下まわりよ」

それから彼女はするどくきいた。

「何の用だったの？　話してくれる？」

「よく知らない。今日の昼電話であいたいと言ってきた。あったら何も言わないうちにおだぶつだ」

「私の部屋へくる？　それともあなたのところへ？」リエはあたりを見まわして言った。

「君のところがいい、ただし裏口からだ。管理人は俺をみはってる」

娘一人の部屋は何となく思はゆかったが、その部屋には俺をくつろがせるところがあった。リエは飲物をと言ったが、俺が首をふるとすぐに話にかかった。お化粧をしていない顔は青白く、きつかったが、笑うととても愛らしかった。

「私はボスの命令でコンノを見はってたの」とリエは言った。

「同じ仲間をかい？」

「彼は雇いなのよ。それによく一人で儲け口を見つけては、ゆすりをしたりしてたんでね。信用にもかかわるし、私にしっぽを押えろと命令されたのよ。今度もなにか嗅ぎだしかけていたらしい。——その筋がまさかあなたとは知らなかったけど……」

「彼は俺に何か知らせてくれるところだった」俺はうめいた。「ちくしょう！　どうやら俺の知りたいことだったらしいのに……。幸運の鳥は、あったとたんに天国行きだ！」

「知りたいことってなんだったの？」
そこで俺は簡単に説明した。コンノがその日の昼、突然話を持ちかけてきたことから、彼にあった瞬間のことまで。
「まあ、ひどい話！」リエは俺の境遇にひどく憤慨したようだった。「このごろの月賦がひどいってはいうけど、そんなひどい話ってきいたことがないわ」
「別に働くのはかまわない」と俺は言った。「俺はただわけが知りたいんだ。わけっていうか——具体的な理由だね。その品物が見つかっても別にほしいとは思わん。ただそいつの上に唾（つば）を吐きかけてやりたい」
「そうやけにならないで。四万クレジットといえば、感傷の対象には少し大きすぎるわ」そう言うと彼女は眼をかがやかせて考えこんだ。「コンノは何をつかんだのかしら——ところで、あんたの手にもってるものなに？」
「ああ、忘れていた」俺はその黒い平べったいものをさし出した。「彼のポケットからおちたらしいんだ」
「彼の手帳だわ」リエは手にとってさけんだ。その声をきくと、俺は夢中で手帳をひったくった。ページの間から探偵免許証といっしょに、はらりと床に落ちたものがあった。ひろいあげて見ると、俺の写真だった。少し変色しかかっていたが、最近とったらしい。しかし手帳のなかみは、まるきり意味不明だった。オートペンで、字にも何にもなってないみみずののたくったような記号がびっしり書かれてあるのだ。

「見たってむだよ」リエはクスクス笑った。「私たちの方でつかってる一種の暗号よ。磁性インクで特別な記号をつけるの。解読機にかけなけりゃ読めないわ」
彼女はオルゴールのような小箱をとり出して、中に手帳をさしこんだ。ページがめくられ文意が声になって出てくるのを、俺は食いいるようにきいた。だが内容はがっかりするようなものだった。ありきたりの素行調査や、賭（かけ）の胴元のしっぽとかいったことばかりで、俺に関係のありそうな言葉はひとつも出てこなかった。
「だめね」とリエもがっかりしたようにスイッチを切った。「彼は自分の頭の中にしまって、自分だけで何かやろうとしていたのね」
そういいながら彼女は古びた写真をとりあげてちょっと眉をひそめた。
「この写真」
「あったぞ！」俺は手帳をめくりながら叫んだ。「やっこさん、個人的なメモには磁性インクをつかわなかったんだ」
コンノは考えたり、電話で話したりしながら、いたずら書きするくせがあったのだ。手帳の扉のかたすみに、鉛筆でごちゃごちゃと心おぼえが書いてあった。『月賦販売会社——電話番号、こいつ、いけそう。四万！』それから俺と親父の名前。反対側のすみには、『取り立て屋、高価な品物、行方不明、アイザワ』と書いて三本の線でむすび、アイザワの上に小

さな丸、高価な品物と言う字は何重もの円でかこんであった。それからその品物というところから線をひっぱって、かなり大きな字でこう書いてあった。——ついに見つけた！

「コンノは見つけたんだ！」俺は叫んだ。「俺に関係のある——恐らく祖父さんが買った品物を……」

「どうもアイザワがからんで、何か不正があるらしいわね」

「そうなんだ。殺された時、最後に言ったのが奴の名だ」

「待ってよ——そういえば彼はむかし、ちょっと月賦会社の仕事をやったことがあるわ」

「いつごろ？」

「そうね——四年ほど前」

じゃ俺がアイザワにつかまったころだ。何だかいよいよにおってくる。

「とにかくコンノは何かアイザワについて嗅ぎだしたのよ。それがあなたのおじいさんの買った品物と関係があるんだわ。そこをつっこんでみなきゃ……」

「残念ながら俺にはひまがないんだ」

「私がやってあげるわ」リエはきっと顔をあげた。「コンノが殺されてるんだし——彼がなぜ殺されたか、具体的な理由をつかみたいわ」

「ちょっと待ってくれ」俺はさえぎった。「俺の知りたいのは、その品物が何で、どこにあるのかということだ。殺人事件の方はあまり興味がないんだ」

「それをさぐれば、アイザワのことが出てくるわ」

「危険だ」俺は強く言った。「コンノが殺されてるんだぜ」

「平気だわ。あなたのためなら……」

もののはずみで言ってしまったんだろう。リエはあかくなった。俺もびっくりして棒立ちになった。考えてみると、俺達は初対面なのだ。

「とにかくやるわ。あなたの話きいたら、私、だまっていられなくなった」

「一人でだいじょうぶか？」

「ボスにも話してみるわ。——品物が何かということは、月賦販売協会にあたればすぐわかるんじゃないかしら」

俺は何の気なしに彼女の肩に手をかけようとして、はっとひっこめた。

「俺のために、無理しないでくれ。だがやってくれるんだったら——お礼の言いようもない」

「いいのよ、タロ」彼女はしたしみをこめてほほえんだ。「帰って連絡を待ちなさい」

下宿に帰って見ると、アイザワと猿の奴が来ていた。

「どこへ行ってた？」アイザワは俺の椅子に腰かけたまままきいた。

「逃げてたんだ」俺は奴の方を見ずに言った。

アイザワはフンと鼻をならした。
「おまわりにつかまらなかったのは大できだったな」
「あんた、あの男を殺したな」俺は猿にむかって言った。
「めったなことをいうなよ」猿は歯をむき出した。
「車の中にいたろう。俺は見たんだ」
「あの暗がりで見えるわけはなかろう」
これで猿はあそこにいたことがばれた。アイザワは立ちあがって、俺達の間にわりこんだ。
「あの男は何しに来たんだ？」
「知らない。電話であいたいと言ってきた」
「お前になにか話したか？」
「話す前に、ご存知の通りさ。あんたら、うまくやったってわけだ」
猿があっというまに俺をベッドへつきたおした。俺は鉄わくでしたたか頭をうった。
「死にぎわに、あんたの名を言ったぜ」
俺がいうと、奴は図々しくわらった。
「あの男とは古い友達でな。――あいつまったく気の毒なことをした」
それから奴はいきなり俺の胸ぐらをしめあげ、俺の腹に、ふとった膝をのっけて体重をかけた。

「よけいなことに鼻をつっこむな。お前は朝から晩までわきめもふらずに働かなきゃならねえことを忘れたか。怠けやがると監獄へぶちこむぞ！」
さんざおどかしたあげく、奴等は手をはらい、ネクタイをなおして出て行った。
「今日のことは忘れちまえ」出しなに奴はそう言った。

忘れろといったって忘れられるわけがない。問題は急に熱をおびはじめたのだ。俺はリエがどのていどやってくれるか、期待に胸をふくらませて待った。毎日の仕事が、急にのろわしくなってきた。あの足の悪いリエなどにまかさず、どんなにか自分でしらべにまわりたかった。だが、結局この方がアイザワたちの眼につかないでいいのかも知れない。たのむ、リエ。うまくやってくれ！　と俺は機械をあやつりながら祈るように空を見あげるのだった。
――だけど充分気をつけてくれ。
一週間めに連絡があった。あまりいい情報でないことは、電話の声ですぐ知れた。
「ボスはとり上げてくれなかったの。コンノは雇いだし、死んでも知ったことじゃないって――私一人でやってるので、手まどったのよ。ごめんなさい」
「何かわかった？」
「それがだめなのよ。タロ……」リエはがっかりしたような声で言った。「協会の本社へ行って、お祖父さんの住所の地区をうけもっていた支店の記録をあたってみたの。五十年前の

記録だから、倉庫の中を探さなきゃならなかったわ」
「台帳は見つかったかい？」
「タロ、知ってるでしょう。長期月賦の場合は、その品物の法定耐用年数の五分の一が経過すると、売買契約は消滅して、単なる債権債務だけが残るようになるの」
そこが昔の月賦販売制度とちがうところだ。今では俺も知っていた。昔は月賦の最高期間は三年ときめられていて、購買者が全額支払いおわるまで、所有権は販売側にあった。購買者は品物を転売できないし、販売者は支払い未済の間なら、いつでも品物をひきあげることができる。——しかし長期月賦制度になると長年月の間に商品の消耗がはげしくなり、価格が下って所有権が無意味になる場合が起ってくる。そこでこういう改正がなされたのだ。むろん商取引きの基本概念が大幅に変ったからこそ、こうなったのだが。
「だからね、タロ。期間がすぎると、債権を財務省に確認してもらって、債権台帳に記入するだけで、販売台帳は廃棄処分になるのよ。誰にどれだけの債権があるかという記録が、徴収部に残ってるだけで、何を売ったかを知るためには、購買者の方の記録を見るよりしかたがないの」
「支店に記録は残ってないかい？」
「あの支店は四十年ほど前、飛行機の墜落事故でもえちゃってるの。記録も何もみんな灰になったわ」

「ああ、そのことならおぼえてるような気がする」
「何ですって？　四十年前の話よ。あなた生れてないわ」
俺はちょっとぼんやりして受話器を見つめた。——なぜおぼえてるんだろう！
「売渡証がなかったかと思って、あなたの家もあたってみたわ。競売されて別の人がすんでたわ。競売品のリストから、あちこちあたってみてるの。——競売された時それらしい値打ちがあるものは、何も残ってなかったか」
「きっとアイザワがとったんだ」と俺はうめいた。「親父の政府株だってわかるもんか」
「アイザワといえば、彼は四年前まで月賦会社の下請け徴収員だったのよ——いよいよくさいわね」
その次の深夜業の時、俺はこっそりぬけ出してリエのアパートへ行った。彼女は月賦販売品のリストをひろげて、じっと考えこんでいた。
「価格のランクからあたりをつけようと思ったのよ」と彼女はつかれたように言った。「でもごらんなさい。四万クレジット代は深海用潜水艦から宇宙ヨットまで、四百種類もあるわ」
しかも価格のランクはその上何十階級もあり、最高百万クレジットまであるのだ。俺はすっかりたまげてしまった。そのうちきっと、地球や太陽でも月賦で買えるようになるだろう。
「それにこの品目だけとは限らないぜ」

俺は欄外の注を指さした。『オーダーメイドの場合は別途見積りいたします』

「そうなのよ。だけどお祖父さんの性格から、どんなものを買いそうかわからない？」

俺は思い出そうとした。祖父のことはぼんやりおぼえている。悲しそうな眼をした老人だ。とても潜水艦を買いそうながらじゃない。だがそれ以上のことは何一つ思い出せない。

「何もわからない」と俺は頭をふって言った。「四年前以前のことは、何一つおぼえちゃいないんだ。親父が死んで——猛烈に悲しくて、こわかった。家をとび出した。それだけだ」

「あなた、記憶喪失だったのね」リエは俺の手をとって言った。

「一度医者に見せない？」

「健康保険も、金もない」

「あたしのを使ったら？」

「いずれそうさせてもらうよ」

「ああ、あなたがおぼえててくれたらねえ！」リエはいらいらしてたち上った。

「少しはおぼえてるよ」俺はおずおずと言った。「家の中のことなら——小さい家だったからね。だがたしかにそんな値うちのありそうなものはなかった」

「昔、近所に住んでた人もそう言ってたわ。あなたの家でそんな高いもの、買ったことさえ知らなかったって……」

俺達は、はっと顔を見あわせた。

「するとそれは……」

「人眼につかないものだわ」

「小さいものだ！」

俺はリストにとびついた。四万クレジットのランクで小さいものといえば……。

「宝石だ！」俺はリストをたたいて叫んだ。「それにちがいない。小さいし人眼につかない。どこにでもかくせるし、盗むのだって簡単だ！」

「宝石だったら、値打ちは変らないし、今ならかえって当時より高く売れるわ」

「そうしたら月賦をかえしたって、二万五千クレジットは残るぜ」

「まあタロ、あなたお金持ちになれるわ」

「そしたら結婚してくれる？」

この言葉はおそろしく唐突に口をついた。自分で何を言ったかわかってないみたいだった。俺は唖然とし、リエはまっかになった。

「まあ、タロ、私こんな体で……」

「それがどうしたというんだ？」

その時、とりかえしのつかないことを言ってしまったような気がして、俺は狼狽した。言ってはいけないことを言ってしまった、と思ったのだ。

「まだ——まだ早いわよ。タロ」リエはやっと動揺からたちなおって言った。「宝石ときま

ったわけじゃなし、きまったところでどこにあるかわからないんだから」

「きっとアイザワが横どりしてるんだ。小さいものだから、こっそり盗んで……」

「待ってよ」彼女はもとのきびしい表情にかえって言った。「あまり早まらない方がいいわ。小さいものの、人眼につかないものとは必ずしも一しょじゃないわよ」

「じゃ、どんなものだ？」

リエは答えられなかった。しかしその時突然俺ははっきり思い出した。俺が病気で頭が痛くてねていた時――それは親父が死ぬ少し前だった――親父は一度戸口で誰かと押し問答していた。だめだ、あれは返さない、親父はたしかにこうどなったのだ。月賦代は三日のうちにはらってやる。

「親父が死んだ時、それはたしかに家の中にあったんだ」俺は言った。「だけど人眼につかないような値打ものなんて、家の中になかった。だからやっぱり小さいもので、どこかにかくされてたんだ」

「ひょっとすると、当時月賦代の徴収に来てたのは、アイザワかも知れないわね」

「きっとそうだ。――だから奴を洗ってみる必要がある」

だが俺の見こみはちがっていた。まもなく五十年前、販売会社から俺の家へ、品物をはこんだ運送屋の記録がみつかった。それによると、品物をはこぶのには、二人の人夫が必要だった。すると品物はそうとう大きなものだ。残っている伝票には、項目――奢侈品（しゃしひん）、貴重品あつかいの符号がついていた。俺はまた混乱してしまった。

「ところでね、タロ、あなたのパパが、若いころ、一時行方不明になってたことを知ってる？あなたと同じ記憶喪失で二十年も外国をうろついてたらしいの。古い戸籍では一たん死亡したことになってるわ」

「知らなかった――それがどうした」

「お祖父さんが四万クレジットの買物をしたのと関係あると思わない？」

「なぜだい？」

「何となくそう思うだけ――じゃまた」

電話を切ると後ろで耳ざわりなアイザワの声がした。

「勤務中に女（あま）ッ子と電話でいちゃついて、いいと思ってるのか？」

「今は昼休みだぜ」

奴は例によって俺の胸ぐらをつかんだ。

「おい」と奴はいつもと少しちがった声で言った。「あの小娘と組んで、いったい何をさぐってるんだ」

「あんたが知ってて、教えてくれんことをさ」

俺はせいいっぱい反抗的に言ったが、また恐怖におそわれた。

「よけいなことをするなと言ったろう」
「品物は何だ？　どこにある？」
突然奴は妙な声をたてて笑い出した。長くひっぱる、いやな笑い声だ。
「そんなこと知ってどうする気だ？」
「俺のものだからさ」
奴はもう一度、長々と豚のような声をたてて笑った。
「俺の知ったことかよ。お前はだまって働きゃいいんだ。あの鵞鳥娘に言っとけ。これ以上ひっかきまわすと、いい方の足もおっぺしょってやるってな」
リエのことをそんな風に言われて、俺は眼の前がまっくらになった。怒りにもえ、拳をにぎりしめて奴の姿を見送りながら、俺は必死になって思いつめた。――ああ、畜生！　この怒りに火がついてくれたら……。

俺はリエに話し、調査をうちきってくれるようにたのんだ。彼女が危険にさらされるくらいなら、俺はあきらめるつもりだった。リエの身がまもれるなら、一生涯見たことのない品物、三代ごしの借財に働きつづけるぐらい、何ともなかった。ちょうどその時は最後の手がかりが切れた時だった。俺達は夜おそく、むかし祖父から直接品物の仕様について相談をうけたという、もと機械工の老人をたずねていった。祖父が買おうとしていたのは、夢見る機

械――イマジネーターだった。体には副作用はないが、精神を蝕む人工の麻薬だった。祖父は狂人の五彩の夢を望んだのだ。
「でも結局買われなかったんですわい」もと機械工のよぼよぼの老人は言った。「むずかしいお客さんで、結局気にいらなかったらしい」
深夜の町をぐったりして帰途につきながら、俺はリエにこれで打ち切るよう懇願した。
「ああ、タロ。まだあきらめないで。何にもわからないようだけど、少しずつわかってきてるのよ。あなたにも話してないけど……」
「でも危険なんだ」
「関係者が、あなたもふくめて、いろんな謎にみちてるわ、コンノは月賦協会から非公式の依頼をうけていたらしいし、その前はアイザワと組んで、徴収の下請けをやっていた。あなたの家族の戸籍も、まるでわけのわからないことだらけだわ。だけどもうちょっとで、何もかもいっぺんにわかりそうな気がするの」
「だが、手がかりはもうないだろう？　アイザワをとっちめるにしたって、証拠は何もないし」
「たったひとつ、今思いついたわ」リエはたちどまって叫んだ。
「葬儀屋よ」
「葬儀屋？」

「ええそう。日記や愛用品は、よく遺体と一緒に永久保存するでしょう。特に故人の遺志でね。お祖父さんの遺体保存所をたずねたら、何か見つかるかも知れないわ」

「リエ、そこまでやってくれなくても――」

「いいの、私、あなたのためにしてあげるのがうれしいの」

俺達はたちどまった。人気のない舗道に、二人の影が長くうつっていた。

「キスしてくださる？」とリエは言った。

俺はその輝く眼を見て、突然ふるえ出した。アイザワを前にしたようにちぢみあがってしまい、手をのばすことも、そのひたむきな顔の上に身をかがめることもできなかった。するとリエがつと近よって、俺の唇（くちびる）に、固く食いしばった唇を無器用に押しつけた。俺のふるえは一そうはげしくなった。犯すべからざる一線を、ふみこえてしまったような、激しい後悔がまき起こった。

翌日俺は事故にあった。足場の下にいたとき、上から軽量鉄骨がおちて来たのだ。頭ががんと鳴って、安全帽のわれるいやな音がしたとたんに、頭の中に火花がちって気が遠くなった。

「大丈夫か？」と、まわりで叫びがした。「運のいい野郎だな、安全帽でけがはしなかったらしいが……」

「骨にひびがはいったかも知れん。救護班をよべ」

「その必要はねえよ」ききおぼえのある声がした。「この小僧は、俺が見てやる」

怒りをふくんだ抗議の声を、頭から無視しているアイザワの様子が手にとるようだった。気がついた時は、奴の車にのせられていた。

「ばれたらやばいからな」とアイザワは運転手としゃべっていた。「とりかえされるだけじゃすまねえ、ひどいことになるぜ」

「処分しちまえばいいのに」と猿は言った。「俺は手をひきたいよ」

「そうもいかねえ。あの小娘ぐらいになめられてたまるか」

起き上った俺を見て、奴は笑いかけた。

「坊や、お目ざめか？　工合（ぐあい）はどうだ？」

「やっぱりあんただったんだな」俺は言った。「あんたが盗んで、かくしたんだ」

「何をねぼけてやがる」奴は唇をまげてどなった。しかしその顔には狼狽が現われていた。

「あんたは親父の代からとりたてにきてて、それが何で、どこにあるか知っていた。だから親父が死んで、俺が家をとび出したすきにそれをとったんだ。そいつは五十年たってもまだ値打ちの変らないような品物だった」

奴は黙らせようとして、光線ピストルの銃身で俺の口をなぐった。だが俺はそんなことではへこたれなかった。――奇妙なことに、もう俺は全然ちぢみあがったりしなかった。

「ひょっとすると親父も殺したんじゃないか?」
「いいかげん、根も葉もないあやをつけるのはよしやがれ!」奴はとうとうどなった。「薄のろのくせに、証拠もないことをつべこべ言うな。お前は法律にきめられた通り、祖父の借金をせっせと返してりゃいいんだ」
「せめて、それが何だか教えてくれ」俺は哀願するように言った。「ひと眼見せてくれ」
奴の顔に、奇妙な優越の表情が浮んだ。人を小馬鹿にしたような、胸くその悪い眼が、俺をじろじろ見た。
「お前にくだらねえ智恵をつけたあの女に言っとけ」奴はせせら笑うように言った。「今日はそのことで来たんだ。お前も、あの尻の青い小娘も、これ以上鼻をつっこむな。これが最後の警告だ、うちの大事な坊やに入智恵して、これ以上義務を怠けさせるようだと、今度は片足ぐらいじゃすまないぜ」
「彼女に手を出すな」俺は強い声で言った。「俺がたのんでるだけだから」
「でっかい口をきくな」奴はもう一度俺をなぐりつけた。
「じゃ、お前から言って、手をひかせるんだ」
奴は俺を職場までつれもどした。走り去る車を見送りながら、胸の中に今までにない怒りが勃然とまき起るのが感じられた。

その晩リエとは行きちがいになり、警告をつたえられなかった。心配していると翌日の昼休みに、電話がかかって来た。
「葬儀屋、行ったの」リエの声は不自然にしゃがれていた。
「妙な男につけられたわ」
「リエ、君は危険なんだ!　いいか……」
「何もかもわかったわ。——お祖父さんの日記が見つかったのよ」
リエは、感情をおさえようと必死になっているみたいだった。
「品物は何だった?」
「やっぱり——宝石だったわ、どこにあるかもわかったの」突然彼女の声は激しくくずれた。
「ああ、タロ!　とても、とても電話では言えないわ」
「今夜帰ってゆっくりきく。それより君は気をつけないと……」
電話は乱暴に切れた。切れしなにすすり泣きがきこえたみたいだった。——俺は猛烈に気になって、仕事が手につかなかった。俺はうまれてはじめて早退けをした。労務主任は妙な顔をしていた。
門を出てとぶように走り、近道しようとして、モノレールの無人操車場をぬけた。その時、操車場の陰に、ちらっとリエの姿が見えた。俺は驚いてかけよった。
「だめじゃないか、こんなところに一人で……」

「でもあなたから電話があったのよ」リエはあおざめて言った。「三時にここであうって」
「そいつはへんだ！」俺は叫んであたりを見まわした。薄曇りの空の下で、操車場はしんとしずまりかえり、高架から蜘蛛(くも)の巣のように白く地上をはう軌道の上を、青い芋虫のようなモノレールカーが音もなくうごめいていた。
「とにかくここを離れるんだ」
俺はリエの腕をひっぱって走り出した。
「待って、タロ……」リエはあえぎながら言った。「あなたにききたいの？　お母さんのことおぼえてる？」
「いいや——俺は親父の手一つで育てられたんだ」
「お父さんが一生独身だったこと知ってて？」
「何だと？」俺はたちどまった。「俺が養子だったとでもいうのかい？　俺達親子は、似ているんで有名だったんだぜ」
「でも血はつながっていないのよ」リエは涙のいっぱいたまった眼をあげた。「私……あなたのパパのカルテをしらべたの。——先天的な性的不能者で、そのため精神的には強度のナルシストで……」
「やめろ！」俺はどなった。「親父の悪口を言うことは、たとえ君でも許さないぞ」
「でもあなたの本当のパパじゃないの」リエはふるえる手で一葉の写真をとり出した。「この写真、だれだかわかる？　お祖父さんの日記にはさんであったのよ」

「俺の写真じゃないか」少し変色したその写真を一眼見て俺は言った。「孫の写真をもって墓にはいっちゃ悪いか？」
「お祖父さんの死んだのは三十四年前よ。その日記に、どうして今のあなたの写真がはいっているの？」
俺は混乱した。——何か恐ろしいことがわかりかけていた。
「裏をごらんなさい」
裏がえした時、俺は脳天をどやしつけられたような気がした。そこには五十年前の日附けと——親父の名が書かれていた。そしてその横に、ふるえる字でこう記されてあった。——わが最愛の宝石！
「親父の若い時は、俺に似てたんだ」
目前の事実にむかって俺は最後の抵抗をこころみた。
「でも、そうまで似てる親子はいないわ。ふた子以上。ほくろの位置まで同じなのよ」
リエはちょっと息をのんだ。
「答えは一つしかないわ。お祖父さんが八十四年月賦で買った品物とは——あなただったのよ」
足もとの大地がくずれさって行くみたいだった。何ということだ！　あれほどまでに探し

もとめていた品物が、俺自身だったとは！　一日十四時間働き、この四年間休みなしに働き続けて、せっせと払いこんでいたのが、俺自身の月賦だったとは！　すると、俺は、この俺はいったい何なのだ？

「お祖父さんは、一人息子が生死不明になった淋しさから、最初はイマジネーターを買おうとした。でも、満足できそうにないので、息子そっくりの――アンドロイドを買ったんだわ。死んだら月賦協会がひきとることになってたの」

　そうだったのか……俺はそのアンドロイドなのか。老人の一人息子の面影を永遠にとどめるべく作られた、――月賦販売の、オーダーメイドのアンドロイドなのか。

「お父さんは放浪から帰って来て、そこにまばゆい自分の青春の姿を見た。だから、あなたをそのまま離さなかったんだわ」

　ナルシストの肖像――あれほど俺が愛した父は、汚ならしいインポテンツの変質者で、俺はその愛玩物だった。

「お祖父さんの記憶を消すために、お父さんは記憶装置をいじった。月賦がはらえず、あなたをつれて逃げようとした時もいじったのよ。これがあなたの記憶喪失(アムネジア)の理由よ。お父さんは戸籍を偽造してあなたを入籍し……」

「やめろ！」俺は叫んだ。「俺は月賦のアンドロイドさ。だからどうすりゃいいんだ」

「ああ、タロ――私、あなたがロボットでも、何だかまだ……」リエの顔は混乱し、舌がも

つれた。「やっぱり――あなたが可哀(かわい)そうだし、好きだわ。あなたをこんな眼にあわせた奴がにくいわ」

　俺は歯をくいしばってリエの顔を見つめた。俺だって――いや、俺は複雑な反応系をセットされた、愛玩用の機械にすぎないのだ。

「アイザワたちは殺人以外にもいくつも罪をおかしてるのよ。筆頭債権者の取り立て会社には、販売台帳のないのにつけこんであなたが商品で差押えの対象になるってことをかくしてるでしょ。いまみたいに、あなたを働かせてとりたてれば、彼は取りたて分の三十％の手数料がはいるからよ。そうやって転売先を探してるのよ。これは横領だわ。それにアンドロイドに人間をよそおわせて、普通の職場で働かせるのは、組合法とロボット労働法にふれるわ。特に最近はアンドロイド保護法ができて、アンドロイド虐待は、失権者虐待より罪が重いのよ」

「もういい、娘(あま)っ子。そのぴいぴい言う口をとじろ」

　倉庫の陰から、奴が光線ピストルをかまえて出てきた。俺はリエを後ろへかばった。

「警告はしといたはずだな、娘さん。おとなのやることに鼻をつっこむといたい眼にあうってな」

「取り立て会社のボスに、あなたのこと知らせたらどうなるの？」リエは気丈にやりかえした。「あの会社じゃリンチをやるんですってね。まるでギャングね」

「そんなこと知らせられると思ってるのか？」
奴はゆっくりと照星をこっちにむけた。
「殺す気か」俺は低い声で言った。
「どけ！　ロボットめ」奴は歯の間からしぼり出すように言った。
「どくもんか。お前の大事な商品に傷をつけたくはないだろう」
「どくんだ、坊や。お前にゃ関係ねえ。ロボットは人間のやることに口を出すな」
ふしぎなことに、今度ばかりは奴を前にして、少しもふるえが来なかった。事故で頭をうった時、抑制回路がどうかなったにちがいない。それを奴は知らなかった。ロボットは人間に抵抗できない。そう思いこんでいる奴は、リエの頭にねらいをつけながら、ゆっくり近づいて来て、俺をおしのけようとした。——その時俺は奴の右腕にとびついた。だが一瞬おそく、奴は反射的に引き金をひいた。水のほとばしるような音と、強いオゾンの臭いがして、光の束が俺の右脇腹をいぬいた。運の悪いことに、俺の体の一番金属の少い部分をいぬいたのだ。背後で悲鳴がきこえ、肉の焦げる臭いがたちこめた。この近距離ならば、俺のプラスチックを射通して、背後のリエを黒焦げにするくらい、わけのないことだった。
背後でいやな臭いをたてているリエの方を、俺はわざとふりむかなかった。可哀そうな娘——俺という、たかがロボットにあんなに肩をいれてくれたばっかりに……俺は彼女を愛しかけていたのだ。むろん俺は、愛玩用アンドロイドだから、肉体的な愛には肉体的な愛をも

ってむくいられるようにできている。しかし抑制装置のこわれた今では、それと別の仕方で愛しかけていたのだ。
「たて」俺は左手にうばった光線ピストルをにぎりしめ、ぶざまにころがったアイザワに言った。うたれた時、動力系の一部が切れたとみえて、右腕はきかなかった。だが俺には右でも左でも同じことだ。至近距離で、俺は五十キロワット光線ピストルの照星を、奴のハムみたいな顔にピタリとすえていた。奴はたちあがることもできず滝のように汗を流し、のどをぜいぜいいわせるばかりだった。
そのみっともない恰好（かっこう）を見ながら、俺は思わず笑った。——今度は、ふるえているのは奴の方なのだ。
「殺さないでくれ！」
奴はひりついた声でやっと言った。犬のように吐き出された舌を見て、俺はまた大声で笑った。それを見て奴の眼玉がとび出した。アンドロイドの哄笑（こうしょう）なんて、はじめて見ただろう。
「殺しゃしない」と俺は言った。「俺の機械は調子がくるったらしいが、まだ殺しやしない。殺人回避はロボット頭脳の基本的命題だからな」
俺は光線ピストルのグリップから、電源をぬきだして遠くへなげた。とたんに奴はバッタのようにはねおきて逃げ出そうとした。俺は足をひっかけて、奴に操車場のほこりだらけの床をなめさせてやった。左腕一本で奴の両腕を背中にねじあげると、俺は奴をひきずりたた

せた。

「殺しゃしないが、いまじゃ人間に抵抗することはできるんだ」俺は奴を倉庫の壁にむかわせた。「見ろよ。お前が殺した可哀そうな娘の姿を、しっかり見るんだ」

「かんべんしてくれ！」奴は脂汗をしたたらせて、叫んだ。「放してくれ、たのむ」

「よく見ろ」俺は奴の腕をねじあげた。ぐきっと音がして、奴の腕の関節がはずれた。奴は悲鳴をあげた。

「俺はもう本気になって怒ることも憎むこともできるんだ」

まだぶすぶす煙をたてているリエの死骸に、鼻がくっつきそうになるほど奴を押しつけながら、俺は片方の眼で操車場の向うを探した。——細っこいリエの死骸は、何だかひどく小さく見えた。顔の半分は完全に炭になっていたが、残った半分は奇蹟のように安らかな表情をしていて、ふせられた長い睫毛さえ残っていた。その顔はこう言っているみたいだった。いけないわ、タロ！　そんなことしちゃいけないわ！

だが俺は人間じゃないんだぜ。と俺は答えた。俺はこわれたアンドロイドなんだ。俺は憎悪や怒りを行動にうつすことができるようになったアンドロイドなんだ——俺は人間がつくり出したものによって、人間が孫の代までしばられるような、あのバカげた長期月賦制度をにくむ。俺自身もまた、人間によって作り出されたものだから、俺の怒りはいわば人類自身の反省のようなものだ。

「行こう」

操車場の向うで、青くぬられた貨物モノレールの長い列が、すぐそばを通る軌道にのりいれるのを見て、俺は奴の体を押した。

「どうするんだ？」奴は今汚れた泥人形みたいだった。したたる汗は俺の服をぬらした。

「俺はお前を殺せないんだ」軌条のわきにそびえる検車用プラットフォームにのぼりながら、俺は構内入れかえ用の牽引モノレールとの距離をはかった。無人モノレールのレーダーは、三十メートル以内の下側がブランケットエリアになっているはずだ。

「だが、お前をつかまえていることはできるんだ。つかまえたままねころんでいることだってできるんだ」

奴は俺のいう意味がわかったらしい。「やめてくれ！」とわめくと、猛烈にもがいた。だが俺は身動きもせずたっていた。

「なあ、あんたには三十年分、一万五千クレジットばかり借りがあったな」

俺は近づいてくる青くなめらかな芋虫の速度を目測した。

「ほかにもいろいろと借りがあったな——いま、その借りをかえしてやるぞ」

三十五メートルの距離で、俺は奴を横だきにしてレールにとびこんだ。泣きわめいて暴れる肥っちょの体を左手一本で押しつけるのは、じかし、ちっとも骨がおれなかった。自覚がおれに、アンドロイドの全能力をださせていたのだ。俺は奴の汗まみれの太い首を、メタル

コンクリート製軌道の鋭いエッジにしっかり押しつけ、眼と鼻の先にせまってくる列車の方へ向けることができた。死のように青く、ピカピカ光る切断装置のように音もなくのしかかる牽引モノレールを見ながら、俺は言った。

「ほら――返してやる」

奴の最後の悲鳴は、汽笛のように空へ吹きあげた。切断されて軌道のわきに転がりながら、俺の電子脳はまだ生きていた。軌道の下にはねとばされて、血を吹き出している首のない奴の死骸を見ながら、首だけの俺はいつまでも笑いつづけていた。

Dシリーズ

「セックスというものは……」グローバル電機(エレクトリック)KKの開発企画部長は、横にすわった、すてきめっぽうの美人グラマー秘書にいった。「……つまりセックスにすぎん」
「あたり前ですわ」秘書はすまして答えた。
「君はだまっとれ！」といって部長は立ち上って歩き出した。「要するに――いったい何だって人間はこうセックスに夢中になるんだろう？」
秘書はだまっていた。
「なんとかいったらどうだ！」部長はどなった。
「でも、今、だまってろとおっしゃいました」
「適当に相槌をうってくれりゃいいんだ」そういうと部長は部屋の中をグルグル歩き廻った。
「要するに、セックスとは、生理的にはクダらんもので、種族維持のための相互排泄作用にしかすぎん」
「じゃ、なぜ夢中になるんでしょう？」
「うまい、その調子だ」部長はいった。「つまりセックスとは――非常に味気ない種的必要性と、非常に貧しい生理的快美感の周辺に、数千年にわたる人間の意識によってあみあげら

れた厖大な神話の集積にすぎん。つまりセックスとは、その九十九・九パーセントまでが、〝セックスのイメージ〟にほかならない」
「すこし乱暴な結論じゃないでしょうか？」
「なぜだ？」部長は美しい秘書をギュッとにらみつけた。「いいか――本来、自然界においても、セックスなんてあってもなくてもいいんだぞ。ゾウリ虫は有性世代と無性世代が循環する。セックスがあったり、なかったりするんだぞ。植物は自家受粉で実を結ぶ場合があるし、アメフラシやカタツムリは、雌雄両性をそなえていて、オスメス両方の立場もあじわえるし、自分自身で交尾できる。栄養状態や、成長の度合でオスになったりメスになったりする動物がおる。オスメス両方ありながら、ただ一つの個体をのぞいて完全に中性化してしまう昆虫もいる。セックスは、必ずしも生物に基本的なものじゃないんだ。人間も数ある染色体のうち、男性側染色体の中のただ一個が――X染色体がはいるかY染色体がはいるかで、オスかメスかがきまるんだ」
「男と女ですわ」
「オスメスでたくさんだ」部長は立ち止って天井を見つめた。「だから、人間がバカみたいに狂ったように血の道あげるセックスとは、セックスについての文化、歴史的に構築されたセックスのイメージにほかならんのだ。歌、踊り、演劇、文学、絵画、彫刻、映画……すべてセックスのイメージをつくり上げ、またつくり上げたセックスのイメージ自体によって、

やつら芸術家はメシを食ってやがる——特に最近はひどいな。ええ？」
秘書は、上品にちょっと眼を伏せただけだった。
「見ろよ。このごろの芸術ときたら——やたらにセックスだらけだ。セックスは不潔だとか、汚ならしいとかいう、ジジイ連は、よってたかって息の根をとめられた。これはいい。だがな——ジジイをしめころして、今度は自分たちが主流派になったからって、今の芸術家と称する連中は、ありゃなんだい？　映画屋も、作家も、演劇屋も、踊り屋も、大きな顔したり、深刻な顔をして、もったいぶった手つきで、セックスを芸術にしたてやがる。セックスこそ、人間のもっとも深刻で、永遠の問題だとのたまうんだ。もっとも深い罪業と汚辱と美と愛と崇高さにあふれた、最大にして、最高の問題だとぬかすんだ。おれはセックスを描くんじゃない、人間の問題を描くんだといって、強姦や、密通や、倒錯や、乱交や、自瀆を描く。ところでそのつくられたものをわんさと見にくるバカものどもは、そんな〝芸術〟なんかを見にくるんじゃないんだよ。強姦を、有名女優のハダカを見にくるんだよ。また有名作家の描くクダラないセックス描写を読みたくて本を買うんだよ。映画館の中で、退屈な〝芸術〟をガマンして見ながら、問題のセックスを今か今かと待ってる連中の顔を見せたいよ。——こういう詐術という奴ア、二重の効果をもってるんだ。一つは、見にくるやつに、俺は安物のブルーフィルムやストリップみたいな、はずかしいものを見にくるんじゃない。高級な〝芸術〟を見にくるんだという、スノビズムを満足させ、もう一つは、非常にこった〝芸術的〟テクニックで描き出されるセックスをたのしめる。——そりゃまァ、ガリ版ずりのスーハーものよりは、大文豪が心をこめて書いたセックス描写の方が、手に汗にぎるにきまってる。しかしだな——バカバカしいのは、つくる方も見る方も、セックスそのものに何かがあると思って、大げさに肩肱はって見せる所だよ。セックスなんて、本来底の浅い、ごくくだらないものなんだ。人生の中で、薬味のようにごく小さな部分をしめているにすぎないものなんだ。薬味ばっかりを牛飲馬食するバカがどこにいる！　今の芸術家はその正確なプロポーションを忘れている。芸術的なブルーフィルムやブルーブックが一番の芸術だと思っている。題材の貧しさを、バクロしないために、ますますヤッキとなって、作品をエゲつなくする。——男と女がハダカになる。風呂へはいる時はだれだってハダカになるさ。人間の裸って——特に女の尻なんて、着物を着てる時よりはるかに汚ならしいもんだよ。それでセックスとは何だ？　五分ないし三十分、男が女の臭くて汚ならしいグチャグチャの穴の中で、摩擦するだけさ。脱糞みたいにくだらんもんで、脱糞の方がまだスマートで清潔だ。ええと——何の話だっけ？」
「バカみたい……」と美人秘書はいった。部長はギョッとして秘書をみた。
「そんないい方どこで覚えた」
「テレビドラマですわ」
「君はそんなもの見ちゃいかん！」部長はゲンコをふりあげた。「テレビの悪影響だ」

「セックスとは何だってお話ですか？」
「いや、その前――そもそもの始まりだ」
「ああ……」といって秘書はニッコリ笑った。「人間はなぜ、嫉妬するか――です」
「それだ！　なぜ人間は、特に女房族は嫉妬するか！」
「それ以前に――人間はなぜ結婚なんて妙な風習をのこしてるんでしょう？」秘書はいった。
「生活は豊かです。子供は人工子宮に人工授精することによって生まれ、人間の母親同様の慈愛をそそぐロボットマザーによって、国家の手によって育てられます。それなのに、なぜ人間は結婚して家庭をもちたがるんです？」
「さびしかったり――それに歴史的な遺制だな。家庭の意識の実体は失われとるのに、ヌケガラだけが、まだ生きつづける。人間の意識は、まだ洞窟時代なんだよ」
「嫉妬とは、ゲームの一種でしょうか？」
「ちがう！」部長は叫んだ。「少しわかりかけてきたぞ。嫉妬に関しては、スピノザの有名な定義があるが、あれは不充分だ。嫉妬は性愛よりも進化した感情だな」
「なぜ、人間は嫉妬するんでしょう？」
「それは〝魂〟の問題だよ」部長は高らかに天井を指さした。
「いいかね――自分以外の同性に愛情がむく。いや、行きずりの浮気でも、自分以外の同性と、もっとも裸の状態で接触すれば、そこに当然自分がその同性と、比較される立場に立たされることはさけられない」

「〝魂〟ってなんですの？」秘書は無邪気にきいた。
「人間の、心の一番奥深い所にある、どうしようもない認識や判断の主体だ」部長は深刻な顔をした。「自分が自分にむかって嘘をつけない領域だ。人間はみんなそれをもっている。そして誰も他人はのぞきこめない。――そこで自動的に判断されてしまったことは、本人の意志ではどうにもならん」
「だから嫉妬するんですか？」
「それに、浮気の相手だって、〝魂〟がある――だから浮気された女は二重の苦しみに立たされる。自分が夫の魂の中で、その同性と比較される立場に立たされること、自分のものである夫が、その相手の女の魂の中で同時に他の男性と比較されること」
　部長は突然電光にうたれたように立ち止った。――何でもないオフィスの雑談から、ふいにすばらしいアイデアがひらめいたのだ。
「これだ！」と部長はいった。「〝魂〟の問題だ。――君、すぐ工場へ行きたまえ」
「なぜですの？」
「いいから行くんだ。技師長の所へ……」
　美人秘書が見事なヒップをふって出て行くと、部長は電話にとびついて工場をよんだ。
「技師長を」と部長はいった。「いいか今からおれの秘書がそっちへ行く……」

一週間後――ひさしぶりに出勤してきた秘書の体を、開発企画部長は、ジロジロ上から下まで見まわした。
「フウン……」と部長はつぶやいた。「うまくいったか？」
「私にはわかりませんわ」と秘書はいった。
「よし、ぬぎたまえ」と部長はいった。「まもなく女房がくるんだ」
秘書はぬぎはじめた。ブラウスとスカート、ブラジャーと黒いレースのパンティ――すごく見事な、まんまるい乳房の先でうす赤い乳首がぶるんとふるえた。しみ一つない、輝くばかりに白い裸身のまま、秘書は恥らいも見せず立っていた。
「フウン……」部長はもう一度うなった。「よろしいぼくのひざにだっこしたまえ」
「だって……重くありません？」
「五十五キロだ。大丈夫……そう、もっとぴったりよりそって手をぼくの首にまいて……もうすこし股を開いて……」
甘くあたたかい息づかい、なめらかな皮膚、やわらかくはじけるような魅力にみちた乳房と内股……ふいにノックもなしにドアがあいた。少し姥桜(うばざくら)だが、美しい部長夫人がはいってきた。
「おやまァ、悪い趣味だこと」部長夫人は、すっぱだかの秘書をだいている部長をジロリと

見ていった。「でも、その子、裸になった方がきれいね」
「お前……」部長はちょっとふるえる声でいった。「この子には、セックスがあるんだぜ。完璧な奴を、工場でくっつけたんだ」
「まあ、汚ならしい！」部長夫人は眉をひそめた。「男って、みんな最低ね。――さあ早くその機械をおろして、小切手にサインして」
「すばらしい！」部長は夫人が出て行くと、秘書にキスの雨をふらせながら叫んだ。「魂のない機械とわかっていれば――ほんものの嫉妬は起こらないんだ。これはうけるぞ！」
グローバル電機(エレクトリック)製のアンドロイドDシリーズ――つまりダッチワイフ、ダッチハズのシリーズは――試作品四号から量産にはいった。議会に提出されかけていた反(アンチ)ピグマリオン法はうやむやにされ、猛烈な宣伝と売りこみによって、Dシリーズはどっと市場に氾濫した。グローバル電機ロボット製造部門のアセンブリイ・ラインは、八十パーセントまでDシリーズにきりかえられ、Dシリーズは F型月産七千、M型二千五百台のペースで、全世界におくり出されていった。月賦販売、割引制、賃貸制、ショウ、セカンドDをもとう……Dシリーズの性能は6型、7型から飛躍的に向上し、羞恥、招くような拒絶、泣き声、オルガスムスにおける叫びなど、人間同様、いや人間以上のデリケートな反応をしめすようになった。
8型からは、ロボットの方から〝挑む〟型もシリーズにくりこまれ、オーダーメイドで「痴

漢ロボット」さえつくられた（これはハイミスに圧倒的人気をよんだ）。なんといってもM型ダッチハズよりF型の注文が圧倒的に多く、そのバリエーションも、V（処女）型はじめ、倒錯専用型、老人愛玩用、肥満、グラマー、清純、年増、数多くつくり出された。普通型の五割り高になるデラックスニュータイプ〝オクトパス・スペシアル〟も、発売されるや猛烈な人気をよんだ。やがて他のロボットメーカーも、Dシリーズの発売を開始し、大幅なコストダウンがあり全世界のDシリーズロボット普及率は、工業国において〇・三人に一台すなわち一人平均三台に達し、もはやDシリーズなしでは、人類のセックスというものが考えられなくなった。

これでいい――とグローバル電機の開発企画部長は、一時は大満悦だった――これで、世の亭主族は、女房の嫉妬に苦しめられることなく、無限のセックスのバリエーションをたのしむことができるというもんだ。

だが――賢明な諸氏は、部長の満悦が、浅はかなものであったことを御推察になったであろう。嫉妬は単に異性間の愛情にかかわるだけのものでなく、人間の――特に女性の根深い本性であるということも……。

さよう、たしかに開発部長の満悦は、一時的なものだった。その証拠は、彼が自分のオフィスでハレムのサルタンよろしく目もくらむようなセクシイな、数多くのDシリーズ女性ロ

ボットの試作品にとりまかれながらまことに快々とたのしまぬ表情をしているのを見ればわかる。――なるほど、彼はセックスに関する夫人の嫉妬からはまぬがれた。しかし……。

「あなた！　早くこの小切手にサインして！」ドアがバタンとあいて、ひきつった表情の夫人が足音高くはいってきた。「知らないの？　製造部長夫人は、六台のすごいデラックス男性ロボットをもってるのに、また新しい、スーパー・ウルトラ・ニュータイプを買うんですってよ！　あの女は、もう七百種ものちがったDシリーズを経験してるのに、私はまだ四百二十種しか味わってないのよ。私もう、やけて、やけて……」

ＳＯＳ印の特製ワイン

宇宙艇の故障をなおすためにその退避港のある無人の星に着陸するつもりが、かえってえらいことになってしまった。操縦系統の簡単な故障と思っていたのに、軟着陸調整装置(ソフト・ランダー)までペケになっており、気がついた時は緊急脱出装置の赤いレバーをひくより、しかたのない事態になっていた。——セールスマンのケンと、助手のロボットののったキャビンは脱出噴射装置(エジェクター)にはじかれて暗黒の空にとび出し、宇宙艇の本体の方は、基地の一部にぶつかって、めちゃめちゃにこわれた。

キャビンの補助ロケットを吹かして着陸してみると、小さな居住ドームも空気製造装置も無事だった。そのかわり恒星間通信用の超電波(スーパーウェイブ)発振装置が完全にこわれていた。——これはある意味でもっと厄介だった。空間の歪みを通って光速の何万倍のスピードで伝播する超電波が使えないとなると——普通の電波では、一番近い基地まで連絡をとるのに七年もかかるのである。

「お前には、超電波発振装置はなおせないかね？」ケンはサン—Ⅲ号にきいた。

「だめですね」ロボットはいった。

「私の電子脳の計算容量では、長い時間をかけてデータをつみかさねていくより、しかたがありません」

「どのくらいかかるかな？」

「一万二千時間ぐらいでしょうか」ロボットはいう。「——約一年半です」

遭難者が、救助艇のくるまで何とかくらせるように、ドームの中には二人の人間が約半年くらせるだけの食糧があった。一人なら一年だ。それ以上——救助艇がくるまで半年以上かかるなどということは、もし通信設備が無事だったら、まずあり得ないことだったが——くらすにしても、多少工夫すれば、繊維やガソリンから食物を人工合成するだけの、小さな化学装置もあった。しかしそれにしても、七年は——。

「ふつうの無電で救難信号をうっておきました」ロボットはドームに空気をみたし、ほこりをかぶった居住設備をはたきながら、ケンにいった。「うちつづけましょうか？」

「ありがとう」ケンは宇宙服のヘルメットをぬいでソファに腰をおろしながらいった。

「だが、もういいんだ」

——突然はげしい疲労感がどっとおそいかかって来た。ドームの透明壁にうつる自分の頭が、すっかり白くなっているのをながめながら、ケンは今このどうにもならなくなった事態を前にして、自分が隠退を決意したことを知ってびっくりした。

「なあ、お前……」とケンはいった。

「見本の荷物をといておくれ」

「ここでは商売になりませんよ」
「商売はもうやめだ」ケンはため息をついて、ソファに横になった。「とびまわったり、悪あがきするのはやめにして、これからずっとここにいるんだ。食糧倉庫に、何か酒の肴になりそうなものはないか？」
ロボットが倉庫に行っている間に、ケンは見本用のカバンから酒瓶をとり出して封を切った。――口をつけると芳潤なワインの香りが鼻腔にあふれた。今まで彼は、自分の売っている酒があまりうまいと思ったことはなかった。それはその酒が、売りこまねばならない商品だったからであり、顧客の前で最大級の賛辞をならべて、うまがって見せなければならなかったからだ。今はじめて、酒と彼との間に商品対セールスマンという長年の緊張関係が解消し、うまれてはじめて一個の人間として一つの銘柄を味わうことができたのだった。――まんざらでもないな、と彼は口を拭いながら思った。だが、宣伝文句ほどじゃない。
日ごろ――この二十数年間となえつづけて来た、大げさな宣伝文句がすっかり洗いながされ、酒と彼との間に、二十数年ぶりの水いらずの関係がもどってくるまでに、ほとんど大瓶一本が空にされた。長い長い年月、ほとんど人生の半分以上にわたって、魂の表面にこびりつき、硬い甲羅か、鎧みたいになってしまった職業的な垢が、ゆっくりとはげおちていくと、その下からみずみずしくやわらかな疲労が蛹からかえったばかりの蝶のように姿をあらわした。――その赤ん坊のような、新鮮なうすい皮膚に、酒がさわやかにしみこんでいった。

「お酒を飲むと、酸素消費量がふえます」罐詰をあけてきたサン—Ⅲ号がいった。
「かまわん、これから毎日飲むことにする」ケンはげっぷをしながらいった。
「お前あんまができるか？　そうっとだよ」
電気を消して、ロボットに肩をもませながら、ドームの外のはてしない暗黒の宇宙をながめていると、その広大な虚無の中を、二十年間にわたってとびまわってきた自分の人生が、まばらな星と星の間に軌跡を描いてうかび上ってくるような気がした――。
星の自転につれて、セールスマンの星は沈み、いま、一人のくたびれはてた男の晩年の星がのぼってきた――だが、それもやがて沈むだろう。
「一年半たてば、超電波が使えます」
ロボットは肩をもみながらいった。「何とか生きのびて、また商売にかからないのですか？　私はセールス・アシスタントが本職です」
「お前は、きっとまた誰かに使われるよ。優秀だものな」ケンはいった。
「だが、私はほっといてくれ。ここで休むんだ」
ふいに、――それは酔いが本格的にまわって来たためかも知れないが――彼は感謝したい気持になった。この偶然の事故と、天啓と――そのどちらかが欠けていても、彼は今の幸福な状態になれなかったにちがいない。働きづめに働き、とびまわっている最中に壁に頭をぶつけて死んでしまうようでは、人間らしい生き方とはいいがたい。人間はある時期から、――

偶然の事態にであうか、抗いがたい叡知に導かれてか、またはその両方によって、自分の人生に気がついた瞬間から——自分自身のために生きはじめる。それは、自分の死のために生きはじめることであり、その時はじめて、人は世界と自分の人生を外から眺めることができるようになる。するとその瞬間から宇宙は、そのかくしていたやさしさを、人にむかって開いてみせるのだ。

「サン—Ⅲ号、わかるかね？　私は、今幸福なんだ」とケンはいった。

「わかりません」ロボットはいった。

「なぜ会社への義務に反して、商品見本を召しあがるのですか？」

彼は暗やみの中で、ほっそりとした瓶をだきしめ、そのラベルが見えないことに感謝した。何ものも——たとえそれが人間の開拓した宇宙の全領域にわたって、プラントと販売網をもつ、ギャラクトーゼ酒造トラストであっても、人間を最後まで義務にしばりつけることはできない。——自分の人生に気がついた人間を。

ドームの傍にソファをおき、その上に横たわりながら、ケンは一日中酒を飲み、暗い宇宙をながめてくらした。ここでは、銀河は天にかからずに地平近くを這い、天空には星の姿をまばらに、その凍りついたようなぼやけた光は、それが銀河系のものでなく、何億光年もへだてて宇宙の太洋の中にうかぶ、別の宇宙であることをものがたっていた。平坦で山というもののないこの星の表面は、そういった遠い星の照りかえしをうけてわずかに光った。もっ

とも近く、明るい青色巨星が地平からのぼる時、星の表面はテラテラと銀の鱗のように光り、酔った眼には、それが地球上の孤島の入江の奥から、さざなみに照りはえる月の出をながめているようにうつるのだった。

「サン—Ⅲ号。お前は酒が合成できるか？」

ケンは酒瓶の一本をさし出していった。「分析して、あの化学装置でつくれるかどうかたしかめてくれ。——見本の酒はもうすぐなくなる。死ぬまで酒を絶やしたくないんだ」

ロボットは酒瓶をかたむけ、腹の中のサンプラーに流しこんだ。人間が利き酒をやるように、そのカクタム製の唇がピチャピチャ音をたてるのがきこえた。

「単純な飲物ですね」ロボットはいった。「水、エチルアルコール、若干の多糖類、琥珀酸、微量のアミノ酸、酒石酸はじめ数種の果実酸、タンニン……」

「いいからやってみてくれ」

「でも、そのためには備蓄食糧を転用しなければいけませんが……」

「いわれた通りにしろ」

ケンは、深くは酔わなかったが、一日中酔っていた。酒瓶を手にしたまま眠り、めざめれば、少し肴をつまんで、また飲んだ。——そうすると、幸福な気持は次第にふくれ上っていき、何もせずに宇宙を眺めながら酒を飲んでいるということがうれしくて泣きたくなり、酒瓶にほおずりして、静かに涙を流すのだった。

「この酒は、まだ硬い」ロボットがつくった酒を口にふくんで、彼はいった。
「どういうことでしょうか？」ロボットは混乱した表情でいった。「液体が硬いとは？」
「熟成床(マチュリティ)の問題だよ」
「超音波をかけてみましょうか？」
彼はだまって飲みつづけた。

見本の酒をみんな飲んでしまうころ、ロボットのつくる酒は、少しましになってきた。
「いろいろやってみましたです」サン—Ⅲ号はいった。「思いのほか、複雑な組成をもっているのですね。——分析精度はもうひと桁(けた)あげてみたのです」
「よくやった。これなら我が社の製品とほとんど同じだ」ケンは合成葡萄酒を味わいながらいった。「だけどギャラクトーゼ酒造の製品は必ずしも最上じゃない」
「ご冗談を！」ロボットはたちまち公式的反応を示して、踵(かかと)をカチンとならし、胸をそらした。「ギャラクトーゼ酒造のワインこそ、地球文明の粋です！　宇宙の涯(はて)にあっても、その香りはあなたの最良の友です！」
「コマーシャルはもういい」ケンはいった。「知ってるか？　サン—Ⅲ号、私たちの売ってる酒は、文明の粋なんかじゃない。大量生産の合成ワインにゃ、心(ハート)がないんだ」
「心臓ですって？」ロボットはまた混乱した。——電子脳が過熱(オーバーヒート)しそうなくらい……。

「そうなんだ、サン—Ⅲ号。そりゃ、合成方程式は考えられるかぎりのりっぱなものだ。だけど、これは文明の粋なんかじゃない。そんなものがわかる人間は、とうの昔にいなくなっちまったんだ」

そう語りながら、ケンは、自分がひょっとしたらそれがわかる最後の人間ではないかと思った。奇妙なことだが——彼には酒の味がわかった！　なぜかということはちょっと考えてみて、すぐわかった。地球の「旧家」で、古い天然果実を使った酒がうんとストックされていた彼の家、飲み助だった祖父、美食家だった父……彼自身、十五の時から酒の味をおぼえ、そのために詩人志望をすてて（詩人になりたがっている詩人など、ろくな詩人になれないにきまっているが）酒のセールスマンになった。若干はあったにちがいない詩人の素質は、彼に売りこみにおける第一流の弁舌をあたえた。——二十数年たって、詩才の方はそれ以上のびなかったが、美食家の舌は、その間しずかに成長しつづけた。自社の一般向け製品に対する横柄な軽蔑は、年ごとにふくれ上り、そのため彼の売りこみ文句はますますソフィスティケートされてきた。そして今は——

今ははっきりと、一昔前の時代には——いやひょっとしたら今も地球の古い地方のどこかに——「文明とよばれるほどの高貴な味わいをもった酒が、存在したことをさとった。——彼は子供のころ、酔っぱらった祖父の手からついでもらった、あの一ぱいの酒の味が静かによみがえって来た。

「酒というものは……」彼は少し呂律(ろれつ)のまわらなくなった舌でいった。「本当は大げさな大量広告(マス・アド)で、大量販売(マス・セール)するものじゃないんだ。それは文明と同じで、促成大量生産することもできなければ、やたらにガブ飲みするものでもない」

「では、どうするんです？」

「〝酒あります〟と書いて、外へ貼り出しておけばいい。飲みたい人は飲み、うまいと思った人は、また飲みにくる。味はどうですか？　などときいてもいけない。そんなことは、つくった本人がよく心得ているべきことだ」

「企業はなりたちませんね」

「文明は企業化できない」彼はいった。「それは時代だけが作り出せるものだ、――俺たちは文明と人間の間に割ってはいって、その関係をメチャメチャにしてしまった」そういうと彼は手をふった。

「お行き。俺はちょっと眠る」

ロボットには、最近のどの職能ロボットにもとりつけてあるような反覆学習回路がセットしてあった。――同じ命題を何度も何度もバックして、徐々に修正値を正していく方法である。ロボットは、これによって、人間と同じように「工夫」する。サン―Ⅲ号はすぐれたロボットで、与えられた命題を改良することに熱心だった。――もっともほかに仕事がなかったからだが……。

「人間はなぜ、酒を飲むのです？」こんな基本的なことを、サン―Ⅲ号は知りたがった。「酒」というものを、その化学的構造から一歩進んで、概念としてとらえたがっているようだった。「疲労回復のためですか？　ストレス解消のためですか？　単なる習慣ですか？」

「みんなちがう」彼は呟いた。「それは文化なのだ」

ロボットは首をかしげてじっときいていた。「ごらん」と彼はふるえる手でドームの外をさした。「太陽系はあのあたりだ。――この星から三千光年もはなれている。地球もそこにあり、私はここにいる。こんなにはなれているのに、私には、地球上の人類が、何千年にわたって磨き上げた酒の味がわかる。――つまり、それが、〝文化〟だ」

「そうすると――」ロボットはいった。「文化とは歴史の最良の部分のエッセンスをいうのですね」

「その通りだ、サン―Ⅲ号」ケンは眼をつぶってニッコリ笑った。「私はうれしいし、幸福だ。私はこんな宇宙の涯にいても最良のものを知る能力があり、それを想像することもできる。――最良のものが存在して、それを最良のものだと判断できる人間がいれば、そこで、〝文化〟がなりたつんだよ。――もっともこの酒は最良のものじゃないがね」

忠実なロボットは、主人のいったことを理解しようとし、それを仕事の上に何とか反映させようと努力していた。酒を合成する仕事のあいまをみて、ロボットは救難信号を送りつづけた。

SOS、SOS、コチラ宇宙艇QT六〇八〇乗員……退避星VOP三〇五X上ニテ遭難……至急援助乞ウ……。

電波ははてしない宇宙空間をゆっくりわたっていって、七年かかって辺境基地にただよいつき、そのパラボラアンテナの端をかすかにたたくだろう。——だが、それまでにも、ひょっとして不定期船(ランバー)や探検船にキャッチされないでもない。もし主人が生きているうちに救助されれば、彼もまた、もう一度主人とくんでパンチのきいたキャッチフレーズや、最大多数の人の心臓をくすぐる、いかすコピーを案出する仕事にかえれるかも知れない。

「お前、この酒はどうしたんだ？」ケンはある日びっくりしてロボットにたずねた。

「申しわけありません。水の再生装置が、少しいたみだしたんです。イオン交換樹脂のスペアがないので……」ロボットはいった。「だから、その中には、あなたの排泄液が若干まじっているかも知れません」

ケンは、眼をむいて、それからゲラゲラ笑い出した。

「すばらしいぞ！　サン—Ⅲ号、こいつはすばらしい酒だ」ケンは盃をぐっと飲みほした。

「昔、葡萄酒踏みの女たちははだしで、スカートをまくりあげて葡萄をふんだ。日本のサケつくりの男たちは、裸で熱い米の中にはいってかきまわしたという——。手づくりの酒の中には、そういった連中の汗や、体液や——ひょっとしたら女たちの毛さえはいっていたろう。そういうものが、酒に特別の味わいをあたえたかも知れないんだ」

ロボットは、無表情にきいていた。ケンは舌つづみをうって、二杯目をのんだ。

「こりゃすばらしい。サン—Ⅲ号、この酒には、文明の味わいがしてきたよ」

食糧はほとんど酒にかわってしまい、ケンは酒びたりと太陽灯にあたらぬ生活のため、青ぶくれて横たわっていた。——そんな状態なのに、彼の舌はいよいよ冴え、その日その日に出来てくる酒の味わいの微妙なちがいさえ、いいあてた。ロボットはその批評をいちいちきいては、修正回路にくみいれた。

「お前はとてもすばらしい」ケンはぶつぶついった。「すばらしい酒つくりだ」

「私ひとりでは、もうとても追いつけません」ロボットはいった。「あなたの〝舌〟の批評がたよりです。ロボットには、人間にとっての〝最良のもの〟がどんなものか想像できませんからね」

「いいことをおしえてやろう。——娯楽設備の中にマイクロレコードはないか？」

ケンはロボットに命じて、クラシックの部門からシュトラウスの曲をえらばせた。

「昔、酒をつくるのには、どこの国でも酒つくりの歌を歌ったものだ」ケンはいった。「その年々によって、新しい歌ができたこともある。音楽は、酒をうまくするといわれたものだ。きいてごらん。——何かヒントになるかも知れない」

ロボットは、シュトラウスに耳をかたむけ、そのリズムとメロディを解析して、化学式の

微妙な変化との対応を見つけ出そうとした。――だが、本当をいえば、それは無理な仕事だったかも知れない。
「いいぞ……」ケンは新しい酒の味を味わいながら、もつれた舌でいった。
「この酒には音楽の味がする」
だが、それはひょっとしたら、水の再生装置がいよいよだめになってきたからかも知れなかった。――ロボットは黙々と有機成分の多い水から酒を再生産し、救難信号をうちつづけた。
SOS、SOS、コチラ宇宙艇QT六〇八〇……。
食糧はなくなり、今は繊維製品から酒をつくっていた。ロボットが反覆修正する合成方程式は、ますます複雑微妙なものになっていった。
「すばらしい。サン―Ⅲ号……すばらしい酒だ」ケンは酒をやっとのことで舌にころばせながらつぶやいた。「こんなすばらしい酒を、誰か他の人間に飲ませてやれたらな……そうしたら、失われかけている文明――私が死ぬといっしょに、ほろびてしまうかも知れない文明が、人々の胸によみがえるかも知れない。……人間は、長い時間をかけてあたえてやれば、最良のものを識別することができるはずだ……」
「すると、これが最良のものでしょうか？」
ロボットは返事を待っていた。ケンは最後の製品を口にふくんで、長い間喉を通せないでいた。――彼はもう、眼が見えないのだった。やがて、やっとのことで、そのひと口をごっくりのみこむと、彼はかすかに首をふった。

「いいや、そうじゃない、サン―Ⅲ号……」ケンはやっとのことでいった。「これはまだ、最良のものとはいえない、この酒にはまだ――心がない……」
そういうと彼はガックリ首をたれた。
主人の死を確認したロボットは、冷静に機械的に死体を凍らせた。それから彼は――どうしていいかわからなかった。命令し、指示をあたえる人間のいなくなった今。……だが、長時間にわたってあたえつづけられた、仕事の課題だけは、まだその学習回路に残っており、主人が最後にあたえた批評――新しい修正命題が、未解放のポテンシャルとして、生きていた――サン―Ⅲ号は、その刺激にもとづいて最後の合成にとりかかった。酒が出来上ってくると、ロボットは凍った主人の死体の胸を切り開いて心臓をとり出し、それを酒の中につけた。
今まで一度もつけ加えられたことのなかった新しい成分が酒の中に滲出してくると、サン―Ⅲ号はそれを腹の中にいれて分析してみた。たしかに今までとはかわった酒になっていた。しかしそれが最良のものであるかどうかを判定する主人はもういなかった。――とはいえ、それによってロボットは、最後にあたえられた課題を消化したのである。
それからロボットは、いつもの通り救難信号をうちに、無電機にむかった。――もっとも彼自身は、不向きな仕事をやりつづけて、自分の電子脳の一部が狂いかけているのに、全然

気がつかなかった。——演算、記憶素子群の中で彼の本来のコマーシャルを考え出す仕事の領域と、他の領域とが、ショートしかけていることを……。サン—Ⅲ号は、無表情に無電機の前に坐ると、機械的にキーをたたきはじめた。

ＳＯＳ、ＳＯＳ、ＳＯＳ印ノ超特製のワイン……人類文明の最良ノモノ……コノ酒ニハ、ハートガアリマス……。

宗国屋敷

雨の上ったあと、宗国は、庭下駄をつっかけて庭へ出た。——立葵が、大地から噴き上げるように、勢いよくのびているあたりにたって、彼は後ろに手をくみ、快く冷え、鮮烈な湿気にみちた空の匂いを嗅ぐように、眼をつぶり、顎をのけぞらせ、大きく息を吸いこんだ。海棠やあおき、南天、山茶花、大きな楓などが、その庭先に無造作に繁り、その青々とした葉に、きらめく水滴をいっぱいにまといつかせ、あるかないかの微風がわたるたびに、かすかに身ぶるいして、真珠のような雫を、惜しげもなくふるいおとしていた。

宗国は水たまりをさけて、まわり道しながら、ゆっくりそれらの木々の間を、わたっていった——一つ一つの木、一枚一枚の葉を、愛撫するような眼つきでながめながら……。下枝からおちる雫が鶯色の頭巾や、茶の袖無し羽織の肩をしとどにぬらした。もう屋根をこすほどになった、手植えの槇の前で、彼はちょっとたちどまった。——雲が切れて、強い初秋の日ざしが、斜めにカッと照りつけ、木陰に無数の光の縞をつくり、ゆれた槇の葉からは、あるかなきかの湯気がたちのぼった。

「ゆき……」

槇の木を見あげながら、宗国は、おだやかな声でよんだ。……背後の、遠い母屋の方で、

かすかに歌うような返事がきこえ、やがてひたひたと、小走りに、ぬれた土をふむ足音がちかづいてきた。

「はい、旦那様……」

ゆきの、白いひっそりとした顔が、枝を見上げている宗国の眼の隅にうつった。

「槇の木に毛虫がついた」と宗国は、ふりむかずにいった。「とっておくれ——あまりむごいことをせずに」

「はい」

「それから……」といって、宗国はちょっと笑った。「この前みたいに、枝をこがしてしまってはこまるよ」

ゆきは、頭をさげた。

かすりの筒袖に、赤い帯をしめたゆきが、ぬけるように白い腕を、枝の方にのばすのを、ちらと見て、宗国はまた足をはこんだ。

植えこみをぬけた所に、林を背にして離屋が立っていた。一隅に茶室がある。——ちかづいて行くと、茶室の中から、たまがちらと白い顔をのぞかせ、すぐ消えた。離屋の縁先にたつと、裏をまわって、ふっくらとした顔だちのたまが、すすぎ水をはこんできた。

「それほど汚れていない」と宗国は、すすぎ盥をもった、たまにいった。「母屋から、ここまで、歩いてきただけだ」

「でも、ぬかるんでおります」たまは、てきぱきと、袖を帯にはさむと、宗国の足もとにしゃがみこんだ。「おみあし、おかしくださいませ」

縁に腰をおろすと、宗国は、たまに足をあずけた。——ぬるい湯の中で、たまのしなやかな指が、足の指のまたを、一本一本愛撫するように洗いながす快感にひたりながら、遠い野面を走って行く銀鼠色の雲の団塊と、まっ暗な雨脚に眼をはせ、彼は胸のうちにつぶやいた。

——おれは、いま、幸福だ、と。

この閑居の地を見つけたのは、まったく運がよかった。ここなら——と宗国は思った——ここなら、誰にもさまたげられることはあるまい。

帯にはさんだ手拭で、たまが足をふくと、宗国は縁にあがって、ふりかえった。

「茶をたててくれぬか？」

「はい——」たまは、すすぎ盥をもって立ち上りながら、一揖(いちゆう)した。「お待ちくださいませ。——手を清めてまいりますほどに」

宗国は、離屋の廊下をまわって、茶室の方へ歩いて行った。短い渡り廊下を渡る時、裏手の方で、下男の作造が、まきをわっているのが見えた。——宗国の姿を見ると、手を休め、頭を下げる。

「湯は、早めにたててほしい」と、宗国は、陽のかたむきかけた、西の野をながめていった。

「お出かけでございますか？」

「うむ」と宗国はうなずいた。「いつぞや、谷向うの物見の具合がわるくなっている、とたまからきいた——なおしたか？」

「なおしました」と作造は頭をさげた。「けものが、いたずらしたらしゅうございます。——そろそろ古くなったものもございまして、またとりかえねばなりませぬ」

「この次、必要なものをはこばせよう」宗国は、ちょっと眉をひそめてつぶやいた。「品物の数と名を、書き出しておくとよい。——私の留守に、誰もちかづいたものはおらぬな？」

「ございませぬ——」作造は首をふった。「このあたりを通るものは、鳥と獣と、鼠ばかりでございます」

「しっかり、みはっておくれ」

そういいすてて、宗国は茶屋にはいった。炉の中では、芦屋風の釜が、頭の芯にしみいるような、湯のたぎる音をたてていた。——炉際にすわって外を見ると、そこからの風景は、曠野が植えこみや岩にまったくかくれ、しずかな深山の中のように思えてくるのだった。時おり、木々の梢をゆすってわたって行く風の音と、釜の鳴る音がきそいあって、静謐(せいひつ)さをいっそうきわだたせた。れんじ窓の障子をあけると、すぐ眼の前に、背戸の岡が見え、筧(かけひ)を走る水音と、間をおいて、コーン、コーンとあたりにこだまする、ささやかな音がきこえてきた。それにしばらく耳をかたむけ、それから、ちょっと首をふって、彼はふところから、手ずれのした、和綴じの本をとり出した。——茶人だったという、曾曾祖父のしるしたそのお

ぼえ書きを、一枚一枚めくって行き、一葉の絵の所で、手をとめた。（枯山水……）彼は、達者な筆で描かれた、その絵と文字を、くいいるように見つめた。（これはいい――今度は、これをつくらねばならぬな）

じっと眺めているうちに、あちこちの山を物色してみつけた岩をゆきやたまにはこばせ、作造に指図して、そのさびきった庭をこしらえるよろこびが、胸のうちにふくれ上ってくるようだった。――それは、身うちのふるえるような、蠱惑的な、秘密のよろこびだった。誰にも知られたくない、孤独なたのしみだった。

茶器をはこんできたたまに、宗国はいった。

「鹿おどしの音が、すこし大きすぎるようだが」

「低めてまいります」とたまはいった。

「ゆきもよんでやりなさい」

茶屋のわきの、納戸にたまがはいると、岩をたたく竹の音はよわまった。――宗国は、自分のいったことを、後悔する気持になっていた。低まった鹿おどしの音が、彼を現実にひきもどしたのだった。

（これも……）と彼は、たまがとり出した、のんこうをまねた手づくりの茶碗を見ながら思った。

（あの鹿おどしの音も、――すべてにせものだ。私が、これらのものの上に描く幻が消えて

しまえば……）

にじり口からゆきがはいってきて、末座にすわった。――しずかに茶をたてるたまの、寸分の隙もない切り柄杓や、ふくさざばきの手つきを見ながら、宗国は思った。

（少し、ゆるみを教えてやらねばなるまい。――この炉の灰のならしあとも、あまりきっちりしすぎている）

一服喫しおわったあと湯にはいると、宗国は離屋に行った。陽はまだ高かったが、一室に床がのべられてあった。――渋染めの山袴をとりながら、宗国は、つぶやくようにいった。

「今日はどちらの番だったかな？」

隣室に、さらさらと衣摺れの音がちかづいてきた。――境のふすまがあくと、輝くような白綸子の夜衣の肩に、つややかな丈なす黒髪をすべらせたゆきが、しきい際に手をついて、深々と頭をさげていた。

「旦那様……」とゆきは消え入るような声でいった。「お情けをうけさせていただきます」

宗国の傍にはいる時、ゆきは肩から夜衣をすべらせた。――その名の通り、雪をあざむく肌に、真紅の腰のものがもえあがった。宗国は、そのすべすべした体を、ものもいわずに抱きよせた。

おわったあと、宗国はものうげに立ち上って、着替えをし、それから口もきかずに外へ出た。――出かける時の、主人の不きげんさを知る女たちは、だまって門の所へ見送った。

「おそうなったわ！」
そうはきすてるようにいって、門を出た彼の姿が、せかせかした足どりで、夕闇のしのびよる岡のむこうに消えると、まもなく鋭い爆音のようなものが、岡のむこうから遠去かっていった。——闇の深まって行く門のあたりで、女たちは、家の中にあかりもつけず、いつまでも見送っていた。

宗国は、五日目の夕方、つかれきった様子でかえってきた。——女たちと作造は、ころげるように門の所へかけ出して、彼をむかえた。
「おかえりなさいませ……」と女たちは、宗国にすがりつくようにしていった。「この度は、お長うござりました」
「湯にはいる……」ひきむしるように、衣類をぬぎすてながら、宗国はいった。
「沸かしてございます」と作造はいった。「お留守の間も、一日も欠かさず……」
「酒の支度を——作造、お前せい」宗国はだだっ子のように、足をばたばたさせて、爪先にひっかかった下着をはねとばすと、二人の女の子をふりかえっていった。「お前たちもいっしょにはいれ」
湯の中でも、宗国は、子供のようにふざけちらした。——そうやって、この五日間に身にしみこんだ、いやなことをふるいおとし、自分をとりもどそうとしているみたいだった。ぬ

れてぬめぬめと光る、二人の若い女の裸身を両腕に抱きしめ、うおっと叫んで、湯の中にもぐったりした。
湯から上ると、ぬれた体をふこうともせず、宗国は、作造のしつらえた膳の前にすわった。ゆきとたまも、着物を着ることを許されず、ぬれた体のまま、席に侍（はべ）らされた。
「お風邪を召します、旦那さま……」作造は、廊下の所から顔を出していった。「女たちはよろしゅうございますか、あなたさまは……」
「ひっこんでおれ！」と宗国はどなった。「それより、床でもとっておけ！」
ぐいぐい盃をあおって、胸まで赤くなると、宗国は境の襖を乱暴にあけた。
「くるのだ！」と宗国は、裸のまま、たちはだかって二人にいった。「今夜は二人いっしょだ」
奥座敷のうす闇の中に、三つの裸身がもつれながらたおれこんだ。——夜目をもあざむく、二つの白い裸身が、宗国をはさんでのたうった。宗国の叫び、たまの甲高い笑い声、ゆきのすすり泣きが、からまりあいながら、室内にみちた。
半刻ののち——。
表障子をあけはなった、座敷の中に、宗国は、もとのおだやかな表情で、たまの膝を枕にねそべっていた。
宗国のみ、夜着をつけ、たまとゆきは、一糸まとわぬ裸身のままだった。

明りを消した座敷うちに、まひるのような満月の光がいっぱいにさしこみ、たたみの上に、楓や松の枝の影を、くっきりとおとしていた。——その冷たい白銀の光にぬれて、端然とすわった二人の乙女の裸身は、まるで二体の白陶の像のようだった。たまは、そのまろやかな膝を、宗国にかしたまま、笛を吹いていた。ゆきは、宗国の足もとで、琴を弾いていた。笛の音は、月光にぬれた野面を、嫋々（じょうじょう）とうねりながら、はてしなくわたって行き、琴の音は、すすり泣くように、笛の音にまつわりついた。

笛の音がやみ、琴の絃が、潮騒のような余韻をのこしてなりやむと、宗国は、深い満足の溜息をついて、体をおこした。

「たま、ゆき……」と宗国はいった。「私は、しあわせだ。——お前たちのような、やさしい女子にかしずかれて……」

「私たちこそ、旦那さまのおかげで……」とゆきはつぶやいた。

「やっともとの、やさしい旦那様にもどられた」たまがはしゃいだ声でいった。「おかえりになった時は、なんだか、おそろしゅうございました」

「外へ行けば、いやなことがあるのだ」宗国は、眼をつぶって首をふった。「いやなことが、数かぎりなくある。この家で、お前たちといる時だけが——庭の木をながめ、山をながめ、水の音をききながら、茶をのんでいる時だけが、一番しあわせなのだ」

「ずっとここにいらっしゃればよろしいのに……」とたまは愛らしくいった。

「そうも行かぬ」宗国は悩ましげな声でいった。「いろいろと……今の世の男には、いろいろとあるのだ」

それから、また、おだやかな顔つきにかえって、宗国はいった。

「さあ、もうよい。着物を着なさい」

そのときゆきが、はっとしたように、庭先に顔をむけた。

「だれか、まいります」と彼女はいった。

いままで鳴いていた地虫の声がぴたっとやみ、林の中の闇を、何かが近づいてくる気配だった。

宗国は、きっとなって、床の間をふりむいた。——蜥蜴（どかげ）の眼のような、まっかな光が一つ、暗がりの中に明滅していた。

「作造は？」と宗国はいった。

「作造はさっき、——」とたまはいった。

露をおいた草をふんでちかづいてきた、黒い影は、木の下闇のきれるあたりにたちどまった。

「逃げなさい」と、低い、せきこんだ声が木の影からきこえた。「もうすぐここへ、大ぜいやってくる」

「どなたかな？」宗国は、少し、ふるえをおびた声できかえした。

「誰でもいい。——気どっている場合じゃないんだ」
「とがめられるようなことは、しておらぬつもりだが……」
林の中の人物は、ちょっと混乱したようにし、しばらくだまっていた。
「そりゃそうかも知れない……」つぶやくような声がきこえた。「おれにゃわからんが、何かお前さんの方で、思いあたることがあるだろう。——とにかく逃げた方がいいと思うね。えらい見幕だったぜ……」
それだけいうと、また足音は、林の中を遠ざかって行った。——宗国は、うろたえたように立ち上った。
「作造！」と彼は上ずった声で叫んだ。
「旦那さま！」林と反対側の茂みをわけて、作造がとび出してきて、庭へひざをついた。
「誰やら、大ぜいまいりまする」
「何をしておった！」宗国は、ふるえながらどなった。
「二日前、大鹿の群れが、このあたりを横ぎって、警報装置の電線をずたずたにきりました」と作造は答えた。
「いま、修理のために、電源を切っておりましたところ……」
「たわけ！」宗国は叫んだ。「で、いまはなおったか？」
「三カ所をのぞいては……」作造は、ふところから四角い、小さな箱を出した。「つけられ

ていらっしゃったようでございます、いまお乗物をしらべましたら、これが……」
「たま、レーダーを……」宗国は叫んだ。
たまは、裸身をひるがえして、違い棚の所へいった。地袋の中に、ぼうっと青白い光がうきあがり、その中に白い輝点が無数にちらばっていた。
「すっかりとりまかれた！」宗国は、色を失ってつぶやいた。
「何者でございましょう？」作造はいった。
「私にはわかっている」宗国は、あわただしく衣類をつけながらいった。「つけられたとあらば、見当はつく。——たま、ゆき、早う着物をつけい」
「どうするのでございますか？」ゆきは、あわてた風もなく、ききかえした。
「いっしょに逃げるのだ」宗国はわめいた。「お前たちだけは、絶対に手ばなさぬわ」
だが、宗国が、二人の女の手をひいて、外へ出たとたん、眼のくらむような光が、中天に炸裂した。——数箇の照明弾が、青白い炎をあげて、あたり一帯を、ま昼のように照らし出していた。あっと、狼狽した宗国のまわりに、ヌーッと黒いパトカーの影が、いくつもうかび上った。完全消音装置をつけ、猫のように音もなく獲物にしのびよれるパトカーが……。無数のサーチライトが、輝いた。
「宗輔！」
破れるような、甲高い女の声が、頭上からひびいた。——それを聞いたとたん、宗国は、

わなわなとふるえ、大地にひざをついた。

夜空から、巨大な怪鳥のように、消音ホバークラフトが舞いおりてきた。――頭上にきて、はじめてローターのまきおこすはげしい風の音がきこえた。――庭先へずしんと着陸すると、中から、背の高い、怒りに眼の釣り上った豪奢な服装の中年の女性と、これも猛々しい表情の若い女性が、ハイヒールの音高くおりてきた。あとから、肥った半白の髪の男と、肩幅のあるがっちりした男がおりてきた。警官の服を着た、でっぷりした人物も……。

「宗輔！」中年女性は、キンキンした声で叫んだ。「なんです、これは！――学校の勉強には身を入れず、かくれてこそこそ、何てバカみたいなまねをしてるんです！」

「すみません……ママ……」と宗国は、十九歳の宗輔にかえって、口もきけないほど、おどおどしながらいった。「でも……ぼくは、……」

「この家……」中性女性――と見えたが、つよいライトが斜めにあたると、たびたびの整形手術のあとがはっきりわかり、五十をとうにこしているとわかった――は、汚ならしいものでも見るような眼つきで、こった造りの、藁葺きの家を見まわした。「何です、これは？こんな野蛮人の住むような家、どこがいいんです？」

「タワー・シティの最高級地にある邸が、気にいらんのかね？」がっちりした大男――市の教育委員長で、宗輔の叔父にあたる人物はいった。「君は、個人用のプールまで、もらってるじゃないか」

「それにしても、よくできてる」肥った男、――市の青少年カウンセラーをやっている男はいった。「私は、ちょっと建築史もやりましたがね。――これは二百年ぐらい前まで、日本にのこっていた、古代住宅を、実によく復元している。どうやって、こんなものを知ったのか、さすが、先祖に茶人をもつだけのことはありますな。――これを、君一人でつくったのかね？」

「ええ……」宗輔は、ちょっと頬を赤らめた。「作造に手つだってもらって――でも、ずいぶん長いことかかりました」

「その間、勉強の方は、お留守になってたわけね」母親の眼が、ギラッと光った。「成績が、さがりっぱなしと思ってたら、こんなことをしてたのね」

母親は、つかつかと宗輔にちかよると、耳の下をはげしく打った。――よろける宗輔にむかってもう一度ふり上げた手を、カウンセラーがおさえた。

「まあまあ奥さん……」とカウンセラーはいった。「どうってことはありません。昔の子供が、プラスチックで模型の家をこさえたり、お人形をつかって、いろんな空想をたのしんだりした、あのお人形さんごっこや、ままごとと同じことです。――若いころは、誰でも、いろんな空想をするものです」

「でも、この子はもう十九ですよ」母親は、居丈高にいった。「いい年をして、お人形ごっこだなんて――どうして、ほかの若い人たちのように、宇宙ヨットや、水中狩猟や、エアカ

ーレースや、もうちょっと青年らしいあそびに夢中になれないの？」

「いや、奥さん――宗輔くんは、連中より趣味が高級なんですよ」カウンセラーは、汗ばんだ手をふりまわしていった。「これは――私の見た所では――まったく老人趣味なんです。彼は、年のわりに、はるかにふけているんです」

「まあいやだ！」若い女性――宗輔のフィアンセは、吐きすてるようにいって、ペッと唾を吐いた。「二十歳前の癖に、老人趣味だなんて……」

「どうして？――趣味は、人の好き好きでしょう？」

「そうは行きません」母親はきっとなっていった。「この子の死んだ父は、宇宙庁長官で、剛胆なパイロットでした。剛胆な男たちの中でも、もっとも男らしい男でした」

「そのかわり、ずいぶん無茶もやった……」と、カウンセラーはつぶやいた。

「君！　私の兄に、けちをつける気か？」教育長は、ちょっとすごんだ。「宗輔くん――君も、パパの名をはずかしめない男にならなきゃならんのだぞ。――今は宇宙の大開拓時代だ。全地球の男という男は、みんな命知らずの宇宙船乗りになり、剛胆な宇宙戦士になり、不屈の開拓技術者にならねばならん時代だ。地球のことは、体のよわった老人と、しっかりした女性にまかせ、男なら、宇宙のフロンティア最前線に挺身しなければならん時代だ。無辺在の虚無にいどんで、自分の知恵と力とありったけのエネルギーをため――こんな男らしい、英雄的なことはないじゃないか」

「いやです――」宗輔は、母親にうたれて、腫れ上った耳の下をおさえて叫んだ。「ぼく、英雄なんかなりたくない。宇宙なんかきらいです。あんなまっ暗で、荒涼として、何にもないとこ……」

母親がたまりかねたように、反対側の耳をうった。宗輔は、とうとう耳をおさえて泣き出した。

「こんな家、さっさと焼いてしまってください」母親は、威厳を見せて、もと世界連邦宇宙庁長官夫人の権威でひっぱってきた地もとの警官隊に命令した。「そちらの、汚ならしいロボットどもは、何なの？」

「いましらべた所、この二体は宇宙船乗組員用の成人用アンドロイド（人間型ロボット）を改造したものですな」警官の一人は、さわぎも知らぬげに、つつましやかに眼を伏せて立っている、ゆきとたまを、顎でしゃくった。「中古品をどこかで買って、肉付けと電子脳だけ、自分でとりつけられたんでしょう。電子脳は、最新式の、えらく上等なのを使ってます」

「成人用アンドロイドですって？」宗輔のフィアンセの娘が、のどの奥で、うなるような声でいって、宗輔をにらみつけた。「じゃあなたは――この汚ならしい、木偶人形と、いやらしいまねをしてたのね？　私を一人前に満足もさせられないくせに、陰にかくれてこそこそとこんな人形と、いちゃついたのね」

「やめてくれ！」宗輔は悲鳴をあげた。「それだけは……ぼくが、そこまでしこんだんだか

ら」

娘は、警官の手から、光線銃をひったくると、つかつかと、ゆきとたまの前に行った。

「旦那さま……」と、ゆきは、気づかわしそうにいった。

「宗国さま……」とたまはいった。

「宗国さまだって？」娘は唇を歪めた。「まあいやらしい。名前まで、老人くさいものにかえていたのね」

娘は、手をのばして、まっ赤にぬった尖った爪で、乱暴にゆきとたまの着物をはぎとった。白玉のような胸がむき出しになっても、二体の美しいアンドロイドは、無抵抗に、ひっそりと立っていた。——ゆきはその長い睫毛をふせ、たまは愛くるしいほほえみをうかべて……。

「なにさ……」筋ばって、陽やけして、そばかすだらけの、背の高い娘は、一瞬かっともえあがる嫉妬の炎に、息をはずませた。「なにさ、この泥人形！」

「やめて！」宗輔は、叔父と母に腕をおさえられながら、身をよじって絶叫した。「やめてくれ！」

娘の手から、オレンジ色の炎がほとばしって、神々しいばかりに美しい、アンドロイドの胸をきりさいた。——どこかの装置が狂ったのか、たまの方は、鈴のような声をたてて笑い出し、ゆきの方は、くりかえししゃべり出した。

「お情けをうけさせて頂きます。……お情けをうけさせて頂きます……お情けをうけさせて……」

「お情けだって？　まあいやらしい！」娘は口を歪め息を荒らげて叫んだ。「これでもくらうがいいわ！」

もう一連射くらって、紅蓮の炎につつまれて地上にたおれながら、ゆきと名づけられたロボットは、なお眼をふせて、つつましやかにくりかえした。

「お情けを……お情けを……お情けを……」

宗輔は、何か一言さけんで、母と叔父の腕の間で、がっくり気を失った。——屋敷に火がかけられ、作造と名づけられた召使いロボットもろとも、炎々と夜空をこがす炎につつまれた。

「いいわ、おばさま……」光線銃を警官に投げかえした娘は、息をはずませ、額の汗を手の甲でぬぐいながら、むきになった表情でいった。「こんなことで、私、宗輔さんを捨てたりしないわ。——私がきっと、宗輔さんを、きたえなおしてあげる。男を、ほんとうに男らしい男にするのは、女の役目ですものね」

「あなたにそういってもらうと、ほんとうにありがたいわ」母親は、はげしく感動した様子で、片手をのばして、娘の肩をつよくつかんだ。「ほんとうに、——あなたと宗輔といれかわっていてくれたら……」

「お言葉ですけど、私が男なら、宗輔さんみたいな女性はまっぴらよ」娘は無理につくった

微笑をうかべた。「私といっしょに、宇宙のどこまでも行ってくれる女性——あの汚ならしい宇宙生物狩りに、一しょに行ってくれる女性がいいわ。私、射撃Ａの腕前よ」

「宗輔くんは、いいフィアンセをもってしあわせだ」と叔父はいった。「姉さん、二人を早く結婚させたらどうですか？　そうしたら宗輔くんも、ちっとはかわるだろう」

「そうね。三人で力をあわせれば、この子をたちなおらせられるかも知れないわね」ぐったり気を失っている我が子の体を、教育委員長といっしょにひきずって、ホバークラフトの方へ行きながら、夜空に火の粉をまきちらしてくずれおちる屋敷——宗輔が、自分で「宗国屋敷」と名づけていた家をふりかえって、母親はチョッと舌うちした。

「ほんとに、日本じゃすぐ見つけられるもんだから、こんなカナダの奥地につくるなんて——呆れた子だわ」

「どうして、誰も彼も、男はみんな宇宙へ出て行かなきゃならないんですかね？」あとからついて行きながら、肥ったカウンセラーは、口の中でぶつぶついった。「繊細な心をもって、地球で自然を愛でながら、ひっそりくらしたいって男がいたって、別にかまわんじゃないですか？」

「じゃ、お前は知ってたんだな」かえって行くカナダ警察のパトカーの一台の中で、ハンドルをにぎった警官は、隣にすわった老警官にいった。

「ああ——前からパトロールの途中、ちょいちょいここらへんにより道してたんだ。ここらへんは、ほんとに景色がいいからな。そのうち、あの変な家を見つけた。最初はインデアンの小屋かと思ったが……」

「気づかれなかったのかい？」

「警戒網をはってたが、よく故障してたよ。あの女たち——ロボットを見た時にゃびっくりしたね」

「のぞいてたのか？」ハンドルをにぎった警官は、ちょいと老人をつついた。「このおいぼれのぞき屋(ピーピングトム)め」

「よくしこんだものだよ」老人は溜息をついた。「あの雌ロボットたちが、あの若僧にかしずいている様子は——ほんとうに何というか、女のやさしさとしとやかさにあふれ……」

「お前、包囲した時、途中で見えなくなったな」と若い警官はいった。「知らせに行ったんじゃないのか？」

「まあね……」と老警官は言葉を濁した。「たとえ、こしらえものにしても、ほんとに何というか——いい生活だったなあ、日本趣味か老人趣味か知らんが、とにかく、優雅な生活だったな」

「しかし、どうやって、あの若僧が、あのロボットをしつけたんだろう？——なぜ、そんなことを知ってたんだろう？」

「何でもあれの曾曾祖父さんの、日記か何かをよんだらしいぜ。――それに昔の生活のことが、いろいろ書いてあったんだな」

「すげえお袋だったな」若い警官は肩をすくめた。「それにあの、フィアンセって娘……」

「このごろの女どもは、みんなあんなさ……」老警官はつぶやいた。「あんな、気の弱い、神経の繊細な若僧にしてみれば、むりもないやな。――お袋は、後家のがんばり、親父は英雄だ。若い娘ッ子といえば、男とはりあって、男を負かしちゃよろこんでる。――喧嘩となりゃア、男よりはるかに強い。何しろヒスを起すからな。あんなたけだけしいのにとりまかれちゃ、昔風に憧れるのも無理もないよ」

「女がやさしかった時代なんて――そんな時代がほんとうにあったのかな」

「おれは来年もう百歳だよ」老警官はいった。「おれの曾祖母さんは、日本人だが、やさしかったよ。――今でも、曾祖母さんが子供のころよんだって、少女雑誌がのこってるが、昔は、――特に昔の日本の女ってのは、すごくやさしかったらしいよ。気の弱い若僧が知ったら、夢中になって憧れるのも無理ないよ」

「女のやさしさか……」若い方は肩をすくめた。「信じられないな。――あのガラッパチの女どもにやさしさだって？」

「もう、今の世の中じゃ、どこにもとめようたって、もとめられるもんじゃないからな。人形でもつくって――それにしこむよりしかたがあるまい。昔ののどかな生活――そんなもの、

こしらえものの夢の中にしかないだろうよ」老警官は、夜空を上昇して行く、旅客用ロケットの、赤い焔の尾を、眼で追いながらつぶやいた。「なにしろ、荒々しい時代だからな」

機械の花嫁

——題名だけ、マックルーハンの "Mechanical Bride" の盗作——

一

「退屈だなあ……」とエミがほえるようにいった。「遊廓にでも行こうか？」
「よしなよ。バカバカしい」マリがねそべったまま吐きすてるようにいう。「あんなとこ行ったって、どうってことないよ」
「だけど、ほかにすることもないじゃン」
アンが、はらばいになって見ていたシート・テレビを、壁にむかってほうりなげながら大あくびをした。
すえきった部屋の空気。倦怠（けんたい）の午後——外は五月の、やりきれなく青い快晴。
フランス窓の外では、芝生の上に、すっぱだかの女たちが、ごろごろねころがって肌をやいている。——ふとりすぎのむくむくした体、でなければ、ゴツゴツ骨っぽい体、あつかましくもり上ったぶよぶよの乳房、はずかしげもなくもしゃもしゃとしげってギラギラ光っている、どこか猛悪な感じのする恥毛……。プールの上にも一人、プラスチック・ボートの上で、だらんと口をあけて、だらしなく眠りこけている。プールのわきでは、贅肉（ぜいにく）をとるために、ボート練習機や、自転車をふむ女たち——。

だが、——誰に見せようとして、肌をやくのか？　誰に讃美され、誰の気をそそろうとして、贅肉をとるのか？
「ヘーイ！」アンが庭へむかってどなる。「男郎買いに行かねェか？」
芝生の一人が眉をしかめてうす目をあけ、ものうげに手をふってごろりとねがえりをうつ。小さな草の葉のいっぱいついた臀（しり）が、ぶるンとふるえてこちらをむく。——ボート練習機の女と、自転車の女は、ふりむきもせず、歯をむき出して一心に腕を動かし、ペダルをふむ。陽にやけた筋肉がもりもりと動き、汗がキラキラ光りながらしたたりおちる。
「ふン！」アンは、もそもそ絨緞（じゅうたん）の上に起き上って、横腹をボリボリかきながら毒づく。「日がな一ン日、ごろっちゃらして——芸のないっちゃありゃしない」
「あのこたち、ボクシングとレスリングをはじめたんだってよ」マリがなまあくびをしながら顎をしゃくる。「バカバカしい——ほんとに気が知れないわ」
「あんたにかかったら、なんでもバカバカしいだね」エミが、ちょっと吸った煙草を、灰皿にねじりつぶす。「行こうよ——こう気がくさくさしたんじゃ、やりきれない」
「遊廓へ行って、気がはれるかねェ……」マリは、横っ腹をボリボリかきながら、うっそりと立ち上る。「ろくなタマがいないじゃないの」
三人は自堕落な恰好（かっこう）で、のそのそと外へ出た。——レーダー・アイでその姿を見つけた無

人タクシーがいそいそとよってくる。だがエミは、手をふっておっぱらう。――天気もいいし、別にいそぐこともないんだ。ぶらぶら歩こうよ。

五月――空がはためき、青葉がぬめぬめと光る。ひやりと快い風、ふりそそぐ陽光の金箭(きんせん)、なにもかもくっきりと、底ぬけに明るく――そして、やりきれない五月。そのむなしい明るさの中を、女たちは、みたされないいらだちを胸に抱きながら歩いて行く。体の中に何ものかがうずく。アンは、体を斜めにして、手をうしろにくみ、いやいやするように首をふりながら歩いて行く。エミは通りすがりに、柘植(つげ)の若枝をピシッとむしりとって、それをピュッ、ピュッと音をたててふりながら行く。マリは、石でもなんでも、目につくものはやたらにけっとばす。――おかげで彼女の靴の先はささくれだってしまった。

みたされない？――なにが？

女たちにとって、すべてはあたえられているではないか？　ぜいたくも、ひまも、美食、パーティ、旅行、ギャンブル、観劇、スポーツ、そして悦楽も……。これ以上、何がみたされないというのか？　だが、彼女たちの胸の底には、みたされぬなにものかが、うずき、うごめき、心をどすぐろくむしばんでいた。思いきりけばけばしく化粧して――エミ、化粧もなにもない、うそさむい頭髪はもじゃもじゃ、だらけきった表情で――アン、ギスギスと、高慢ちきで侮蔑的なまなざしで――マリ、女たちはみるからに不機嫌そうな顔つきで、ぶらぶらだらだらと歩いていった。――さんさんと陽のふりそそぐ、明るくさわやかな五月の街

路に、そこだけうっとうしく、まがまがしい、一瞥(いちべつ)しただけで頭痛が起りそうな、一団の黒雲が動いて行くように……。

幾何学的な美しい建物の配列された大都市の中に、そこだけなにか、うす汚れたような、妙なコケットリィを感じさせる小住宅のならぶ一廓があった。角にけばけばしいコーヒーショップがあるが、路上にならべられたテーブルに、さすがにこの時間では、まだ客のかげもない。――細いひげをはやした日にやけた男が一人、居眠りをしている。

その角をまがると、せまい通りになる。通りの入口をまたぐ。悪趣味な鉄骨のアーチとネオン、両側にならぶ、ちょっと見には小ぎれいだが、一歩小路にふみこめば、たちまち俗悪さがプンプンにおう、間口のせまい二階建ての家々〝男郎屋〟がならぶ。赤と青のペンキをぬった籠の中の、ローラーカナリア、思わせぶりにほされた、派手な色彩の男もののトランクス、ピーコック調のロングソックス、爪弾きのギター、ものうい ハモニカのメロディ、低い柵にかけてある脂染みたエクスパンダー……。ポマードや、シェイビング・ローションや、男性用化粧品の臭いをかいで、マリの鼻孔はふくれあがり、眼はギラギラとかがやき出す。

「およしよ、みっともない」エミは、それをみて口をまげ、ペッ、とつばをはく。「バカバカしいといったのは誰だい？――そんながっついた顔をするんじゃないよ」

「ちょいと、お姉さん……」

低い、しゃがれたような声が、ドアのかげからささやきかける。
「よってらっしゃいよ。色男がいますよ、お姉さん方……」
「あそんで行きませんか？」別の、さびた声がいう。「口あけですよ。――たくましい、サービスのいいのがそろってますよ」
アンの、だらりと弛緩した顔の中で、眼が糸のようにほそくなり、いやらしい、にぶい光をおびはじめる。ポカンとあけた口から舌を出して、何度も唇をなめまわす。――男たちは、家の窓からのぞき、戸口の奥から手まねきし、柵にもたれてウインクする。ヒューッと口笛が鳴る。ギターの男は、ねっとりと粘りつくような声でうたい出す。髭のそりあとの青い、日やけした男がよってきて、ニッコリ笑う。上半身裸で、もり上った筋肉を誇示して見せる男、にやけた恰好で流し目をつかい、香水をプンプンさせている色白の男――中には、はずかしげもなく一物の恰好がはっきりわかるぴったりしたタイツをはき、これ見よがしに腰をくねらせるやつもいる。
「ヘッ！」エミは、虚勢をはるようにいう。「どいつもこいつも、不司なケダモノばかりだ」
「ちょいと、あの男、いいじゃない？」
マリがせきこんだ声でいう。――金モールの肋骨をつけた、まっ赤な軍服を着て、濃いひげをはやした肩幅のひろい男が、戸口にもたれて、ピカピカの長靴をはいた脚を組んでいる。マリの方を見て、男は二本の指をちょいとあげ、粋な敬礼をしてみせる。

「あんなの、見かけだおしだよ」とエミはいう。
「いいかげんに、どこかへ上らない？」アンが、欲望におしつぶされたような、変に動物的な、かすれた声でのろのろという。「通りぬけちまうよ」
「エミったら、いつでもこうなんだ！」マリが、キンキンとがった声でわめく。「見栄ばかりはって、いいところを通りすぎちまうんだ」
「うるさい！」エミはいらいらどなる。「いま上るさ。――いい店を知ってるんだ」
だが、もうその通りははずれに近く、「いい店」はあまりなかった。――しかたなしに、エミは、あてずっぽうに、あまりパッとしない店にはいって行く。
「いらっしゃい！」
あまりできのよくない男たちがかけよってきて、三人の手をとる。――一人は、腋臭のにおいをつよくしすぎて、胸がむかつきそうだ。
「ここがいい店？」
マリは皮肉たっぷりにいって、戸口をはいったホールの中をねめまわす。――けばけばしい、安っぽいインテリアだ。
「よそうよ、こんなとこ。うす汚いよ。――途中にもっといいのがいる店があったじゃない？　ねえ、アン」
「私、どこでもいいわ……」

アンは、顎を胸にうずめるようにして、上眼づかいに、糸のように細くした眼を光らす。だらしなく着たワンピースの、もり上った胸が、おもくるしく起伏して——彼女がこうなったら、もう発情した野獣と同じだ。

「気にいらなけりゃ、あんただけ別の店に行くがいい」とエミは、毒々しい声でいう。「どこだって、同じさ」

「お父さん！　お父さん！　お客さまですよ」

男たちが、奥にむかって叫ぶ。

痀瘻病の老人が、黒い服を着て、杖をついて出てきた。髪は白いが、のっぺりと長い、青白い顔には、ひげもしわもない。色のうすくなった瞳が、盲人のように見える。

「ようこそ、いらっしゃいませ」老人は、女のような、細いなめらかなキイキイ声でいう。

「お早いことで……」

「早くて、わるいかい？」とエミがふきげんそうにいう。

「とんでもない、よくいらっしゃいました」老人は、馬のように長い顔に愛想笑いをうかべる。ずらりとむき出されたまっ白な義歯のピンク色の歯ぐきが気味が悪い。「当店は、上玉がそろっております」

「どうだかね」エミは、ならんだ男たちをジロジロ見まわし、二人の友人をふりかえってきく。

「あんたたち、〝機械〟か、なまか？」

「あたし、なま……」アンが、しゅうしゅう息のもれるような声でいう。

「あいにくと、なまは、いいのがおりませんのですが……」老人は、よわったように、眉間のうすい皮膚にしわをよせる。

「そのかわり、〝機械〟でしたら、どんなタイプでも、極上がそろっております」

「あたし、なまでなくっちゃ……」アンは、執拗にくりかえす。

「動物なら、たくさんおりますが……」老人は、下卑た笑い声をたてた。「犬、山羊、羊、騾馬——猫もおります。チンパンジーにゴリラ、狒々ならマントヒヒ、マンドリル……みんなよくしこんでございます」

「動物はくさくってね」とエミ。

「あたしも、ひさしぶりになまがいいな」マリが、意地悪そうにいう。「いいなまがいないのかい？——じゃ、別の店をさがそうよ、アン」

「別の店にいっても、もうほとんどなまはいませんよ」老人は、ひややかにいう。「病気になったり、年をとってだめになったり、腑ぬけになったり、どんどん数がへって行く上に、このごろではもう、全然補充がきかないんです。——この遊廓全体で、四、五人でしょう。それももう、まともなのは全然いません。のこっているのは、ろくでもないものばかりです」

「なまなら、どんなのでもいいわ」アンはいった。「あたし、なまがいいの——ここにいる？」

「二人おります……」

老人は、うすい皮膚を、ちょっとひきつらせると、奥の方を杖でさした。

一人は、侏儒（こびと）だった。四、五歳の子供のような体に、額の出た、しわだらけの、おとなの顔がのっている。——短い脚でよちよち出てくると、ニッコリ愛嬌のある笑いをうかべて、ポマードでテカテカに光らせた頭をちょいとさげる。

「もう一人は？」アンは眼を光らせていう。——だらしなくたれさがった唇から、今にもよだれがたれそうだ。

「あれです——」老人は杖でさす。「あまりおすすめできませんが……」

隅の方で、眼を床におとして、立っているのかと思ったら、椅子に腰をおろしているのだった。長い顔、とび出した眼窩（がんか）上隆起、長い、しゃくれた顎——うっそりと立ち上ると、二メートル以上あった。あきらかに巨人症だ。眼が、膜がかかったようににぶく光り、ほとんど動かない。

「これがいいわ！」アンの口から、ついによだれが糸をひいた。——手の甲でぬぐいながら、アンの、欲情でぬれた眼は、大男に吸いついてはなれない。

「この男は唖でして……」杖の先で大男の胸をついて、椅子へもどしながら、老人はいう。

「その上、知能が低いのです。——めったにそんなことはありませんが、しかし、時たま凶暴になることがあります」

「あたし、これがいいの……」

アンは、赤ン坊のようにくりかえす。老人をおしのけ、大男の手をとり、はなさない。

「すごいじゃない……」アンは、大男の、松の根っ子のような手首をつかんで、うっとりと眼をほそめる。「なまよ。ほら……」

爪で、大男の皮膚をちょっとつねる——ウウウ……と大男はのどの奥でうなる。

「ほらね、ごらん！」

アンは、うれしそうにのどをのけぞらせて笑うと、もう一度、もっとつよく爪をたてた。

「ガーッ！」と大男は叫んで、腕をふりまわした。アンははねとばされ、壁にいやというほどたたきつけられた。——ピシッ、と老人の杖がなって、大男は腕で顔をかばいながらあとずさりした。

「こいつをおこらせないでください」老人は、とがった杖の先で、大男をつきながらいった。

「おこると危険です。おやめになった方が……」

「いいわ……」アンは、たたきつけられた壁ぎわから、ニタニタ笑いながらたち上った。

「すてきだわ」

「では、——まあ、万一の場合のために……」老人は、しぶしぶいって、ふところから、麻（パラ）

痺拳銃（ライザー）を出して、アンにわたした。「これをもっていってください。おこらせないでください
よ」

「さあ……」アンは、上の空で麻痺拳銃（パラライザー）をうけとりながら、大男にいった。「早く行きましょうよ」

大男は血走った、動かない眼で、アンを見ていたが、ようやく背を向けて歩き出した。

「まって……」アンはいった。「私を部屋までだいていってよ。私のフランケンシュタイン……」

大男は、ふりかえって、わけがわからないという風に、アンと主人とをかわるがわる見た。——老人が合図すると、大男はアンをひょいとだきあげた。しかし何を思ったか、丸太のようにドスンと床に投げ出すと、今度は片手で両方の足首をつかんで、鮭みたいにさかさにつりさげた。アンのワンピースは腹の上までめくれ上り、なにもつけていない下腹がむき出しになった。アンは悲鳴をあげたが、その眼は、恍惚とした表情をうかべていた。——大男は、アンの足首を無造作ににぎったまま歩き出した。床の上に、アンの上半身と、みだれた金髪がひきずられた。大男が階段を上り出すと、アンの頭が階段にゴツン、ゴツンとあたる音がした。

「ほっときなよ」なにかいおうとしたマリを、エミはおしとどめた。「あのこは、ああいうのがいいんだから」

「でも、二階へ上るまでに、首がもげちまうわ」とマリはいった。

「で、あなたがたは？」老人は、せきをしながらきいた。

「私は——動物……」とマリはいった。「犬と猫と山羊と……それから、マントヒヒ」

「いっぺんにはむりです」老人は首をふった。「いくらよくしつけてあっても、やはりけんかをします」

「わかってるわよ！　順番に出してやればいいんでしょ」マリはヒステリックに叫んだ。「それから——バターを忘れないで！」

結局エミだけが、〝機械〟をえらんだ。

三十五、六の、男ざかりといった所で、背が高く、肩幅がひろく、胸毛がいっぱいはえている。口髭をはやし、こい眉の下の眼は、やや憂いをふくんでいる。

「さあ……」寝台にどさんと体を投げ出すとエミは眼をつぶった。「さあ……はじめて」

男の体臭が、鼻腔にせまった。——このにおい、どういう調合だろう？　新しいタイプだわ。男のあつい息がせまり、唇にやわらかく口髭がさわる。——ふん！　芸のこまかいこと！　口臭までつけくわえてあるわ。男のつよい腕がエミを抱きすくめ、男の手が、微妙にエミの体を愛撫しながら、それこそ機械のように正確に、エミの服をぬがし、下着をはいで行く。あなたは美しい……あなたはすてきだ……ああ！　あなたの体は、なんてすばらしいんだ！　あなたはアフロディテだ。プシュケだ……男はあつい溜息とともに、たえず耳朶（じだ）に

ささやきつづける。男の口髭が、エミの脇腹をこそぐり、男のぬれた唇がエミの乳首をふくむ……体が燃え、濡れてきた。だが、まだだめだ——どこか、心の底が冷たくさめている。エミは眼をとじ、あえぎながら、手をのばして、ナイトテーブルの上の酩酊剤を一粒とってのみくだす。即効性の薬品に、体の中がたちまちカッと燃え上り、まぶたの裏に赤い火花が爆発する。エミは男の首を力いっぱい抱きしめ、体を弓なりにそらして腰をおしつけた。

快楽の炎が、灼鉄(やきがね)のように、青白い火花をちらして何度も全身をさしつらぬいた。エミは汗をかき、涙をながし、そりかえり、けもののように絶叫した。男の指先は、こちらの反応をすばやくよみとってフィードバックして、機械のように正確につぼをおさえ、男の体は疲れを知らぬ機械のようだった。——それも当然のこと、男は機械だったのだ。

何回かの失神のあと、エミは綿のようにくたくたになって、寝台の上にうつぶせになっていた。快楽のなごりが、まだ全身のいたるところに熾(おき)となって疼(うず)いていた。

あえぎがおさまると、ならんで横たわった男が、やさしく接吻した。男の全身も汗にまみれていた。——うまい演出！

エミはうっとりと接吻をうけた。——だが、眼をひらいて、男の顔をみると、突然、冷たく、さめた心がよみがえってきた。

男は、最初ホールであった時と、まったく同じ表情をしていた。——息づかいももとのまま、快楽の残照にたゆたうそぶりもなく、平静で、ちっともつかれていない視線だった。いかに精巧微妙につくられたセックス専用アンドロイド（人間型ロボット）でも、行為のあとの、それらしい反応や表情をあらわすプログラムは、その電子脳の中にセットされていないらしい。

よしんばそれがセットされていたとしても——たとえいかにその反応のプログラムが、精緻細心にくみたてられ、甘美な後戯の雰囲気をかもし出すようにセットされていたとしても——所詮(しょせん)、相手は機械人形ではないか！

よかった、という表情、愛している、というささやき、——いかに快さを味わっている表情をつくろうとも、それはこの機械人形の頭部にかぶせられている、カクタム製のうすい皮膚の中にうめこまれた、無数の微細な機械筋肉(メカニカル・マスル)の収縮にすぎない。——そのいかにも甘美さを味わっているような表情の背後にあるものは、ほんものの甘美さを味わい、その中でしびれ、おぼれこみ、あつくやわらかくなってしまっている、男の魂ではなくて、「うっとりとした表情」をつくり出せ、という、複雑な錯綜した電気信号をおくり出しているＳＬＳＩ（超高密度集積型）の電子脳にすぎないではないか！

「どうかなさいましたか？」

〝機械〟はしずかな声できいた。——エミの中で、快楽の残照が急速にひえ、かわって、一種の屈辱感をともなった、はげしい怒りがこみ上げてきた。

このいかにもたくましい、男らしい皮をかぶった〝機械〟——こいつとは所詮、快楽をわ

けあうことはできない。こちらの中にひきおこされる快楽の渦とともに、むこうの中にも、同じ快楽がたかまって行き、ついに双方のそれがお互いに堰を切って大つなみとなって、お互いがはずかしげもなくわれを忘れ、あの熱い、灼けるような、快感の爆発の中で、けものじみたなまの魂が、裸になってからみあい、一つのものになる……そんなことは、この木偶の坊の機械にはできない。——私が快楽におぼれ、眉をしかめ、舌を吐き、絶叫し、のたうちまわっていた時、こいつは、顔だけはそれらしい表情をつくり、息づかいや言葉は、夢中になっているようにつくりながら、ひややかな「機械の脳」で、あさましい私の反応をじっと見まもり、快楽のつぼをよみとり、そのプロセスを計算し、機械の手や、唇や、脚や、ピストンに、つぎつぎに指令を出していたのだ。——機械に翻弄され、機械に実験動物のようにあつかわれ、機械にさわられて機械の計算どおりに叫びをあげ、泣き、のたうちまわった自分……。

「さわらないで！」

頸筋に接吻しようとした〝機械〟を、エミはヒステリックにはねのけた。

「まだ、ご満足が行きませんでしょうか？」〝機械〟は、やさしい、平静な声でいう。「なんでしたら、もういっぺん、——今度は別のやり方で……」

もういっぺん？——そう、こいつなら、もういっぺんが、十ぺんでも……いや、百回、二百回でも、たてつづけにできるだろう。疲れを知らぬ〝機械〟なら……。

「そばへくるな！」

エミは枕をなげつけた。——〝機械〟は、おとなしく、いわれたとおりに、ベットからはなれて立っていた。エミは煙草に火をつけた。ふりかえると、足もとの方に、サムソンのようなたくましい裸体が立っていた。スイッチをきっていないので、雄大なシンボルは、まだ雄々しく屹立したままだ。それを見ると、何千回もだまされた視覚が、まだだまされ、意識は冷えたまま、下半身がむずむずする。

「こっちへこい……」エミはベッドに腰をかけて、脚を出す。「来て、足をなめろ」

男——〝機械〟は柔順にそばへやってきて、ベッドの傍にひざまずき、エミの足をとった。

「そんなにつよくかんじゃ、いたいじゃないか！　ドジ！」

エミは吸いかけの煙草の火を、〝機械〟の肩に押しつける。——かすかに蠟のこげるようなにおいがしたが、男は表情をかえない。

「あつくないのか！」

わかりきったことをきいて、エミはもう一度、男のうなじに煙草の火をおしつけ、もみつぶす。

「いいえ……」男は表情をかえずにいう。

「あつがれ！」エミは、ナイトテーブルの上の時計をつかんで、その角を男のこめかみにたたきつける。——カクタム製の皮膚が、ちょっと裂けたが、むろん血は出ない。「いたがれ！

これは命令だ」
「申しわけありませんが……」男は立ち上り、直立不動でいった。「私には、その反応回路がありません。おのぞみなら、マゾヒズム・アンドロイドがおりますが、とりよせねばなりません」
「だまれ！」エミは、スタンドをつかんで投げつける。「お前が……お前が、いたがるんだ。泣け！　逃げろ」
「おことばですが……」男――〝機械〟は、スタンドを頭にぶつけられながら、平静な声でくりかえす。「私にはその回路がありません。――したがって不可能です」
エミは金切り声でさけび、重い花瓶を、ナイトテーブルを、額ぶちを次々に投げつけた。
――男は、花瓶を顔の真正面からぶつけられ、鼻がつぶれてしまったが、それでも平然と立っていた。完全なヒステリーの症状におちいったエミは、砕けた花瓶の破片をもって、男の顔や胸の皮膚を、これでもか、これでもか、と叫びながら切り裂きはじめた。カクタム製の皮膚がやぶれ、人工筋肉が裂け、ズタズタになって、ベロリとたれさがった肉色のプラスチックの下から、うめこまれた網の目のような電線や、アイクロソレノイド、金属の骨組などが露出した。
「なんてことを！」ドアがあいて、顔をひきつらせた店の老人がとびこんできた。「ああ、あんたがたは、わしの大事な商品に、なんてことをなさるんです！」

あけはなったドアから、ほかの部屋のさわぎがきこえてきた。――老人は、セックス用アンドロイドを後手にかばいながら、キイキイ声で叫んだ。「出てってください！　かえってください！――あんたらの仲間の、一人の人は、あの大男をおこらせ、もう一人の人は、発情した動物どもを、部屋の中でいっぺんにはなした。――ムチャクチャだ。かえってください。あんたらが悪いんですぞ！」
「またおちかいうちにどうぞ……」半面だけ、電子眼やコンデンサーの露出した、アンドロイドが、のこった半面だけでにっこり笑った。――人体解剖模型が笑ったような不気味な笑いだった。
むかいの部屋では、マリが、部屋中かけずりまわって、ほえあい、かみあい、ひっかきあう、犬と猫と山羊とマントヒヒに、全身をかきむしられ、血みどろになって悲鳴をあげていた。――隣の部屋では、怒りくるう巨人症の大男にアンが首の骨をへしおられ、両脚をもって、股をひきさかれて死んでいた。

二

「今夜は……」吉村はちょっと言葉を切って、こめかみをもんだ。「ちょっとめずらしい所へ案内しようか？」
「蔦乃屋(つたの)かい？」高瀬は、ライトペンをほうり出してきいた。

「なんだ、知っているのか？」
「一度行っただけだ。――それもだいぶよっぱらってたから、すぐかえった」
「行ってきたまえ……」スピーカーから声がきこえる。「もう、ほとんど目鼻はついた。――あと二日もあれば、一応のけりはつけられるだろう」
「じゃ、今日はこのへんにするか？」吉村はのびをして、上衣をとりあげた。
「ちょっとまった。――ここん所だけすまして行こう」
　高瀬はライトペンをもう一度とりあげ、巨大な、グラフィック・ディスプレイをもう一度とりあげ、巨大な、グラフィック・ディスプレイ用の螢光板にうつっている図形をじっと見て、その上に数本の線をくわえる。図形の下にある数式に、いくつかの数値をいれ、スタートポイントをおさえると、図形は複雑な曲線を描いて動きはじめる。
「こんなものだな……」と高瀬はマイクにむかっていう。
「ありがとう……」スピーカーから声がする。「あとは自分でやれる。――明日までに、収斂パターンをいくつか見つけられるだろう」
「じゃ、これでかえるよ」高瀬は上衣の袖に腕を通しながらいう。「君も――少しは休んだらどうだ？　少し冷やした方が……」
「大丈夫だ……」スピーカーは答える。「点検はこの間すんだ」
　二人は企画室をしめ、建物の外へ出た。――働きづめで、肩がこり、頭があつく、眼がい

たんだ。街へ出て、乗物にのって反対のはずれへ行き、ひっそりとした露地をまがると、そこだけはほの暗く、いくつかの軒灯がにじむように光っていた。――打水をした、蔦乃屋の格子をあけると、筧の水音がした。奥から洩れる明りに、植えこみの南天や青木の葉がキラキラ光る。そのむこうから、にぎやかな笑い声がきこえてくる。
「おこしやす……」
　中年の、品のいいおかみが、ふきこんだ上り框にひざをつく。
「小蔦と照絵は？」吉村は靴をぬぎながら、なれた調子できく。「はい、もう二人とも……地方はんも来てはります」
「ここは京風なんだよ」二階へ上りながら、吉村はささやく。「気がつかなかった？」
「いいや……」高瀬は首をふる。「ぼくにはよくわからないんだ……」
　座敷にはいって、すわる前に、ちょっと障子をあけて外を見た吉村は、
「おやおや……」と面白そうにつぶやいた。「おかみ、ちょっと見てごらん？」
　障子の外は、くらい、がらんどうの、雨天体操場のようなだだっぴろい空間だった。その一隅が、ぼっと楕円形にうす明るくなり、そこを通して、ごつごつとした岩山を配した荒涼たる砂漠と、凍てついたように満天にきらめく星がみえる。フォボスとデイモス――小さな、二つの火星の月が、一つは動かず、一つはせかせかと中天にのぼって、先に出ている月を追いぬいて行く。

「まあまあ、気がつきまへんで」おかみがあわてたように、障子のそばにより、柱のかげに手をやる。「今日、お庭の手入れをしてもろたら、おそくなりまして……つい忘れたんどすわ」

障子の外の、上の方から、せりのように手入れの行きとどいた庭がおりてきて、すっぽりと外の景色にはまりこむ。小さな築山と泉水、灯のはいった織部灯籠の明りが、苔むした庭石の上をすべる。

「いいじゃないか」吉村はうきうきした調子でいう。「この座敷で、宇宙を見るのも、おつなもんだ」

「あのおかみも……か？」出て行ったおかみのあとを眼で追いながら、高瀬はそっときく。

「もちろん……」と吉村は笑う。「あたりまえじゃないか！　なにをかんがえてるんだ？」

酒肴がはこばれた所へ、

「こんばんは、おおきに……」

はなやかな色彩が、パッと座敷にあふれる。みずみずしい島田に裾模様をひいた、えりかえしたての芸者姿と、おふくに結ってだらりの帯をしめた、ういういしい舞妓と――花簪は柳で、そういえば暦の上では、明日から六月だ。

「今夜は一つ、井上流をたっぷり味わってもらおう」吉村は盃をふくみながらいう。

「井上流？」高瀬は酌をしてくれる舞妓に見とれながら、上の空できゝかえす。「なんだね、

それは？」

「三世紀――いや、もっと前になるかな――そのころまで、京都の祇園という色街にのこっていた踊りの流儀だ。その後も、ほそぼそとつたえられていたが、もう絶えるというので、一世紀ちょっと前……」

中年のつくりの芸者が、三味線をとり上げ、しずかに弾き出す。

「京の四季」――。芸妓と舞妓、二人の連れ舞いで……。

舞いおわって、扇子を前において手をついた時、高瀬は拍手するのも忘れて、呆然としていた。――いつの間にやら、二人は座敷の外に消え、ふたたびあらわれた時、手拭いを帯にとめていた――ふたたび連れ舞いで、「あけぼの」……。

高瀬は、盃をもつ手を宙にとめたまま、身動きもせず凝視しつづけた。――三味の音も、優雅な古語でうたわれる唄の文句も、耳にはいらず、ただくるりくるりとまわる、裾と袂の華やかさ、さす手ひく手のたおやかさ、眼配りのあるあでやかさに気をとられていた。

「だいぶ、いかれたようだな……」舞いおさめると、吉村は高瀬の顔を見て笑った。「ねえ、いいもんだろう？」

奇蹟のようなものだ――と高瀬は思った。

酒になって、地方の芸者はもとより、小蔦も照絵も、ほどよく飲み、照絵はほんのり頬を染めた。――誰がプログラムをこしらえたか知らないが、その技巧の心にくさ。

「じゃ、一つ、小蔦さんに、こってりしたやつをおねがいしよう」と吉村はいった。「〝黒髪〟はどうだね？」

舞妓が、はしゃいだ声を出し、手をたたいた。——芸妓が顔を下げ嫋々たる「黒髪」がはじまった。時も忘れ、場所も忘れ、ただそこに舞う「女の美しさ」のみが存在する時間……。

「君……」高瀬はさしせまった声で、吉村にいった。「ぼくは、小蔦さんと、一晩すごしたい。——ただ一晩、二人きりで話をするだけでいい」

吉村は、座敷に来ていたおかみに、ちょっと話をした。

「しきたりによれば……」吉村は口ごもった。「一見ではむずかしいそうだ——妙に格式ぶると思うだろうがね。君が——君がくどいてみて、彼女がその気になれば……」

たかが、美しいアンドロイドではないか——などとは、これっぽっちも思わなかった。高瀬は勢いこんで、うなずいた……。

「男たちを連れてこい、ですって？」中央人口管理者の、巨大な電子脳は、あきれたようにいった。「それは無理ですな。——男たちは、かえりたがりません。私たち電子脳に、強制する権利はないんです」

「じゃ、私たちが行くよ」とエミがいった。

「それもだめです」電子脳は、機械的にいった。「月以外の宇宙空間は、女人禁制になっています」

「機械のくせに、人間にさからうのかい？」マリがキンキン声をはりあげた。「お前、なんのかんのといって、男の味方なんだね」

「いいえ——私たち機械は人類全体の味方です」電子脳は、きまり文句をくりかえした。

「いまのような形が、結局人類全体にとっていいんです。——あなたたち女性に、いったい何の不足があるんです？　男たちと機械とで、あなたたちを何不足なく、やしなっているではありませんか？　あなたたちは、何の労する所もなく、ぜいたくも、閑も、すべてをあたえられているではありませんか？　この上またもや、男たちの領域を侵略しようというのは、これは胴欲というものです。そんなことを許したら——いったい男の方の人権はどうなります？」

「このままじゃすまさないよ」エミは毒づいた。「今度はもっと大勢つれてくるからね」

三つ重ねの夜具の上に横たわって、高瀬は枕もとのスタンドが船底天井に投げかける、ほのぐらい光の輪をじっと見つめていた。

隣の部屋で、帯をとく衣ずれの音がしていた。——五度目のお座敷で、そのあとはじめての逢い引きだった。たかが機械人形とねるのに、口説の何のと、たわけた手順がいるのか？

——だが、その問いに対する答えは、はじめから用意されてあった。ベースはなるほど、機

械であろう。だが、その上につけくわえられた、絶妙のプログラムは——これは、長い人間の文化がつくり出したものなのだ。

彼は、いまは珍品となった、フルトヴェングラーの指揮するベルリン・フィルのLPのコピーをもっていた。——もうすりきれて、変質したLPは、彼の遠い先祖からつたえられたものだ。フルトヴェングラーは四世紀前に死に、LPは一塊のビニールになった。だが、それからとった録音円筒をかければ、そこから今も、あのすばらしい演奏が、部屋いっぱいに立ちのぼり、彼を包みこみ、彼を無何有(むかう)の次元へといざなう。——その輝きにみちた演奏の価値を、小指の先ほどのネオ・フェライト合金の円筒(ボビン)の値打に還元しきれるか？——それ自体は、まったくつまらない強磁性金属の円筒にすぎない。しかし、彼がそれを虎の子のように大事にするのは、その円筒の上におりこまれ、つけくわえられているあの演奏の故ではないか？　そこにきざまれた情報の価値を、情報を記録している材料のつまらなさ故にさげすむことができるだろうか？——いかなる名画も、それを材料として見れば、安物の麻布と、ありふれた顔料と油脂製品にすぎない。名画からうける衝撃的な感動を、所詮それは、麻布の上のテレビンの皮膜にすぎない、というので、その価値をおとしめる愚か者がいるだろうか？　そんなことをいうならば——所詮、人間は、炭素、酸素、水素、その他多種の物質にすぎず、たとえそのくみあわせが、絶妙な反応系を形成しているにせよ、所詮、人間は、一個の有機機械にすぎないではないか？

たとえ記録の素材は機械人形にせよ、その上に記録され、くみこまれた、磨きぬかれたマナーとプロセスの価値は、その素材故にちっともおとしめられるものではない。——フルトヴェングラーは死んだ。彼のあとに、も早彼とまったく同じ天才は出てこない。しかし、それは円筒の上に記録され、それを再生装置にかければ、天才の栄光は今もそこにある——機械人形の館で、機械人形を抱くのに、マナーもしきたりもあるものか、というのは、せっかく機械人形たちが記録し、保持しているマナーそのものの価値を、無視するものだ。あの踊りも、その磨きこまれた立居振舞いも、愛を交すにいたる、このデリケートなプロセスも——そういったものをひっくるめて、もうなま身の女たちの中には、そういった歴史的な完成品をうけつぎ、保持するものがいなくなってしまった。——ねたみ深い、貪欲(どんよく)な女たちは、歴史的なうらみをいいたて、あらゆるものを要求し、すべてのものを手に入れ、そのねたみ深い、貪婪(どんらん)さ故にみずから堕落し、知的にはもとより、道徳的にも、とりわけ美的に頽廃して行った。いま地球にいるなま身の女たちは、自堕落で、だらけ切って、あらゆる面に対してきびしさをうしない、倦怠にむしばまれた、醜怪な野蛮人にすぎない。(それでもなおかつ、女たちを堕落させたのは、男の責任だといいたてるのだ！)

自堕落な怪物になりさがったなま身の女たちには、も早歴史の中に磨き上げられてきたマナーをつぐに足るものはいなかった。——そういったマナーの価値さえ、も早わからなくなってしまっているのだ。そういったものは男の身勝手なエゴイズムによって女を男に奴隷的

に奉仕させるために、つくり上げられたもので、女を侮辱するものだ――と女たちはいう。だが、マナーは男だけがつくったものではない。男と女が、歴史的に協力してつくってきたものだ。――闘いに身をおく男の荒れる心は、やさしい女のささげる優美な舞いによってなごめられる。なごみのために、考えぬかれ、工夫しつくされた、ゆるぎないマナーとプロセス。そしてまた、男と女が、あたえ、あたえあうかりそめの相聞のゲームの中に、いつしかかもし出される一刻の解脱――なにものにも、かえがたいその恍惚の間に、心は洗われ、脱世間の境地に――そう、なまぐさい、意馬心猿の若年の恋や、生活をつきかためる夫婦の営みの中では、決して得られぬ、「遊び」の中にしかあらわれぬ愛のめでたさを味わう。――男も女も……。

襖があいて、あでやかな長襦袢姿の小蔦がはいって来た。――すわって襖をしめ、その位置で手をついて、みずみずしい島田の頭をさげる。

「おたのもうします……」

かけ蒲団の隅がはねのけられ、風も起さず、音もたてずに、すっと細い体がはいってくる。――びん付けの香りがぷんとする。そのやわらかい、やさしい肩を抱きよせようとすると、小蔦は――その美しいアンドロイドは、蒲団に顔をかくすようにして、小さくいった。

「うれしおす……」

これが、アンドロイドか！――いや、たとえなま身の女であっても、素材としては肉にすぎぬ。たとえ素材は機械であっても、そこにかぎりない知恵によってくみこまれた、自由反応系の無限のくみあわせのひだひだを、その知恵は一人のものでもなければ一代のものでもない、「めでたさ」を目ざす男と女の長い長い累代の知恵のかさなりあったものだ――おれはきわめずにはおかないぞ、と彼は思った。ひょっとして、これは、変形されたピグマリオニズムか？――だが、そんなこと、かまうものか！

三

「何度こられても、無理なことは無理です」と電子脳はいった。「男性たちの領域に、あなたたちをおいれするわけには行きません」

「なにさ、男にばっかりいい目をさせて！」と、押しかけた女たちの一人は叫んだ。

「いい目ですって？」電子脳は、おうむがえしにいった。

「男たちが、宇宙で、どんな生活をしているとお思いなんです？――一日八時間以上、物資はとぼしく、条件は苛酷で、仕事は頭脳をけずられるほどむずかしい。危険は、この地球上の何千倍も大きく、巨大な空間と機構を相手に毎日、はげしく、つらく、きびしい生活を送っているのです。――いい目をしているのは、あなたたちです。なにも働かなくていい。ひまと遊びはたっぷりある。生命の危険も、つらい仕事もない。ぜいたくはしたい放題、おまけに――あなたたちのいいなりになる、快楽の奴隷たちもごまんといるじゃありませんか？

あなたたちが、さんざんののしり、意気地なし呼ばわりした、弱虫の、すぐ疲れるなま身の男たちより、はるかにタフで、あなたたちにとことんサービスしてくれる、セックス・アンドロイドたちが……。そして、そういったすべてのものをつくり、あなたたちに、何不自由ない、したい放題の生活ができるような装置やシステムをつくり上げ、あなたたちにあたえたのは、男たちであり――そして彼らと協同した私たち機械です。これ以上何をおのぞみになるんです？」

「一つ、冷静に話しあおうじゃないの……」エミは、背後の女たちの大群衆を意識しながら、すごみをきかした声でいった。「そりゃ、私たちは、けっこうなくらしをさせてもらっているさ。何もかもあたえられてね、――だけど、まだ不満があるんだよ」

「だから、何が不満なんです？」

「私たちは、退屈なんだよ」エミはいった。背後で拍手がおこった。「私たちは、どうも毎日、おもしろくないんだよ。――いらいらして、生きているはりあいがないんだよ」

「それは……」電子脳はうんざりしたように、しばらく絶句した。「御自分たちで何とかしていただかなけりゃ、私たちにはどうともなりませんね。――また男たちが、せっかく苦労してやっときずき上げた領分へ侵入して、男たちを、征服し、支配するのが――男たちを、困らせたりいじめたりするのが、唯一の生きがいなんだ、とおっしゃるのなら、そんな事は絶対させるわけには行きません。私は公平な処理をとっているのです」

「機械のくせに、なまいきな口をきくんじゃない！」きいろい叫び声が、群衆の中から上った。

「やっちまえ！」

バラバラと石や木片がとんできた。――だが、みんな電子脳の前の、透明な電磁障壁（バリヤー）にあたって下へおちた。

「そんなもので、私がどうにかなるとでもお思いだとしたら、あなたたちは、よほど機械に対して無知なんですな」電子脳はあざけるようにいった。「いまさら生きるはりあいなんて、――安楽と生きがいとは、二律背反ですよ。いわば身から出た錆（さび）じゃないですか……」

「おだまり！」マリは叫んだ。「なまいきな口をおきでないよ！――私たちは人間の女だよ。私たち女性がいなければ、人類の今日はなく、お前たちだって存在しないんだよ」

「たしかにね――だが、その母性としての特権をたてにとって、次々に安楽を要求し、最後には、安楽のために母親たる義務さえ、放棄してしまったのは、誰でしたっけね？」電子脳はしずかにいった。「女性がいなければ、子孫が維持できない――この特権をたてにして、生活の義務一切を男におしつけた。安楽をもとめて、かつてもっと生活のきびしかった時代を通じてきずき上げられてきた、きびしい女性の文化の伝承を拒否した。そのうちあなたたちは、出産や育児の義務さえ放棄し出した。――男たちは外でとびまわっているのに、女だけがなぜ妊娠の苦痛を味わわなければならないんだ――で、多くの女性は子供をうまなくな

り、あるいは、人工早産で、早く身がるになり、あとは会社の機械にまかせる。七カ月の胎児が育てられるようになり、次に三カ月、そして受精卵から育てられるようになった時、女性は妊娠から解放されたのです。——あなたたちは、美容上の見地から、授乳もいやがったから、育児はまた人工物と機械にたよらざるを得なくなった。子供たちにマザー・コンプレックスを感じさせないために、マザー・アンドロイドを開発せざるを得なかった。——母親としてのきびしさを、歴史的にうけつぐことを拒否したあなたたちは、当然育児についても、見識を失って、気まぐれで中途半端になり、自分たちのたのしみのために、子供を放棄したりするので、保育、育児はまた社会がひきうけることになる。——家事労働からは、家事機械で解放され、男の仕事に鼻をつっこんでも、特別あつかいを要求し、仕事の方は中途半端で、組織の中で、きびしく人生を賭ける所までは行かない……うまく行かないと、男の身勝手のせいにしたり、社会のせいにしたりして、自分自身に対するきびしい態度をとろうとしない。——男たちだって、真の協力者として、女性をもとめていたのです。女性にしかできないこと、女性のやさしさによってしか癒されない傷——女性にもっともふさわしい仕事……しかし、そういったことを要求すれば、男の身勝手だといわれた。女性は、自分たちのとりぶん以外に男と同じものをほしがった。で——女性にふさわしい仕事、やってほしい仕事を、女性がひきうけてくれないから、男たちは、その代りを機械にもとめた。——女性たちは、機械がわからなかったから——また、自分で腹をくってわかろうとしなかったから、

——機械をさげすみ、その能力にたかをくくっていた。機械をなめていたんですね。男どもは、いま機械と夢中にランデヴーしているが、どうせある所からは、自分たちの所へかえってこざるを得ない、私たちは女だから、と……。——しかし、結果はごらんの通りです。“遺伝工学”の発達で、初期に採取した女性生殖細胞から、無限の遺伝子の組みあわせができるようになりましたし、もう、生殖細胞そのものがいらなくなりました。男のものであろうと、女のものであろうと、普通の表皮細胞の一つから、誘導処理によって、人類の子孫は、いくらでもつくり出せるのです。もう、人類は、女性なしで、種族維持ができるのです——こんなことをいったって、あなたたちには、到底おわかりにならないでしょうがね。男たちは、機械の性質をよく知っており、機械を単なる機械と見ず、機械を人類の伴侶としてえらんだ。——男たちと、そして私たち機械があれば、人類はまだ、無限の未来をめざせる。——こんな高次な関係に、あなたたちは、もうわりこむことはできなくなっていた。あなたたち自身の、安逸と放恣、洞察力のなさ、きびしさの欠如によって、あなたたち女性は、人類の高次な時代からとりのこされたのです。——それはあなたたち自身が、たとえつらくても、ついてこようとしなかったからだ。とりのこされたと感じた時、あなたたちは、ますますいらいらし、欲求不満を感じ、ますます男たちに対して、嫉妬ぶかく、すべてのものに干渉し、すべてのものを要求した。——女性は、あたえる美徳を失って、貪婪にうばうことばかりに熱中した。しかたなしに、男たちは、地球の上のものをすべて女た

ちにあたえ、自分たちは、苛酷な条件の悪い宇宙をきりひらいて、地球から出ていった。――女性にかわって、新しい男たちの伴侶となった、私たち機械が、それを可能にしたのです。おわかりですか？――男たちは、女性たちのために、自分たちが営々ときずきあげた地球文明をそっくりあけわたし――というのは、結局女たちとは、喧嘩するだけむだだから――自分たちは、新天地を――もっと高次な秩序を地球の外にきずき上げるために出て行ったのです。――彼らの新しいより高度な秩序の中に、またぞろ、身勝手で、貪婪で、嫉妬ぶかいあなたたちの侵入を許していいものでしょうか？――断じて！　私は許しませんし、あなたたちは、やろうと思ってもできません……」

「畜生！」群衆の中から金切り声があがった。「けがらわしい、なまいきな機械の畜生！　お前が男たちを、私たち女からうばったんだ！――畜生！　すべた！――男たちをかえせ！」

　女たちはワッとなだれこんだ。――電磁バリアーにひっかかって、前列の女たちは悲鳴をあげた。石がとび、棒きれがとび、靴や、ハンドバックがとんできた。

「やれやれ……」念のため、電磁バリアーの電圧をほんのちょっとだけあげながら、電子脳はつぶやいた。「しようがない女どもだ、――また他人のせいにしている……」

小蔦と結婚すると高瀬がいい出した時、吉村はさすがに少しおどろいた。――旦那になる

というならともかく、アンドロイドとの「結婚」とは……。

「いや、やはり結婚したいんだ。ぼくには彼女が、どうしても必要だ」と高瀬はつきつめた表情でいった。「やはり――彼女にいつもいてほしい。いつでもぼくの部屋にいて……ぼくを待っていてほしいんだ。それに……」

　高瀬は、ちょっと考えるような目付きをした。

「ぼくは、時々、彼女が、アンドロイドだとは思えなくなるんだ。彼女の中の反応系のくみあわせは、また無数にあるのだろうし――ただ、人間の女とちがっている所は、反応系のくみあわせが収斂していって、アクションやリアクションのパターンがきまった時に、それが常にいかなる場合でも、もっとも美しい型をつくるという所だろうね。――その〝美しい型〟への収斂力が、なみの人間の女より、はるかに強靱だということだろう。彼女が、受け身でばかりいるかというと、そうではない。彼女自身〝発見〟をし〝創造〟をする。――しかし、その選択は、いかなる場合でも、優美さやさしさの枠をこえることはない……」

　そう――機械は、ついにそこまできた、と吉村は思った。機械はも早、不細工な、ギクシャクした判で押したようなアクション、人間にいわれたことしかできない、愚かで、無骨な、金属の集合体ではない。それは今や、人間と同じように問題を発見し、判断し、人間と対話し、人間の気づかぬものをカバーし、人間以上に人間につかえてくれる。その経歴によって、おのおのちがう個性と特性をもち、それは、いまや人間と平等な、人間の伴侶となった。い

まや、機械は、名実ともに人間のベター・ハーフとなったのだ。

「ただ一つ、気になることがあるんだが……」と、高瀬はいった。「彼女は——あそこの名妓だった。みんなが彼女の姿を讃美し、みんなが彼女の舞いに、何ものにもかえがたい恍惚を味わった。——そんな彼女を、ぼくが独占しちまっていいもんだろうか？」

「その点なら心配するな」吉村は、にっこり笑って高瀬の肩に手をおいた。「彼女をしばらくあずけてくれ。工場の方で、完全なコピーをつくらせよう」

かくて——。

火星エリシウム市のセレモニィ・ホールでは、前代未聞の、人間とアンドロイドの結婚式がおこなわれた。結婚式などというものは、たえて久しく——二世紀以上、おこなわれたことがなかったので、その記録をさがし出すのに、情報省資料課は大さわぎをした。

当日、ひろいホールを埋める参加者の祝福の視線の中を、角かくしに純白のうちかけ姿の花嫁は、この世のものとも思われぬ﨟たけた足どりで、八足の前にすすんだ。——むろん、高瀬の方があがって、汗をかき、ふるえていた。——これは、ひょっとしたら、画期的なことかも知れないぞ——と吉村は、機械の花嫁を見つめながら思った。——人間と機械がはじめて、正式に結婚したのだ。これからまた新しい、とんでもない時代がはじまるかも知れない……。

そう思いながら、吉村は傍をふりかえった。——紋付き姿の、花嫁そっくりの顔をした美

しいアンドロイドが、吉村にむかって、にっこり笑ってささやいた。

「花嫁さん、おきれいどすなあ……」

サマジイ革命

題名の一番上に
スの字をつけても
つけなくても
ご自由です

「ふにゃふにゅふにょふにゃ……」と、矢先じいさんがいった。

「何をぬかしとるんや……」と野崎猩々じいさんが、あいかわらず酒のにおいをプンプンさせながら、鼻の頭にずりおちた黒眼鏡をグイとずりあげて顎をしゃくった。

「さあね……」ぼくは、ききそこねたので首をふった。「誰かが来たといっていたみたいですが……」

「ふにゃふにゅふにィィ……」

矢先じいさんは、顔をまっかにし、歯のない口をもがもがさせて、一生懸命何かをしゃべった。顔にもどかしげな青筋がうかび、唾がペッペととび、鼻の穴からは鼻毛と鼻クソさえとび出した。

矢先気障也じいさん……今はみるかげもなくおいぼれてしわくちゃだが、これで一昔前は、「拾得話特集」という回文専門雑誌を出して、相当鳴らしたものだ。しかし、今は齢百五十歳をこえ、よる年波にはかてず、歯もすっかりぬけおちて、この特別養老院の中の、歯のない連中の間で「歯無しの特集」という同人雑誌を出している。

むろん、二十一世紀もそろそろおわろうとする現在、ちゃんと発達した入れ歯はある。

――矢先じいさんだって、いままで入れ歯を二十ちかくも使いつぶした。だが――医学の発達により、人間の命は、入れ歯なんかよりはるかに長くもつようになってしまった。ここにいるじいさんばあさん連中のほとんどは、人工心臓、人工腎臓などをいくつ使いつぶしたか知れない。

これは、ある意味でおそろしいことだった。――人間は、機械よりもはるかに長く、しぶとく生きのびるようになった。機械は発達が早く、新陳代謝のスピードが早く、ますます短命になって行く。それに対して、人間の方は、用もないのにますます長生きし、頭もぼけ、いやらしくなり、だんだん手のつけられない存在になって行くのだ。

矢先爺さんも、入れ歯メーカーに対する一種のいやがらせから、わざと入れ歯をつけないようになった。――爺さんの話によると、ある晩枕もとにおいて寝た、モーター付きの自動入れ歯が、故障して夜中にひとりでに動き出し、鼻にかみついたので怒り心頭に発し、それ以来すっぱりと入れ歯をやめたのだ、というが、これはあやしいものだ。とにかくじいさんは、これをネタに、入れ歯メーカーにいちゃもんをつけ、億に近い補償金をむしりとったという。――もっとも、咀嚼（そしゃく）筋の弱くなった老人用の入れ歯は、全部モーター付になっているのだが、この自動装置がよく故障することもたしかで、ぼくも夜中に歯をカタカタいわせながら入れ歯が廊下を走っているのを見かけたことがあるし、また、トイレの男便所で、小用をたしながらあくびしたじいさんが便器の中に入れ歯をおっことし、ボケてたので、そのまま行ってしまい、次にその便器で小用をたそうとしたじいさんの、オチンチンの先に、その自動入れ歯がいきなりかみついて、大さわぎになったこともあった。

「ふにゃンふにゃくふにィ、ふにょふにシンふにゃふにィふにゃ……」

矢先じいさんは、わかってもらえないもどかしさに、ぶったおれそうになりながら叫んだ。

「じゃかましい！　歯ぬけ！　くそったれじじい！」と野崎猩々じいさんがどなりかえした。

野崎猩々じいさんは、もう一世紀以上にわたる――正確にいえば百二十年ごしのアル中で、飲まない時はいたって気が弱いということで、そのため黒眼鏡をかけている、という話だが、飲むととたんに口が悪くなり、喧嘩っ早くなり、やたらバリザンボウをあびせるくせがある。酔っぱらってない時なんてないから、はたしてしらふの時に気が弱いかどうか、今となっては誰も知らない。

「ふにゃにイォ！」と矢先じいさんが、まっかになってどなりかえした。

「ふにゃふにゃぬかすな、おいぼれ！　おまえらどっかすみっこで、指でもなめてイチビっとりゃええんや。歯ぬけがごちゃごちゃいうと、酒の味がまずうなるわい！」野崎じいさんは、熟柿くさい息を吐きながらどなった。

「にゅるにゅる……」と矢先じいさんはいった。

歯があれば、当然ここは、キリキリと歯ぎしりの音がきこえなければならない所だが、歯のない歯ぐきをくいしばるので、どうしても、にゅるにゅるとしかきこえない。

「なんや、この死にぞこない。やる気か……」

野崎じいさんが、よろよろと立ち上った。——とたんに、野崎じいさんは、眼にもとまらぬ早さで、股間を蹴り上げられて、ギャッという絶叫とともにひっくりかえった。

油断したのが悪かった。若いころサッカー選手だった矢先じいさんは、この養老院の中でも、「年寄りの冷やミーズ」というサッカークラブをつくっており、片脚の義足のほかにもう一本、いつもサッカー用の義足をつけて、三本足で歩いていたのである。矢先じいさんが、そのサッカー用の義足の動力目盛りを、最後の「シュート・キック」の所にあわして、蹴り上げたのだから、たまったものではない。野崎じいさんの股間の一物は、たちまちひきちぎれて、ブーンとうなりをたててとんで行き、サンルームの隅の、巨大な、しわくちゃの、梅干しの塊りにぐっさりつきささった。

と、見えたのは、実は、サンルームの隅で日なたぼっこしながら、大あくびした、馬場マリコ婆さんの口の中にその一物がスポンとびこんだのだった。

「ゲボッ！」と、マリコ婆さんはのどを鳴らした。

こりゃえらい事になるぞ、と、ぼくはその場の有様をながめながら思った。——今でこそ頭に一本の毛ものこってないツルッ禿で、その頭の上の皮膚までシワクシャになっていて、しわにかくれて眼も鼻もわからないくらいのシワの塊りだが——若がえり整形をくりかえしているうち、頭がぼけて、ある時手術を途中でやめてしまったせいである——これで昔は、

美貌と才気と向う意気の強さで一世を風靡(ふうび)した才女(プレシューズ)であり、美貌と才気の方は今や片鱗もないが、やたら強い向う意気だけはのこっているという、厄介な婆さんであったからである。

「チキショーメ！　よくもやりやがったな……」

うめきながら、野崎じいさんはよろよろ立ち上った。

「ふにゅッ！」と矢先じいさんが、サッカー用義足のスプリングをまきあげながら身がまえた。

「ぼくになにか用ですか？」と、白に青のでっかい水玉模様の背広に、キンキラキン、マッカッカのばかでかいネクタイをしめた、白髪のもと建築家、白山喜照じいさんが、優雅に補聴器のダイヤルをまわしながら低音でいった。

「チキショーメというたんや。喜照をよんだんとちゃうわい！」と野崎じいさんはわめいた。

「ああそうですか」と喜照じいさんはいった。「それは失礼しました……」

「やい、婆ア！……」野崎じいさんはどなった。「いつまでもしゃぶってないで、わいの大事なセガレをかえせ！」

「ゲボガボッ！」とのどに一物をつったてたまま、マリコ婆ァ——いや、馬場マリコ婆さんは野崎じいさんにむかってモタモタと突進した。でっかい一物が口にはまりこんでいるから、何をわめいているのかわからない。

「モボモガ！」と婆さんはわめいた。「モガモボッ！」

野崎じいさんは、腕をのばして、婆さんの口からつき出した、大事な一物をひきぬこうとした。――もとより本もののそれではない。本ものを蹴りとばされたのだったら、一たまりもなくあの世行きだったろう。（もっとも、そうなった所で、たちまちこの養老院の、蘇生手術室で生きかえってしまうのだが）だが、野崎じいさんのそれは、長年の酷使がたたって、八十年ほど前にくさっておちてしまい、今のそれは神経を電線でつないだ、義茎（筆者註　国語力低下の著しい最近の若い読者へ。これをヨシツネとよんではいけない）だったのである。

だが、野崎じいさんが、そいつに手をかけるより一瞬早く、婆さんはしわだらけの、骸骨のように細い指にはめた指輪のスイッチをいれた。とたんに十本の指の先にある、銀色のマニキュアをした爪の、マニキュアの部分が、三センチとび出し、鋭くとんがった金属製の爪が、野崎じいさんの顔をバラリズンとかきむしった。

「ギャオー！」と野崎じいさんは顔をおさえて叫んだ。

「ふにゅー！」とどなりながら、矢先じいさんがその上にとびかかった。

「モガモボ！」とわめきながら、マリコ婆さんは、二人を相手にかきむしった。

「またはじまった」と、今日五度目の大飯をムシャムシャ食いながら、マンガを描いていた小和藤田まことじいさんが、長い馬のような頭をふりむけてつぶやいた。「まるで猫のケンカだ」

「どしたの！　どしたの？」と、弥次馬根性旺盛な、助六英じいさんが、紫色の鉢巻きをひらめかせながら、ひょこひょこと駈けつけてきた。「喧嘩じゃないの。うわーすごい。あなたどうしてとめないの？」

「私の仕事じゃないので」と、ぼくはいった。「いずれやむでしょう」

「そう、じゃ、ぼくも見てよう」と助六じいさんは、うれしそうにいって、武者ぶるいした。「うわーすごい。かっこいーい」

まわりにじいさんばあさん連がいっぱい集ってきて、足をふみならし、手をふりまわして、キイキイフニャフニャわめいた。――そのうち、ついに勝負がついた。野崎じいさんが、グウ、とうめくと動かなくなったのだ。矢先じいさんと、マリコばあさんが、お互いに握手した手をちぎるようにふりまわし、フニャフニャモガモガと喚声をあげた。二人の姿も、ボロボロズタズタで、ばあさんの梅干し面は、今漬け上ったみたいに、まっかで、赤い雫がしたたっていたし、矢先じいさんは、鼻と耳がもげかかってブラブラになっていたが……。

「野崎じいさんがまいったぞ」と弥次馬じいさんの一人がいった。

「いつも口ばっかりね」と助六じいさんがいった。「すぐまいっちゃうんだから……」

「それ、いつものやつをもってきてやれ」と見物がいった。「医務室へつれて行け」

心得たもので、二、三人のじいさまばあさまが、ヨタヨタガラガラと、赤と金にぬられた屋形船に車をつけ、紅白の曳綱のついた妙な形の乗物をはこんできた。――野崎じいさんが、自分用につくらせた特別の乗物で、百六十になろうというのにまだ伊達者気取りの野崎じい

さんは、喧嘩でまいると、いつもそれにのって医務室へとはなばなしくひきあげて行くのだった。なぜそんなアホらしいことをするのかといえば、これがつまり、「野崎まいりは屋形船でかえろ」という悪い洒落で……。

　ああ！——まったく同情していただきたい。こんな箸にも棒にもかからないジジイやババアを、何十人も、ぼく一人で世話をしなければならないのだ！

「ううう……」と、ズタズタの顔の野崎じいさんがうめいた。

「さあ、おとなしくして……」とぼくは屋形船にのせられたじいさんにいった。「このくらいなんです。いつもの事じゃありませんか。外科ロボットがすぐなおしてくれますよ」

「わ、わいの……チン……」と、じいさんがうめいた。

「こっちへきてよ、マリコ婆さん大変よ」

　助六じいさんが叫んだ。

「どうしたんです？」

　ぼくはそちらへすっとんでいった。

　マリコ婆さんは、しわの底の眼を黄黒させて——ふつうの人間なら白黒だが、婆さんは黄疸の気があるので、白眼が黄色くなっている——グ、グ、グ、とのどをならしている。

「ケンカしている間に、野崎じいさんの義茎が、のどの奥にはいったらしい」と小和藤田まことじいさんが、苦しんでいるマリコ婆さんの顔を、すばやくスケッチしながらいった。

「そんなもの食べちゃいけませんよ」ぼくはマリコ婆さんを叱りつけながらいった。「ほんとに意地が汚いんだから——年を考えなさい。こんな消化の悪いものを食べて、糞づまりにでもなったらどうします。さあ口をあけて……」

　巨大な梅干しの一隅が、バクンとひらいた。——ムーッと卒倒しそうな口臭が、ぼくの顔にまともにふきつけた。例のものは、もうずいぶん奥まではいってしまい、のどの奥には、ひきちぎれたコードの端らしい、赤いものがちょっぴりのぞいているだけだった。ぼくはグッと、手をつっこんで、その赤いものの端をつかんだ。

「グウ！」とマリコ婆さんは、のどをならした。——痛いと見えて、しわの間から涙らしいものが吹き出した。

　ぬれて、ぬるぬるするそいつをやっとつかむと、ぼくはひと思いにグイとそいつをひっぱり出した。とたんに婆さんは、ギャーアとものすごい声で泣き出した。口から血がドクドクとあふれた。

「あーらら、いってやろいってやろ」と助六じいさんが手をたたいた。「婆さんののどチンコむしっちゃった！」

「このくらい何です！」とぼくはどなった。「にせチンコとのどチンコならたった二字のちがいじゃありませんか！——さぁ泣かないで！　扁桃腺をとったと思えばいいでしょう」

　もう一度、婆さんの口に手をつっこもうとしたら、婆さんは口からダラダラ血を流しなが

らあとずさりした。――その拍子に、うしろにいた矢先じいさんにぶつかり、さっきの喧嘩で、バカになったじいさんのサッカー用義足がはねかえって、婆さんの背中をドスンと蹴っとばした。とたんに婆さんののどから、血まみれの、野崎じいさんの義茎がスポンととび出して、ぼくの顔にぶつかった。

「ほらね」と、ぼくは床にころがったそいつをひろいあげていった。「すぐ出たでしょう」

背中を蹴っとばされた婆さんは、また矢先じいさんにつかみかかり、二人はまたもやとっくみあいの喧嘩をはじめ、弥次馬じじばばは、またもやキイキイいってよろこんだが、ぼくはそんな事にかまっていられなかった。野崎じいさんの義茎をつかむと、いそいで外科病室へ行った。

「デケタヨ」と外科ロボットが、ぼくの顔を見て、けばけばしい屋形船をポンとたたいた。

「ミンナ、セッチャクザイデツケトイタ。イッチョアガリイ」

「せ、が、れ……」と野崎じいさんはうめいた。

「すぐやってあげますよ」ぼくは事務的にいった。「機械の方はぼくの仕事ですからね。さあズボンをぬいで……」

じいさんのズボンをぐいとずらすと、ひきしぼった茶色の垂幕のようにしわだらけの、ぺったんこの腰の下にまばらにはえた白髪の間から、接続部が見えた。神経につながっている電線がひきちぎれている。ぼくは外科用の棚から、ハンダ鏝(ごて)をとった。

「ほら動かないで！」ぼくはもぞもぞ動くじいさんの、骸骨のようにとびだした骨盤をピシャリとひっぱたいた。「いま、電線をハンダ付けしてるんですから」

「あつーい！　アッチイ！」とじいさんは悲鳴をあげた。――じりじりと、白髪の焦げる臭気がした。

「それごらんなさい」とぼくはいった。「ハンダがこぼれたんです」

電線を全部ハンダ付してから、ぼくはうまく神経につながったかどうか、血まみれのそいつの先ッちょに、よくやけたハンダ鏝の先を、ちょいと押しつけてみた。じいさんは、ビャッ！　と叫んでとび上った。――これでOKだ。

本体をホッチキスと接着剤でとめようとすると、じいさんは弱々しくいった。

「今度はしっかりつけろ……。あの歯ぬけじいに蹴られたぐらいで、とれんように……」

「そうですか」と、ぼくは、ホッチキスをおいて、棚の方をふりかえった。「それなら、今度は熔接しときましょう」

「やめてくれ！」じいさんはさすがにとび上った。

「だって、あなたがのぞんだ事ですよ」ぼくは、棚から酸素プロパン吹管をとり、ボンベのコックをひねり、ライターで火をつけた。「おい、おさえていてくれ」

「オイキタ」と外科用ロボットは、じいさんをおさえこんだ。

「や、やめて……」とじいさんは息もたえだえに叫んだ。「ガス熔接だけはやめてくれ。や

けどで死んじゃう」
「それもそうですな……」ぼくは舌打ちして、ガスの焔を消した。
「ガスの方が肉盛りがきれいに行くんだが……じゃ、電気でやりましょう」
ガス熔接機をおいて、隣の電気熔接機の熔接棒ホルダーをとりあげると、ぼくは足で蹴って、トランスのスイッチをいれた。熔接棒をホルダーにはさみ、棒の芯を出すために、一、二、三度そのものの先にぶつける。青白い火花がとびちって、そのたびにじいさんは、ビャッ！ビャッ！と叫んだ。ヒイヒイ悲鳴をあげるじいさんを、外科ロボットがおさえこんでいる間に、ぼくは熔接をすませた。
「さあいいですよ」と、ぼくはいった。「今度こそ、ガス切断器でやき切らないととれませんよ」
「いたた！」とじいさんはうめいた。「毛ェもいっしょにハンダづけさらしたな」
「なんですかそのくらい」と、ぼくはせせら笑った。「ろくすっぽのこってもいないくせに……」
「あやッ！」と、勃起スイッチをいれた野崎じいさんは眼をむいた。
「こ、この……どうしてくれる。裏がえしに熔接したぞ！」
「どっちだって同じでしょう」と、ぼくは下ぞりになったそいつを見ながら素っ気なくいった。

「どうせあなたは、トルコロボット専門なんだから……」
「ぜいぜい……」
という苦しそうな声が背後でした。——ふりかえると、喘息病みの短古細老人が、エンジンつきのブリキのおまるにまたがって、「躄勝五郎」みたいにはいってくる所だった。喘息など、薬一粒でたち所に一生なおってしまうのだが、短古細老人は、趣味が垂れ流しという厄介な人物なので、弱くなった腹圧を補うために、わざと喘息をわずらっている。
「よ、横寝……ヒーッ（喉の鳴る音）……横寝只乗じいさんが……ヒュー……ぜいぜい……ま……ヒーッ……また、腹切っちゃっ……ゴホゴホゴホ、ヒー！……た。それから……ゼロゼロ、ヒー！……カ、カ、カプセル……穴広……ヒュー！　ゲホンゲホン……ジイ婆ァガッ！　ク、ク、ク、ヒー！……また、しっ、しっ、しくじった……ゼーイゼイゼイ、ヒーッ！……」
「横寝のじいさんは、君がいってくれ……」と、ぼくは外科ロボットにいった。「まったく眼が放せない。——今度、腹の皮をぬいあわせる時には、下に鉄板でもいれておいてやってくれ」
ブリキのおまるにまたがったまま、ヒューヒュー身をもんでいる短古細老人をあとにして、ぼくと外科ロボットは、広間の方に急いだ。——広間の片隅で、古い軍服を着て、昔の吉原の花魁の赭熊（しゃぐま）の髪をかぶった、横寝只乗じいさんが、「遊廓」と達筆で書いた掛軸を背後に、

襖紙で柄をつつんだ鋸でしわ腹をかっきり、その血を指につけて、ニタニタ笑いながら、ケント紙の上に旭日のマークを描いていた。マークの上には、勢いよく踊り上った鮭の絵が描かれ、その上に、

あけぼの印
さけ罐詰

と古めかしいサイケ調の文字で書いてある。——只乗じいさんの刃傷趣味も、病膏肓（こうこう）で、ちょっと眼を放すと、すぐ腹を切ったり、羅切したり、腕や脚を自分でおとしたりする。いつかなど、自分で自分の首をはねてしまい、それをつなぐ時には、さすがの外科ロボットも、オレ、オヒマモライタイ、といい出した。

只乗じいさんをロボットにまかせて、ぼくは広間の隅に、べったり芸者坐りにすわって、諸肌ぬぎで、髑髏そっくりの顔に、しきりとベタベタ紅白粉をぬっている、カプセル穴広ジイ婆（ば）ァの所へとんでいった。——顔や頭や腕が、まるでミイラのようにやせほそり、皮膚が茶色で、カサカサなのに、諸肌ぬいだ胸にもり上るおっぱいだけが、まるで若い女のそれのように、ボインともり上り、ぬめぬめ脂切ったように白く光っているのは、何とも異様で凄

惨な眺めだった。——それもそのはず、このおっぱいは、百二十年前、穴広ジイ婆（ば）ァが、男から女になりたくて整形して以来、度々の保存措置によって、そこだけ昔のままに年をとらないのである。百二十年ほど前には、くだらない性倒錯ごっこがはやった。今から見れば、児戯に類するような野蛮きわまる性転換医術で、男を外観だけ女につくってみたり、女を男にしてみたり、ばかな事をやったのである。

カプセル穴広ジイ婆ァも、当時その方のチャンピオンだった。——ただ妙な趣味で、胸にはオルガノーゲンとやらで大きなボインをくっつけたのに、下の方は、もっぱら後穴を使用した。当時の有名な樽柿蛍先生に傾倒していたせいもあろう。特に彼女的彼の特技とする所は、ふつう女がやる「花電車」という芸術を、後穴でもってやることで、筆をはさんで「忠孝」と書くのは、もとよりバナナの食い切り、銀貨のすいとり、はては、われると色のついた煙の出るカプセルを、実に二十箇もいれて、速射砲のごとく射出す芸は大うけにうけ、それが芸名になった。もっとも今ではちがう意味があるが——。ぼくはよく知らないが、後穴の方も、使いすぎると女性の前穴同様ゆるみ、たるんでくるのだそうである。齢六十をこえた時、彼女的彼は、その弛緩を悲しみ、まだピンシャンしている男性自身を思い切りよくとりさって、前にもう一つ、人造肛門をくっつけたのである。それも、ちゃんと直腸とつながった奴を！

だからあたしは、二穴（ふけつ）じゃなくて、かえり一穴（いっけつ）ね、と彼女的彼は自慢したが、その穴もま

もなく名前の通りひろがって、一穴じゃなくていんけつだと陰口をきかれるころになると、お頭の方もそろそろぼけてきて、容色ミイラの如くおとろえ、のこされたものは、年不相応なボインと、ゆるみきった二つの排泄口だけ、ということになったのである。

それでも、彼女的彼がこの特別養老院へきた二、三十年以前には、まだ厚化粧でしなの一つもつくれば、それはそれ、ゲイの力で、かすかな色気も出ないではなかった。だから、最初はみんなでゲイ婆ァとよんでいた。だが、今となってはお骨の生ま上げよりもっとひどいし、ぼけにぼけて、やたらに泣き虫になって、陽気な所は一つもなかったから、みんなジイ婆ァとよぶようになった。――ぼくがその穴広ジイ婆ァに近よって行くと、彼女的彼は、しなをつくって、毒々しくぬりたくった、紙のようにうすい唇をひらき、二、三本歯のかけた口をあけて、お化け提灯みたいな顔でニタリと笑い、

「あれさ、アーさん……」としわがれた声でいった。

近よると、猛烈な悪臭がムウッとすわりこんだ腰のあたりからした。

「また、いいつけを忘れて、カプセル形成剤をのまなかったんですね」ぼくは顔をしかめていった。

「ほんとにいつもいつも、汚してばかりいて！　今度こそ、ほんとにお仕置きしますよ」

ぼくはジイ婆ァの拙い面をピシャリとぶった。

「あれ、いいわ、すてき……」ジイ婆ァはグラリとよろめきながら、変な鼻声を出した。

「もっとぶってェン……」

「動いちゃだめ！」ぼくはジイ婆ァをつきはなした。「そんなにすりよらないで！　ほら、汚ないのがつく」

「ぶって、ぶって」といいながら、ジイ婆ァは、身をよじって泣き出した。コテ塗りのお白粉がはがれてボロボロおちた。「もっとぶって」

「おーい」とぼくは外科ロボットに声をかけた。「そっちがすんだら、こっちを手つだってくれ」

「ヤレヤレ」と外科ロボットはぼやいた。

外科ロボットにおさえつけさせて、ぼくはやっとジイ婆ァの、おむつをとりかえた。なにしろ大食いの上に、ゆるんだ穴が二つもあいているので、ちょっとした事で、すぐしくじってしまう。おむつがいくらあってもたりないので、せめて出る時にカプセルにはいって出てくるように、カプセル形成剤を日に三回のむようにいいつけてあるのだが、それが頭がぼけていて、ちょっと眼をはなすとすぐ忘れる。それでこういう事になっちまう。ぼくはジイ婆ァの股にテンカ粉をはたいて、やっとおむつをあて――その度によろこんで体をすりよせてくるのには毎度往生するが――カプセル形成剤をジイ婆ァの口にぶちこんでおっころがした。ジイ婆ァは、ぶってぶってといいながら泣きわめいた。

「じゃかましい！　歯ぬけ！」と、むこうの方でまた野崎じいさんが、しょうこりもなくど

なっていた。

「ふにゃふにィ！」と矢先じいさんもどなりかえした。

「ああ、ああ——またはじめちゃった……」ぼくは天を仰いで嘆息した。

「そも、あの喧嘩は、なにゆえにはじまったですか？」と喜照じいさんが、もっともらしい顔できいた。

「ああそうだ。思い出した」ぼくは頭をふった。「矢先じいさんが、誰かが来たといっていたんだっけ」

ぼくは、傷だらけのくせに、またもやつかみあいをはじめようとしている二老人の間に割ってはいった。

「さあ、いいですか」とぼくはいった「いったい誰が来たんです？」

「ふにゃんふにゃくふィふにょふェン……」

と矢先じいさんはいった。

「安楽死保険？」ぼくは呆れていった。「勧誘員ですか？」

矢先じいさんはうなずいた。

「やあ、面白い！」と助六英じいさんが手をたたいてとびあがった。「呼んでこよう。呼んでこよう」

広間にむらがった、弥次馬の人垣がどっとくずれて、玄関の方へ動きはじめた。

「いけません！　いけません」ぼくは一生懸命叫んだ。「かまっちゃいけません！　外の人をオモチャにすると、罰せられますよ。——ぼくが追いかえしますから、ひっこんでいてください！」

だが、そんなことをきく連中ではなかった。みんなワイワイヨタヨタと玄関の方へむかって流れ出し、もうとめてもとまらぬ勢いになってしまっていた。

しかたがないから、ぼくはじいさまばあさまの群れをかきわけ、せめて先頭に出て、バカな保険員を追いかえそうとした。

玄関へ通ずる廊下の隅に、アドバルーンのようにぶくぶくふくれ上った、醜怪な塊りがうずくまっていて、ぼくたちが近づくのをみると、ヒーイと泣き声をあげた。——駒木咲夫じいさんという、もとＳＦ作家で、もともと肥っていたのが、この養老院へ来てから、食いすぎと煙草の吸いすぎで、動けないほど肥ってしまった。「ごめんよう。ごめんよう」と駒木咲夫じいさんは、手をあげて顔をかばいながら、泣き叫んだ。口から煙がポッポッと輪になって出た。「もう、ウソをいわないから、堪忍してよう！」

「何を！　このデブ！」と野崎じいさんが、まるまるふくれ上った腹をボンと蹴上げた。

「もっともらしい顔をして、ウソばかり書きやがって……みろ、お前の書いた未来と、この未来がどんなにちがうか……」

咲夫じいさんは、ヒイと泣いた。——このあわれなもとＳＦ作家は、まだ前世紀の後半ご

ろ、調子に乗って、未来はこうなるといったＳＦを書きまくった。本人は肺ガンと心臓病で早死にするつもりだったらしいが、どっこい医学の進歩はそれを許さず、首尾よく肺ガンになって死ぬと思われた時に、ガンの特効薬がうまれて助かってしまい、心臓の発作を起した年に、百パーセント完全な人工心臓ができて、また助かってしまった。以後、何度か自殺をはかったが、その度にまわりが意地悪く、手どり足どり生きかえらせてしまい、彼が昔、得々として描いてみせた「未来」が、いかにまちがったものであったか、ということを見せつけては、ひどいいやがらせをやった。——おかげで駒木咲夫じいさんが、この特別養老院へ来た半世紀前には、すっかりノイローゼになっており、いつも廊下の隅にうずくまってブルブルふるえながら、人が近づくと、ごめんよう、ごめんよう、といって泣き出すのだった。

　それをあわれむような、しおらしい老人は、この養老院に一人もいないから、そうなるとみんなよけいに面白がってじいさんをいじめ、ウソを書いたといっていやがらせ、そのじいさんの傍を通る度に蹴っとばしたり、たたいたり、唾をひっかけたりするのが習慣になった。

——その時は、いっぺんに大勢の老人が通りかかったのだから、駒木じいさんにとってはまさに厄日だった。野崎じいさんは蹴っとばし、矢先じいさんは義足で顔をぶんなぐり、マリコ婆さんは、ふくれ上った腹に針をつきさした。ひどいニコチン中毒の駒木じいさんは、ヒイヒイ泣きながら、せっかく胸いっぱいためこんだ煙をみんな吐き出してしまい、マリコ婆さんにあけられた針の穴から、やにがどろりと流れ出した。

　みんなより先にかけつけようとしたが、間にあわなかった。——間ぬけな、若い安楽死保険勧誘員は、たくさんの老人にとりかこまれ、ちょっとびっくりしたように、ニコニコしながら、すでに中に連れこまれていた。——安楽死保険にはいるのは、老人が多かったから、新米のマヌケ勧誘員は、宝の山にはいったような気がしたろう。そのまわりに、いいひまつぶしのタネがとびこんできた、といわんばかりに、ニタニタと残忍な笑いをうかべている、無数の醜怪なしわくちゃ顔面をみた時、ぼくはげんなりし、頭が痛くなった。

「ほーほー」と、じいさんの一人は奇声をあげた。

「いい男だこと……」と、色キチガイの婆さんが青年の頰にさわりながらいった。

「みなさん、いいお年寄りばかりですね」と、その勧誘員は、ぼくの顔を見て、愛想をいった。

「バカ」と、ぼくはいった。

「さあ、みなさん、ニコニコ安楽死保険を一口いかがですか？」と、そいつは申込用紙をカバンから出して、まわりを見まわした。「安楽死保険をまだ御存知ない方のために一言申しますと——これは、退屈でわびしい老後を、生命のつきるまで、鬱々と生きながらえるよりは、いっそ一思いに死にたいと思われる御老人たちへ、いつでも好きな時に、さまざまな、夢のような安楽死をもたらす保険でございます。生命保険をおかけの方は、それとふりかえていただいてもけっこう。六カ月から一年かけると、安楽死サービスがうけられます」

と、さっき腹を切ったばかりの、横寝只乗りじいさんが、妙な声で笑った。

と、みんなもたのしそうに笑った。

「保険屋さんや……その保険でうけられる安楽死サービスは、何種類あるのじゃ?」と、じいさんの一人がいった。

「はあ……まず、一番の筆頭が、蓮華往生、つまり腹上死ですが……」と、保険勧誘員は、

「新米社員用往生要集」と書いた虎の巻を見ながらしゃべった。「これは、みなさん御無理な方が多いかも知れません。しかし、御希望とあれば、わが社の極上サービス女性が三人がかりで……」

「キャッホウ!」と色キチガイじいさんがとびあがって叫んだ。

「なるほど、蓮華往生か――それ、用意しろ。それから?」

「麻薬系統の薬品をのんで、夢うつつで死ぬラリパッパ往生もあります。これもネオネオネオLSDや、ネオネオネオヘロインまで、シビれる薬が何種類もございます」

「あれをとってこい!」と誰かがどなった。「そうじゃ。棚の上にあるやつじゃ」

「それから?」

「ええっと――特殊なものになりますと、おスペ往生というものもございます。マゾヒズム往生というのは、お好きな方でないとどうも……。それから、これが意外におよろしいのですが、ブランコ往生というのがございます。いわゆる首吊りですが、首がしまる瞬間に、何ともいえぬ恍惚感が味わえるそうで……」

「そいつはけっこうじゃ!」みんなは大よろこびで叫んだ。「それ!　それ!　用意しや。おもしろい事になるぞい!」

「みなさん、何をなさってるんで?」若い勧誘員は、あいまいな微笑をうかべながら、ヨタヨタかけまわっている老人連中を横眼で見て、ぼくにきいた。

「バカ！　アホウ！」とぼくはいった。「マヌケ！」
「へ？」
「ほんとにあんたは、手のつけられないバカだな」とぼくは肩をすくめた。「いったいここを、どんな所だと思ってるんだ？」
「さあ——たしか、表には特別養老院と書いてありましたが……」
「それを読んでいながら！」ぼくは呆れて眼をむいた。「じゃ、あんたは特別養老院ってどんなものだか知らないのか？」
「ええ、私はまだ新米なんで——新しい所を開拓しようと、はるばる出かけてきたんですが……」
「じゃ、ここがどうして、こんなに人里はなれた所にあるか、そのわけも知らないのか？」ぼくは、ホウボウと奇声を発して、ヨタヨタ走りまわっている老人たちを見ながらいった。
「あの連中に、安楽死保険をすすめるなんて——まったくなんてバカだ！　あの連中はな、今まで何十回となく、安楽死あそびをやって補導されているんだ」
「へっ？」と保険員は眼をパチクリさせた。
「じゃ、あの連中が——〝フーテン老人〟なんで……」
「その中でも、一筋縄でも二筋縄でも行かず、箸にも棒にもかからず、煮ても焼いても食えない連中ばかりだ。安楽死保険詐欺なんて、何回やったかわかりゃしない。とにかく、意地

悪で、残忍で、狡猾で、お下劣で、その上頭がボケていて、そのくせ悪智意ばかりはたらく。世間に出しとくと、あんまりはた迷惑なんで、わざわざここへ隔離したんだ。まあ一種の、老人感化院さ。——だけど、今さら感化できるわけもなし、まあていのいい、集団座敷牢さ。そんな所へあんたがとびこんできたんだから、連中のひまつぶしにどんな目にあわされることか——まず、なぶり殺しに……」
「あ、あの……ぼく、かえります」と保険勧誘員はガタガタふるえ出していった。「お邪魔しました。すみませんが、警察をよんで……」
「警察だってだめさ。刑法でも改正しなきゃ……」ぼくは冷ややかにいった。
「百七十歳以上の老人は、刑法上の罪に問われない、なんて、古くさい法律がまだ生きてるんだから——連中の中で百七十歳以下のやつは誰もいない……」
「さあ、保険屋さん……」うしろでいやらしい猫撫で声がした。
「さあ、おいで坊や……保険の説明をしておくれ」
「あ、あの……私は……」マヌケな保険屋は紙のような顔色でガタガタふるえた。
「さあさあ……」と急造の絞首台を前に押し出しながら、じいさんの一人がいった。「あんたのいうとった安楽死のやり方、やってみておくれ。でないと、ほんとに安楽に死ねるかどうかわからんじゃろ？」
「なんですか、この絞首台のデザインは……」もと建築家の喜照じいさんが、そり身になっ

て眉をしかめていった。「ダイナミックじゃないですね。——柱は二本もいりません。構造計算さえちゃんとしてれば、一本で充分ですよ」

「さあ、さあ」と、マリコ婆さんがいった。

「さあさあ」とみんながいった。

「助けて！」保険屋はついに悲鳴をあげた。

「手おくれだよ」とぼくはいった。

じいさまばあさまは、どっと保険屋におそいかかった。たちまち、泣き叫ぶ保険屋の若僧はかつぎ上げられ、絞首台の縄の輪に首をつっこまされ、ガクンとつりさげられた。白眼がクルリとひっくりかえり、舌が吐き出され、青い洟が二本出た。

「キャッ、かっこいーい！」と助六じいさんが叫んだ。

もと失神女優が感激のあまり泡をふいてぶったおれた。かつての失神女優は、今やテンカン女優になっていた。

「死んだかや？」と誰かがいった。「じゃ急いで蘇生室へつれて行くじゃ」

「次は何を使おうかのう？」

「毒薬が、ようござぁますわ、早く生きかえらせておやりあそばせ」

みんな死体を台からはずすと、ワイワイと蘇生手術をうけさせに連れて行った。——ぼくは背をむけた。生きかえっては殺され、殺されては生きかえらされ……あわれなあの若僧は、

しばらくの間、なぶり殺しとなぶり生かしの間を翻弄されるだろう。生死の境をさまようとはこのことだ。私にはどうしようもない。連中が若僧の体をすりつぶして、再生不可能にしないように気をつけているだけだ。

「なんだなんだ」と、奥の方から、もと曲木賞落選候補作家の井筒康降じいさんがとんできた。

康降じいさんの顔は、メッシュのこまかい篩の網をかぶせたようにしわがおおっていた。その上に、さらに一ミリぐらいの間隔で縦じわが平行にはいり、その顔は、むかしの立体カラー写真のように、すこし左右に動くと、怒った表情と笑った表情がチラチラかわった。

「なに？　それは大変だ。天下の一大事だ」と康降じいさんはわめいた。

「まだ何もいってませんよ」ぼくは呆れて、騒々しいじいさんをながめた。「若いマヌケな、安楽死保険の勧誘員がやってきて、みんなになぶりものにされてるんです」

「なに？　若いやつが来て、みんなをなぶりものにする？」

「そうじゃありません。その逆です」

「いや、そうだ、そうにちがいない」といって、康降じいさんは、私から見て怒っている表情の見える角度に顔をむけ、指をつきつけた。「かくすな。さては、お前も若いやつのスパイだな」

康降じいさんの被害妄想といえば、当養老院でも有名だった。その上、無類のそそっかし

やで、早のみこみで、何でも自分の都合のいい方へ解釈して、怒りっぽい。——これが現在、科学の研究をやっているのだからどうかと思う。
「最近の若い奴は何かというと、年寄りをバカにする。うぬ、くやしい。だが今にみろ」
康降じいさんは、研究室の方をふりかえると、大声でどなった。
「干さん！」
「はイイ！」と太い声がして、大きな干梅一じいさんが、ヌーッと奥から現われた。
名前が干梅一なのに、このじいさんは、ほかの連中とちがって、しわが一つもなくて、赤ン坊のような顔をしていた。ただ頭の髪の毛がまっ白で、それをピンクの毛糸編みのボンネットでおさえている。胸に大きなよだれかけをして、ゴムの乳首をくわえている。これが一メートル八十もある体の上にのっていると、妙な感じだ。——外見だけでなく、内容も不思議なじいさんで、九十歳の時に乳歯の一部がはえ、「天才に紙一重」といわれた老人である。きちがいと天才は紙一重と昔からいわれているから、「天才に紙一重」へだてているという事は、まあキの方という事である。百数十年前から気違い科学者（マッド・サイエンティスト）のよび声が高く、十円いれると領収書の出てくる自動コジ機とか、石をすると、幽霊（ゴースト）の出てくるライター——「ゴースト・ライター」とか、不思議なものを——それも何の役にも立たないものばかり——一ぱい発明していた。その発明品中、史上もっとも有名なものに、「干の四大コンドーム」があり、この発明によって彼はもうちょっとで、狂人にだけあたえられる勲章、「キ綬宝章」をもらえる所だった。「四大コンドーム」とは、女性のクリトリス用のコンドーム、のどチンコのコンドーム、松茸にかぶせる虫食い予防用のコンドーム、それに人工衛星が悪い病気にかからないようにかぶせる、「衛星サック」である。とにかくこのじいさんが康降じいさんといっしょに、何か一生懸命研究しているのだから、あまりおだやかでない。

「干さんきいてくれ！」と康降じいさんは興奮して、よだれをたらしながらわめいた。「若い奴が、おれたちをなぶりものにしにきた。大体今の若い奴には、年寄りを尊敬する念がちっともない。そうだろう？」
「そうだそうだ」と梅干……じゃなかった、干梅一じいさんは首をチョン、チョンと左右にうごかしていった。
「おまけに、あわれな年寄りをこんな所に押しこめて、社会から隔離する」
「ほんと、ほんと」
「大体、まだ尻の青い若いやつらのくせに生意気だ。このままほうっておくわけに行かない」
「まったく、まったく……」
「なぜそんな妙なしゃべり方をするんです？」と、ぼくは首をふりふり、二度ずつしゃべる干じいさんにきいた。
「これがこれが、私の私の、発明した発明した、一人一人、ステレオステレオ、放送式放送式、

しゃべり方しゃべり方……」といって干じいさんはニヤニヤ笑いながらいった。「私の私の、声が声が、まん中からまん中から、きこえたらきこえたら、ステレオですステレオです」

「わしの、立体写真式の顔と、干さんのステレオ話法をあわせれば、スーパー立体音響スコープだ」と康降じいさんはうれしそうにいった。「総天然色じゃ。ちがうか？」

「その通りその通り」と干梅一じいさんはいった。――ぼくはばからしさのあまり口をきく気にもなれなかった。

その時、康降じいさんの眼ざましがジリジリとなった。

「時間だ」とじいさんはいった。「干さんや。駒木咲夫に小便ひっかけに行こう」

二人は毎日きまった時間に、あのあわれな駒木咲夫に小便をひっかける。三人とも、もとは同じ仲間だったというのに、百年以上もたつと、何ともひどい事をする。

むこうでまた、ヒー、ごめんようという声が一しきりすると、康降じいさんは、また拳骨をふりまわしながらかえってきた。

「けしからん、けしからん」とじいさんはいった。「とにかく近ごろの若いものは生意気だ。今に見ておれ」

「さあさあ、もういいでしょう」とぼくは、じいさんばあさんどもが、保険屋の体を六つの部分に切りはなした所で、わってはいった。

「いいかげんにしないと生きかえらなくなりますよ」

バラバラの四肢や胴体を、ドラム罐にほうりこんで、蘇生手術室へもちこむと、ぼくは手術室の鍵をかけた。――広間へかえってみると、またおかしなさわぎがもち上っていた。井筒康降じいさんが、腕をふりまわしてみんなをアジっていた。

「みんな、今こそわれわれ老人は立ち上るべきだ」と康降じいさんは、ステレオ型の縦じわを波うたせながら叫んだ。「立って、いい気になっている若いやつらに眼にもの見せてくれるべきだ」

「そうだそうだ」と干じいさんがいった。

「立ていうても、もう立たへん」と野崎猩々じいさんがいった。「むりに立てたら、逆にそりかえりよる」

「どういう風にしてやっつけるの？」と小和藤田まことが、六度目の飯を食いながら似顔絵を描いていた画板から、長ンがい顎をあげた。「むこうの方が強そうよ」

「干梅一じいさんが、すばらしいものを発明した」と康降じいさんが、干じいさんの方を指さした。

「ほんとほんと」と、干じいさんは、小さな玉をポイと投げた。

ドカン！　とえらい音がして、床の上に、高さ十五センチぐらいのかわいらしいキノコ雲ができた。

「ヒッヒッ……ぜいぜい……だいだい大発……ヒーッ……明ってのは……ゼロゼロ……セブ

ン……ゴホン……こ、これか――ヒュー！」と短古細じいさんがいった。
「いやいや、これはこれは、原爆原爆、カンシャク玉カンシャク玉」と干じいさんはいった。
「どれなの？」と横寝只乗じいさんがきいた。
「恐怖の新兵器、超強力老化爆弾〝ウラシマ爆弾〟だ」と康降じいさんは、そっくりかえった。――とたんにじいさんは台からころげおちた。
「イタタタ……」と康降じいさんは泣き声をたてた。「また神経痛が出た」
「ざまみろ」とウイスキーをがぶ飲みしながら野崎じいさんが毒づいた。
「ふにゃふにゅふにゃふにい……」と康降じいさんにかわって台の上に上った矢先じいさんが、口から泡をとばしてアジった。
「はっきりいえ。わからんぞ」と声がした。
「ナーンセンス！」
「ダイジョブカ？」と外科ロボットが、電子眼をグリグリさせて、心配そうにきいた。「ホシジイサン、ホントニスゴイバクダンツクッタヨ。イッパツデ、ニンゲンミンナ、ジイサマニナルヨ」
「ほっとけよ」とぼくはいった。「どうせそのうち、くたびれてねちまうさ」
ところが、じじいやばばあ連中は、なかなか疲れそうになかった。――みんなますます興奮し、そのうちに中でつかみあいの喧嘩がおこった。

「ナカマワレ、シテル」と外科ロボットが報告した。「オカマノレンチウ、ブンパツクル」
「気にする事ないさ」と、ぼくはいった。
「どうせさわぐだけだから」
「われわれは――われわれの――われわれに――われわれが――」と広間の方から、「われわれ」という言葉以外、何もわからないアジ演説がきこえてきた。
「われらがヨボヨボの同志よ！」と別のアジがきこえた。「今こそ革命の時がきた。老人が疎外されるのは、世界が生意気な若僧どもに支配されているからだ。今こそ全世界の若僧どもをみんな老人化して、この不条理な世界を改革しよう！」
「そうだそうだ」と干じいさんがいった。
「街へ出かけよう！」と誰かが叫んだ。「若僧どもに攻撃をかけるのだ」
「かっこいーい」と助六英じいさんが、蛇の目傘をポンとひらいて、見栄を切りながら叫んだ。
「デモニユクトイッテルヨ」と、外科ロボットが報告した。
「行けるものか」とぼくはゾロゾロ玄関へ出て行く連中を見てせせら笑った。「乗物は全部、キイをはずしてある。街までは遠い。百メートルも行かないうちに、へたばっちゃうさ」
　ギャアギャアピイピイいいながら、じいさまばあさまの群れは玄関を出ていった。カプセル穴広ばあさんも、おむつをひきずりながら、――と、まもなく、エンジンの音がきこえた。

「タイヘンダ」とロボットはいった。「サッキノホケンヤノクルマ、キイガツケッパナシニナッテイタ。レンチウ、ソレニ、トレーラーツナイデカケタ」
「しまった！」ぼくはとび上った。「保険屋の車の事を忘れていた」
表へとび出すと、もうトレーラーに老人連中を満載した車は、ほこりをまき上げて、走り出したあとだった。酔っぱらった野崎じいさんひとり、トレーラーからころげおちた。「やーい！」と、じいさんばあさんがはやしたてた。「じいさん酒のんで、よっぱらってころんだ」
「とめなきゃ……」と、ぼくはロボットにいった「早く車を……」
「ミンナコワレテル」とロボットはいった。「スグニハウゴカナイヨ」
ほんとに、何台かある車が、どれもだめだった。ふだん、めったにつかわないからだ。なおしているうちに、時間がどんどんたっていった。
「エライサワギダヨ」とロボットが報告した。「テレビデヤッテル」
立体テレビの方をのぞくと、たしかに大変なさわぎだった。老人連中はどこで手にいれたのか、めいめいヘルメットをかぶり、ヘルメットのない連中は、おまるや鍋をかぶって、喚声をあげて、大通りをデモしていた。「全老連」と書いた赤旗がひるがえり、てんでにゲバ杖をついて通りにあるものを何でもぶちこわし、むこうから婦人警官の機動隊があらわれると、尿瓶だの入れ歯だのがポンポン投げられた。婦人機動隊が、近寄って行くと、抱きつい

ておっぱいやおしりをさわる狒々爺いもあり、ちょっとさわられると、たちまちひっくりかえってイタイイタイ、年寄りをぶったあ、と大げさに泣きわめく。途中でへたばって、居眠りをはじめるのや、垂れ流しするのや、えらいさわぎである。
「干じいさんの爆弾は？」と、ぼくはエンジンをなおしながらきいた。
「イマ、クミタテテル」
「さあなおったぞ」ぼくはエンジンをスタートさせながらどなった。「お前ものれ。早くとめないと大変だ」
街までフルスピードですっとばしたが、まにあわなかった。――街の入口までいった時、ボンとえらい音がして、まっ白なキノコ雲がムクムクと宙天高くもり上った。――つづいてまっ白な「老の灰」がふりそそいだ。ぼくは急にのどがゴロゴロなり、小便がしたくなり、こらえられなくなって、車の上でもらしてしまった。
「やれやれ……」とぼくはいった。「とうとうまにあわなかったのう……」
「ドウシヨウ？」と外科ロボットは情けなそうにいった。
「いやいや、なったらなったでかまわん」ぼくはゴホンゴホンとせきこみながらいった。
「ざまあみろ、じゃ。政府のコンピューターにも、まさか、人類が、じいさまに革命をおこされる、というデータは、はいってなかったじゃろ。――こうなったら、わしもやるぞ。今までじいさまのわがままには泣かされていたが、今度は、わしもうんと意地悪をしてやる。

考えてみると、わしも前から、早くじいさまになりたかったんじゃ」
「アーア」とロボットはぼやいた。「キカイコソイイメイワクダ。キカイガトシヲトル、バクダンハナイカナ」
「あるものか！」ぼくはニタニタ笑いながらいった。「じじいになるのは、人間だけの特権じゃ。意地悪するのも、な……」
ロボットは、ギーッとわめいてとび上った。——ぼくが、エンジンの電線を、こっそり奴の神経電線につないでやったからだ。
煙をもうもうとはいて、ポンポンとび上るロボットをみながら、ぼくはずくずくにぬれたズボンをはいたまま、ニタニタ笑っていた。——まったくいい気持だった。これこそ、じじいだけに味わえるたのしみというものだ。

ヴォミーサ

一

ぼくたちは、その夜、数日前の落雷の話をしていた。

ぼくたち、というのは例によって、ぼくと、エドとキャロルの三人、場所も例によって、スナック〝ベビイ〟だった。

火曜日の晩で、〝ベビイ〟はすいており、ぼくたち三人のほかに、カウンターのむこうのすみっこに、知らない中年のお客が一人、半分のこしたピザの皿を前にして、ひっそりとコーヒーを飲んでいるだけだった。通りがかりの客らしい。外にレンタカーが一台おいてあった。眼鏡をかけ、鼻筋の細い、おとなしそうな顔つきの紳士で、ゆっくりコーヒーを飲み、細巻葉巻（シガリロ）をくゆらし、週刊誌を丹念に読んでいた。――入口ちかいテーブルでぺちゃくちゃ競馬の予想をしゃべっていた、町のあんちゃん風の二人がぼくたちと入れちがいに出て行ったあと、ぼくたちのほかにはその紳士しかいなかった。外は曇っていて、数日前の大雷雨のなごりのようにうっとうしい雲の下で、時おり口ごもとのような遠雷がひびき、よわい稲妻が地平の山々のシルウェットを間欠的にうかび上がらせていた。

ぼくたちは、ほかの客がすわっていない時はいつもそこにを占める、カウンターの一番奥に腰をおろして、店にはいる前からしゃべっていた、例の落雷の話のつづきをはじめた。――なにしろ、それほど異様な事件だったのだ。

「で、測候所や気象台は、どういってるんだい？」

とエドはコーンパイプをとり出しながらぼくにきいた。

「まだ何も発表していないよ。調査をつづけているらしいけど――中央気象台の方じゃ、季節のかわり目によくある雷雨とはいえ、あいつだけは〝史上まれなる例である〟とは言っているけどね」

「そんな事、わかってるわよ」とキャロルは肩をすくめた。「あんなふしぎな雷、はじめてみたわ。――あなただって見たんでしょう？　イシ……」

「見てないやつの方がすくないんじゃないかな。――妹が一番先に見つけて、家中のものがとび出した。まったくたまげたよ。みんな、大流星がおっこって来たのか、と思ったくらいだ」

「やっぱり球雷の一種なんだろうね。どうだい？」

「まあ、ほかに考えられないな」ぼくは鼻の頭をかいた。「でも、球雷なるものの構造や成因はよくわかっていないしね。――目撃例だってきわめてすくないんだ。ぼくだって見たのははじめてだ」

「私はこれでも、二度ほど見てるの。この間ので三度目だけど、あんな大きなの、はじめて見たわ。——ほんとに、月の何十倍もの大きさの、青白い光の球が、ふわーっておっこって行ったんですものね」

「月の何十倍は大げさだよ」とエドは笑った。「地上にちかい物体は、特に夜、光ってると、うんと大きく錯覚するものだ。——実際は視直径にして、月の倍程度じゃなかったかな。それにしても、ものすごい光景だったよ。ここらへんじゃ、もっと大きく見えたんじゃないかね。何しろ、あんな遠くの山の上から、それほど大きく見えたんだから……」

「それも土砂降りの雨を通してね」キャロルは思い出してもぞっとする、という風に、眉をしかめて首をふり、舌をつづけさまに鳴らした。「ほんとにキャンプはさんざん……パンティまでぬれちゃうし、まあ、あの時の尾根の雷ったら！——まわりにドンドンバリバリって、やたら火柱がたつんですもの。まったく生きた空はなかったわ。雷の絨毯（じゅうたん）爆撃ってのには、はじめて出会ったわ」

「よく生きて帰れたね」とぼくは笑った。「町で見てると、山の方に、空からすごい火柱がひっきりなしにつきささるのが見えていた。——じゃ、ちょうどそこに君たちがいたんだな」

「ところで、バーテンダーはどうしたんだ？」エドはコーンパイプをふかしながら、カウンターごしに、奥の調理場の方をのぞいた。

「えらく客あつかいが悪いじゃないか」

「マックス！」とキャロルが奥へむかって叫んだ。「いるの？」

奥で物音がして、白い服を着たバーテンダーがのっそりあらわれた。——マックスと同じぐらい大きかったが、マックスではなかった。

「いらっしゃい……」とバーテンダーは、もそもそした声で言った。「何をさし上げます？」

「マックスは？」

キャロルはけげんそうにきいた。

「配置がえです」と新しいバーテンダーは、ぼそぼそ言った。

「きのうから、私がきました。エリックといいます」

「そうか——そう言えば先週、マックスがそんな事言っていたっけ」エドは思い出したように、カウンターをぴしゃりとたたいた。「すると君がこれからマスターってわけだね、エリック……。よろしく、ぼくらはみんなずっとここの常連なんだ。ぼくはエド、それから妻のキャロルだ。それから友だちのイシ……」

「よろしく……」とエリックは眼を伏せるようにして言った。——相かわらず口の中でつぶやいているような言い方だった。

「私に、アンチョビーのピザをちょうだい」とキャロルは言った。「玉ねぎはいれないでね。わかってるでしょう。——それとコーヒー……」

「ぼくはバーガーだ」とエドはコーンパイプを靴の踵にたたきつけながら言った。「パンは、少しこげ目がつくくらい焼いてくれ。スライスド・オニオンにからしをたっぷり、ケチャップじゃなくて、バーベキューソースだ。――マックスから、申し送りをうけているんだろう……飲物は黒ビール」

「こちらはホットドッグ……」とぼくは言った。「からしとピクルスをたっぷり……それから飲物は……」

「ルートビールでしたね。イシさん……」

キャロルは、ぷっ、とふき出した。

「マックスたら！――いったい何年前の好みを申し送って行ったの？」

「いいんだ……」ぼくは少し赤くなって、にやにや笑った。「ルートビールをくれ。――だけど今じゃ、バーボンだって飲むんだぜ」

エリックという新しいバーテンダーは、むすっとした顔で奥へひっこんだ。

「ずいぶんおかしなバーテンね」とキャロルは口をとがらした。「感じ悪いわ。――マックスの方がずっとよかった」

「まだ慣れてないんだろう」とエドがとりなし顔でいった。「職業訓練所で訓練うけて、すぐこっちへ来たんだ。――きっとここが初仕事なんだよ」

「それにしたって、もうすこし愛想をよくすべきよ」とキャロルは言った。「このごろ、訓

練コードでもかわったのかしら」

「ところで、あの球雷がおちて――被害はあったのかい？」

「かなりあったらしいね」とぼくは言った。「このあたり一帯、十分間ぐらい停電した……」

「それだけかい？」

いいや、と首をふって、ちょっとの間、話す事をまとめようとした。――エドとキャロルは、今日の夕方、週末旅行から帰って来た所だった。このごろの流行で、キャンプには、ポータブルのテレビもラジオも、テーププレイヤーも持って行かない。ただ、地方緊急チャンネル――それは天候急変の際の気象注意報もはいるようになっている――だけキャッチできるトーク・バック付きの特殊ラジオだけは持って行くが、これではくわしいローカル・ニュースは聞けないから、彼らは雷の被害について、ぼくの口からいろいろききたがった。

「球雷が直撃したのは、岡の上の工場だ……」とぼくは説明した。「くわしい発表はまだない。――だが、工場の避雷器はほとんどぶっこわれたって話をきいた。工場の変電所じゃ大型変圧器（トランス）が二つ爆発して火災をおこし、建物の中の高圧送電系統が、何箇所か絶縁破壊を起こして溶けちまった。建物の火災は免れたが……まあ何しろ、この地方じゃ、あんなものすごい雷ってのは、ちょっと例が無いからね。避雷設備だって、いささか甘いものだったらしい。工場の被害調査班のメンバーにきくと、瞬間最大電流は、局所的に三〇〇キロアンペアから、四〇〇キロアンペアもあったらしいよ」

ヒュウ！――とエドが口笛を吹いた。
「そりゃすげえ！――直撃雷の最大電流は、どんなにすごくても、一〇〇から二〇〇キロアンペアだ、と聞いてたがな」
「ふつうは三〇から四〇キロぐらいなものよ」とキャロルが口をはさんだ。「三〇〇キロアンペアをこえるなんて、それ自体が例外的だわ。もし本当だとしたら、直撃雷サージの世界記録かも知れないわ」
「避雷器についていたサージ電流記録装置によると、落雷後三マイクロセカンド最大四二〇キロアンペアに達し、そのあと、三〇～四〇マイクロセカンドの時、三五〇キロぐらいの逆電流が流れている。――測候所のボイズ・フィッシャーカメラのとった写真を見たけど、すごかったぜ。逆電流の時は、工場の一番高い塔の避雷針から空中へ、また、球雷が噴き上がってるんだ。建物の屋根から地上へのアーク放電や、塔全体のグロー放電もうつっていた」
「それじゃ、工場の制御系なんかも、被害甚大でしょうね……」とキャロルが眼を見開いて言った。「機械類は？――何ともなかった？」
「それがね――まったく全自動操業システムってのは、タフなもんだね……」ぼくは奥から皿を持って出て来たエリックを眼で追いながら話をつづけた。「一部はたしかに、絶縁破壊によって断線なんかしたけど――変圧器がふっとんで、外部送電がとまると同時に、自家発電装置が働き出して、保安委員がかけつけた時は、ちゃんともと通り運転していたそうだよ。

建物の中の断線部分は、緊急予備回路が働きはじめていたし、建物の構造破壊部分には、自動修理装置がもう働きはじめていたそうだ。――結局落雷被害による運転停止時間は、わずか二秒だったって……」
エリックがぼくたちの前に料理の皿をおいた。――がちゃん、と音をたてて投げ出すようなやり方だった。おまけにぼくのルートビールと、エドの黒ビールをまちがえておいた。どっちも、マックスなら、絶対にやらない事だった。エドは、肩をすくめるかわりに、ちょいと片方の眉をつり上げ、ぼくにウインクした。
「でも、本当にちゃんと動いているのかい？」とエドは皿をひきよせながらきいた。「それだけの大電流が、とにかく建物全体に流れたんだろう？――コンピューターの記憶装置(メモリイ)が、まず何とかなっちまいそうなもんじゃないか。チェックしてるのかい」
「むろん、やっているよ。――だけど、大変な作業だろうぜ。電子脳(ブレイン)の収納室は、むろん全体が、電磁気的にも、力学的にも充分に保護されてはいるらしいが、あれだけの大電流が、一部の配線や、建屋の構造を不規則につたって、しかも振動電流の形で流れたとすると、多少の影響はまぬがれないだろうな。まあ、工場の連中に言わせると、外部記憶装置の大部分は、ホログラムやガラス半導体など光学系をつかったものだから、メインの所は問題ない、とは言ってたけど……でも、バッファ・メモリイや、プログラム・メモリイには、やっぱり磁気メモリイや演算素子を一部につかっているし、コンピューター・ルームの天井や壁にく

みこまれた瞬間消磁システムの容量をこえる磁界ができちまった事も充分考えられるっていうからね。よほど大事な所には、液体ヘリウム循環系をつかった〝完全反磁性ボックス〟でまもられてるとは言っていたが……」

「センターのCCC（コンピューター・チェック・コンピューター）をつかってるのかい？」

黒ビールを一口飲んで、眉をしかめながらエドはきいた。ぼくもしぶい顔をしてルートビールのグラスをカウンターにもどした。——ひどく生ぬるかった。エドのもきっとそうだろう。

「むろん、やってるよ。——だけど、センターの方じゃ、高速（ハイスピード）CCが、今、別の方に使われているんで、予備の、少容量のCCを使ってしらべてるんだそうだ。だから、ちょっと時間がかかるって……。ああ、何でも、磁気バブルを演算素子につかったセットと、破壊読出し系の一部はそっくりかえなきゃならないだろう、と言ってたな……」

「それでも、工場は、たった二秒の運転停止で操業をつづけてるの？」ぼくの話にきき入っていたキャロルは、ピザの皿をひきよせながら言った。「製品への影響は、大丈夫なの？」

「ああ——電子脳（ブレイン）全体は、容量にかなりゆとりをもたせてあって、それが回路や記憶階層（メモリイ・ハイアラキイ）の中で、〝多重相互転換〟という形式で、融通しあうようにできているからね。——二秒というのは、安全のための〝自動停止と、被害を自己チェックした〟時間だろう。二秒で、もう一度全システムに〝go！〟のサインが出たという事は、つまり擾乱（じょうらん）された部分を迂回

しても、〝何とか行ける〟と電子脳（ブレイン）自体が判断をしたからだろう……」

「何よ、これ！」

キャロルが、ピザを見て、憤然とつぶやいた。——ピザは、塩煎餅（せんべい）みたいに、表面がかわき、カチカチになっていた。エドのハンバーガーは、パンが黒焦げであり、ぼくのホットドッグはなまあったかく、おまけにピクルスを忘れていた。——エドは、お手上げだ、という恰好（かっこう）で肩をすくめて見せ、皿をむこうにおしやった。

「かなり乱暴な新米さんだな」とエドは言った。「もう一度、訓練所へもどってもらった方が、いいみたいだね」

「本部にクレームを言ってやるわ」キャロルはぷんぷんして、カウンターを指先でいらだたしくたたいた。「それにしても、本人にもひとこと言ってやらなきゃ……エリック！」

エリックは、奥の調理場から、またのろのろと仏頂面をつき出した。

が、その時は、ぼくたち三人とも、エリックの方をむいていなかった。——ぶっこわれそうなけたたましい音をたてて開かれた、入口のドアの方をむいていた。黒い帽子を眼深かにかぶり、黒い眼鏡をかけ、まあたらしいダブルのレインコートのボタンをきっちりかけて襟をたてた大きな男が、まるでスイングドアをつきやぶるような勢いで店にはいって来るのをびっくりして見ていたのだ。

——惨劇はその直後に起こった。

二

ぼくたちのすわっていた場所と反対側のカウンターの端、つまり入口に一番ちかい所にすわっていた中年の紳士は、コーヒーをとっくに飲み終り、シガリロを短くなるまでゆっくり吸い、週刊誌もすみからすみまで読み終ったらしく、アタッシェケースにしまいこんで、そろそろ立とうという気配だった。

そこへドアを荒々しくあけて、そのレインコート姿の大男がはいって来た。

そのはいり方があまりに荒っぽく、乱暴な音をたてたので、中年の紳士も、びっくりしたように入口の方をふりかえった。

大男はその黒眼鏡をかけた顔をきっと紳士にむけた。

そいつは、ほえるような恐ろしい声で何か叫んだようだった。――そして次の瞬間、キャロルがひきさくような悲鳴をあげた。

ぼくたちは凍りついたように、カウンターの端の方を見つめていた。――レインコートの男は、大股で一とびにその中年紳士の傍に来ると、いきなり皮手袋をはめたごつい手で、その紳士の首をしめ上げた。紳士の眼鏡がずりおちた。彼はおどろきのあまり声もあげられないようだった。

「エリック！――とめなさい、エリック！」キャロルが金切り声で叫んだ。「あの人、殺さ

れちゃうわ！」

ぼくとエドはストゥールからすべりおりた。――ショックのあまり、口がからからだったが……そして、なぜあの大男が、中年紳士におそいかかるのか、事情もわからなかったが、とにかくほうっておけない情景だった。

「おい！」エドが叫んだ。「乱暴はよせ！」

が、その時はもう、紳士の体は床にずるずるとくずれおちていた。その襟を片手でつかんで、大男は、もう一方の手でものすごいチョップを二つ、三つと、犠牲者の顔や頸にぶちこんだ。帽子がとび、その顔はとびちる鼻血でまっかになった。男のふりまわした腕があたって、カウンターの上からコーヒーカップと皿がふっとび、壁に当って粉々に砕けた。

「やめろ！」

と叫んで、ぼくはそいつの方へとび出そうとした。――背後から、シャツをつかまれなければ、まっしぐらにそいつにとびかかって行っている所だった。

「やめて！――危いわ！　エリック！　エリックにやらせて……エリック！　はやく……」

男は血で汚れてぼろ切れのようになった犠牲者の体を、床にほうり出すと、こっちをむいた。――身長二メートルちかく、肩がいかつく、がっちりしていて、体重だって百キロ以上ありそうだった。眼深かにかぶった帽子と黒い眼鏡、たてたレインコートの襟の間で、その顔つきはまるではっきりしなかった。だが、こちらをむいて立ちはだかった、その姿からう

ける印象は、怪物じみた異様なものだった。

やつは、ぼくたちの姿を見ると、さっきあげた、獣じみたうなり声をのどの奥でたてた。——両腕が前にあがり、やつは明らかに攻撃の姿勢で、こちらへむかって一歩ふみ出した。

「この野郎！　やる気か！」

瘠せっぽちで弱いくせに、向うっ気ばかりやたらにつよいエドが、やめて！　エド、やめてよ！　というキャロルの金切り声に耳をかさず、前にとび出して、カラテの——ならい出してやっと二週間にしかならなかったのだが、——身がまえをした。

「さあ、かかってこい！」

そうエドがどなったとたん、大男の脚がぴたりととまった。

「そらそら……」エドは調子にのって、つき出した方の手を上にむけてまねきながら、じりじりとすり足で男の方にちかづいて行った。「さあ、どうした？　カラテがこわいのか？——かかってこい！——ほら、こいよ……」

男は仁王だちになって、両腕をなかば上げたまま、半歩後へさがった。——男のごつい体の中で、何かがふくれ上がり、何かが闘っているように感じられた。身長二メートル、体重百キロ以上ありそうなそいつが、いくらカラテのかまえをしてみせたといえ、体重五十六キロで、蚊トンボみたいに瘠せているエドをおそれ、ためらったとは到底思えなかった。ご自慢の、最近やっとかっこよく生えそろったもじゃもじゃ髯の中で、エドにとって「主観的に」猛悪非情な面つきで歯をむいて見せても、だ……。

だが、思いもかけない事が起こった。

その大男は、突然うめくような声をのどでたてると、がっ、と両手で頭をおさえた。——まるで何かのはげしい発作におそわれ、苦しんでいるようだった。

「さあ、こい！」

エドは、また一歩ふみ出した。

帽子の上から頭をおさえたまま、大男は、だっ、と大きな音をたてて一歩さがった。——ぎりぎり、と歯をくいしばるような音が、男の口のあたりから聞こえた。

「ヴォ……」と大男は、しゃがれた、人間とも思えない声でうめいた。「ヴォ……ミーサ！」とたんに男は、身をひるがえし、ドアをぶちこわすような勢いで外の闇に走りこんで行った。

「弱虫め！」と身のほど知らずのエドは、すっかりいい気持になって、ゆれているスイングドアにむかって叫んだ。「見たかい？——おれのカラテのかまえを見ただけで、逃げてったぞ」

「いいからキャロル、シャツをはなしてくれないか？」とぼくはしずかに言った。「君は、さっきからずうっと、シャツと一緒に、ぼくの背中の皮に爪をたてているんだ……」

三

まったく悪夢のような事件だった。大男におそわれた、あの中年の紳士は、ほとんど即死にちかい状態で殺された。最初にあいつが、あのでかい、黒の皮手袋をはめた両手で、のど首をわしづかみにした時、窒息と、頸椎破壊のために死んでしまったろう、と警察できかされた。とすると、あの凶暴な大男は、あわれな犠牲者の、すでに息絶えた死体を、何度も何度も力一ぱいぶんなぐったわけだ。――その事を考えると、吐き気がこみあげた。死後の打撃で、下顎骨と顴骨（かんこつ）が砕かれている。

「結局――狂人ですか？」

ぼくは、犯行目撃者としてよばれた警察できいた。

「何とも言えんが――とにかくおそろしく凶暴で危険なやつである事はまちがいない」とファット警部は口髭をかみながら言った。「頭のおかしくなったプロレスラー……まあ、そんなタイプの犯人だな」

とたんに横で、ぴしゃっ、という大きな音がした。

「なぜ、ぶつんだよ？」

エドが、赤くなった頬をおさえてキャロルに文句を言った。

「なぜもくそもあるもんですか！　このおっちょこちょい！」キャロルは眼をギラギラさせ

てエドに食ってかかった。「身のほど知らずも程度があるわ！――もうあなたにカラテなんか絶対に習わせないわよ！　ほんとにまあ、調子にのって、あんな化け物みたいにでかい、凶暴なやつにむかうなんて……私をこの若さで未亡人にしたいの？　愛してないんでしょう！――そうでしょう！　何とか言ったらどうなの？」

ヒステリーの発作を起こしたキャロルは、キーッ、と叫んで、警部のデスクの上にあった灰皿をつかんでエドに投げつけた。――エドは、椅子からとび上がって、肘（ひじ）でとんでくるパイロセラム製の灰皿から顔をまもった。キャロルは、デスクの上の書類を投げつけ、ファイルを投げつけ、逃げまわるエドを、部屋の隅に追いつめて、顔をバリバリとひっかいた。

「助けてくれ！」とエドは自慢のひげをむしられながら悲しげな声で絶叫した。「イシ！　見てないで、キャロルをとめてくれ！」

「自分で守れよ」ぼくは、有為な友人の長生きのために、心を鬼にして、背をむけながら言った。「カラテをやってるんだろう？――のしちゃえよ」

「お仕置きがすんだら、あとで部屋をもとの通りにかたづけるんだぞ、キャロル……」警部は溜息をつきながら、痩せた細い手で、禿頭をなでた。「でないと、器物破損未遂と、公共建築不正使用で、二人とも三十分ほど留置場にぶちこむからな……」

ファット警部は、大きすぎて、輪投げの棒にはまった輪のように見えるカラーの間に指をつっこんで、ネクタイをゆるめた。――〝肥満体（ファット）〟と言う姓と裏腹に、警部は、もうこれ以

上は首が邪魔になって瘠せられない、と思えるほど、ガリガリに瘠せていた。名前との対比があまりおかしいので、生意気ざかりのカレッジ時代、ぼくたちはそんな警部に、〃テルジアム警部〃などという綽名(あだな)を蔭でつけてよろこんでいた。有名なフランスの推理作家、ジョルジュ・シメノンの創作した「メグレ警部」が、〃瘠せた(メグレ)〃という意をもつ名前にかかわらず、大男でがっちりしている、とされているのにちなんで、“maigret”のスペルを逆にして、そんな名をつけたのだ。「〃瘠せた〃名を持つのに、大きく肥った警部」の反対で、「〃肥った〃名を持つのに瘠せた警部」といった意味で〃メグレ〃をひっくりかえしたのだ。――そのころぼくたちの間では、そんなひねった言葉の遊びがずいぶんはやった。もう、むかしの話になるが……。

「犯人について、その後何か情報がはいりましたか？」

「何にも……」と警部は憂鬱そうに口髭をなでた。「署をあげて動員して、町とその周辺を非常警戒させ、捜査班とパトロールが、ここと思う所を一軒一軒しらみつぶしに当っているが、どこへもぐりこんだか、まるで手がかりがない」

「もう高飛びしたかも知れませんね」

「その可能性も考えて、すぐ手をうったんだが――今の所、航空機、バス、鉄道、ハイウェイ、いずれも使った形跡がないようだ」

「じゃ……まだ犯人は、町のどこかにひそんでいる可能性が強いんですか？」

ぼくの背筋に、何か冷たいものが走るのが感じられた。――あの凶暴な、怪物じみた男が、まだ……と思うと、もう一度出くわす可能性が想像されて、心おだやかでなかった。

それにこの殺人は、「単純そうに見えて、厄介な事件」と警部が言った通り、何だかすっきりしない事だらけだった。

第一、犯行の「動機」らしいものも、皆目はっきりしない。――気の毒な犠牲者は、この町から六百キロほどはなれた都市の、小さな会社の重役で、平凡な家庭人であり、三児のよきパパであり、敬虔なクリスチャンで、きわめておだやかなおとなしい人柄であり、善良な市民で、しかも、市の青少年問題の委員までつとめ、何度も市から表彰されているような人物だ。どこからつついても、誰かに殺されなければならないような原因は出ていない。この町は、はじめての訪問で、商用で昼、ある会社で人に会ったあと、ダウンタウンで相手の人物と会食し、今夜は午後九時半発の、ローカル線ＶＴＯＬ(ヴァイトール)（垂直離着陸機）バスで、住んでいる都市にかえる予定だった。――その事は、アタッシェケースの中の航空券でもすぐわかったし、昼会っていた人物も、すぐかけつけて証言した。ＶＴＯＬバスストップは、スナック〃ベビイ〃から車でほんの三、四分だったし、早く来すぎて、時間をつぶすために、〃ベビイ〃によったのは明らかだった。

被害者の方に、「殺されるような動機」は全くなかった。また、何もとられていない。――だが、犯人は、〃ベビイ〃にはいって来るや否や、とびかかるようにして一気に彼を殺

している。まるで専門の〝殺し屋〟のように鮮やかな手口で……あとに何の「証拠」ものこさず……。顔はかくし、手には皮手袋をはめ、武器は何一つつかわず……。ひょっとして、被害者は、誰かと「まちがえられて」殺されたのではないか、と警察も考え、その線の可能性も追っていた。遠い大都会の片隅に、今や気息奄々(きそくえんえん)として消滅しかかっているといわれ、もはや一個の「伝説」と化しつつある犯罪(クライム)シンジケートが、何かこの事件に関係しているのではないか、という臆測も出たらしいが、たとえ、そういうおっかない組織が、まだ多少は力を持っていたとしても、そこからわざわざ「殺し屋」が派遣されてくるに値するような「大物」が、ここ何年かの間に町に移って来た形跡はまったくなかった。

ファット警部は、そういった情報に関しては、恐ろしく有能だった。何か後ろぐらい所のある人間で、この町に、警部の眼をごまかしてはいりこめるものは一人もなかったと言っていい。——たしかに、どの町にもいる、地廻り的なグループはあった。だが、この町の、そういったあやしげな連中は、すべて「ローカル」な存在でしかなかった。

被害者の方に、殺される原因らしきものがなく、また犯人が「派遣」されてきた気配もない。——とすれば、これはまったく「行きずりの衝動的犯罪」にすぎないのだろうか？　それにしては、凶暴すぎはしないだろうか？

第一、犯人が一体どこから来たのかもはっきりしない。——警察のしらべでは、この四十八時間以内に、そんな目立つ大男が、外から町へ、はいりこんで来た形跡はない、という。

警察は、さらにさかのぼってしらべているが、人口わずか八千の町へ、そんな風変りな「よそもの」がはいってくれば、誰にだってすぐ眼につく。

とすると、あいつは、あの晩、夜にまぎれて、歩いて町へはいって来たのか？

それとも、やつはもともと町の人間か？

まだほかに、わけのわからない事はいっぱいあった。たとえば——一つかみで、壮者の頸椎をへしおれるほどの男が、なぜ、あんな鶏の骨(がら)みたいなエドのカラテのかまえなどを、あれほど警戒したのか？　最後にはまるで、おびえたように見えた。何かよほど、手痛い記憶でもあったのだろうか？　知能程度はあまり高いという感じがしなかったから、「手痛い記憶」に、簡単に体がすくんだのかも知れない。

それにもう一つ——あの、最後に叫んだ、妙な言葉は、一体どんな意味があるのか？

「さて……」と警部は、かかって来たインターフォンのスイッチを切りながら言った。「もう少し、おつきあいねがうかな。面通し(ラインナップ)の準備ができたそうだ。今日はこれで一応終りだ」

「どこでやるんですか？」と、ぼくは腰をうかしかけた。

「いや、ここでいい。あそこの壁面にアイドホールで投射されるから……」

「でも、この部屋はずいぶんちらかってますよ」ぼくは背後をちらと見てつぶやいた。「それにここには、ネズミがいるみたいです」

部屋の隅で、チュッ、チュッ、という音がひっきりなしにした。——喧嘩のあとで仲直り、

というわけで、キャロルが、血だらけの顔をしたエドをやさしく抱きしめて、ひどい事しちゃってごめんなさいね、でも、あなたの事、かけがえのない人と思ってるからよ、とか何とか言っては、甘ったるいキスの雨をふらしているのだった。

ぼくのあてこすりがきこえたのか、こちらをふりむいたエドの顔は、まったくあわれをとどめた。両頰に無数のみみず脹れをこさえ、その幾筋かからは血がふき出して髯を赤くそめ、貧相なバルバロッサ（十二世紀の神聖ローマ皇帝、フリードリヒ一世のこと。「赤髯王」）みたいになっていた。おまけに、その御自慢の髯が、キャロルの鋭い爪でむしられて、二つ三つ、ふわふわした毛の球になってぶらさがっている、という有様だ。

「なによ、イシ。あなた嫉いてるのね」とキャロルが、ききとがめて唇をとがらせた。「だからあなたも早く、いい人見つけて、奥さんをもらいなさい、と言ってるでしょ」

「ああ、なるべく早くそうするよ。――灰皿ぶつけない女性を見つけてね。爪も短くしてる方がいいな」ぼくはちらばった書類をひろい集めながら言った。「君も顔をふけよ、キャロル。エドの顔中にキスするもんだから、口もとが女ドラキュラみたいになってるぜ」

ドアがあいて、警官が、新しい繃帯で、頭と半顔をぐるぐる巻き、副木をあてた左腕を胸に吊った、三十歳ぐらいの男をつれてはいって来た。――スナック〝ベビイ〟から七、八百メートルほどはなれた所にある、町はずれの雑貨屋の店員だった。

実を言うと、彼こそあの凶暴な男の、被害者第一号だった。犯人は、スナックをおそう前、

もう戸をしめていた雑貨屋をたたきおこし、宿直をしていた店員が戸をあけるや、一撃のもとにたたきのめして、店をめちゃめちゃにかきまわし、服、帽子、レインコート、サングラス、皮手袋、それに靴まで盗んで行った、というのだ。――店へはいって来た時の服装は、「手首、足首まである下着上下」をつけていたように見えた、というから、やつは、それまで着ていたもの一切を、何らかの理由でぬいで、うばった新しいものを身につけ、それからまっすぐ、〝ベビイ〟へやって来たのだ。雑貨屋がおそわれてから、〝ベビイ〟へあらわれるまで、十分とかかっていない。そして今どき、犯行の時につかった服装をどこかに捨て、もとの服に着がえて、知らぬ顔で町にまぎれこんでいるにちがいない。

「あいつはつかまったんで？」と、繃帯だらけの、哀れな男は、おびえたような声できいた。

「いいや……」警部は苦虫をかみつぶしたような顔で言った。「ことわっとくが、これから君たちに見てもらうのは、まだ容疑者でもない。――一応、くさい、そういった事をやりかねない連中ばかりだが、まだ今の所、重要参考人として、来ていただいているんだから、そのつもりで、慎重に見てくれ……まあ、この中に犯人のいる可能性はほとんどないと思うが、念には念を入れてみたいんだ」

警部がデスクの上のボタンをおすと、部屋の一方の壁に明視スクリーンがおりて来て、カラーアイドホールで、五、六人の人物が、現寸丈でうつり出した。――みんな、二メートルちかい大男ばかりで、人相のあまりよくない、一くせありげな連中だった。ぼくらは慎重に、

一人一人見て行った。――一通り見終ると、テレビカメラがきりかわり、一人一人の、全身、バスト、顔のクローズアップが、あらゆる方向からうつった。
「よくわかりませんな……」と店員はつぶやいた。
一通りすむと、今度は全員が、黒い帽子とレインコート、皮手袋でならんだ。――途中からみんな黒眼鏡をかけた。
「ちがうわ……」とキャロルが言った。「あの服装をすれば、一見みんなあいつみたいに見えるけど……感じが全然ちがう。それに肩のいかつい感じが……」
「ちょっと、両腕をおどかすようにあげて……ええと、あいつ、何と言ったっけな……」とエドは口ごもった。「ヴォ……ヴォ……」
「〝ヴォミーサ！〟だ」とぼくは言った。
「〝ヴォニーシャ〟じゃなかった？」とキャロル。
「いや……〝ミ〟だ――最後は、〝サ〟だか〝シャ〟だか、ちょっとはっきりしないけど」
六人の大男が、次々に両腕をあげて、〝ヴォミーサ！〟とうなるのは、変な感じだった。――昨夜の、悪夢のような情景がそこに浮び上がるようで、少し気分が悪くなった。
「みんな……ちがうみたいだ……」とエドは首をふってつぶやいた。「そうだ。エリックなら、もっとはっきりおぼえているにちがいない。どうしてエリックをよばないんです？　彼はずっと見ていたんですよ。彼にきけば、正確なモンタージュだってつくれるでしょう」

「いや……」ファット警部は口髭をかんだ。「エリックは、だめだ……」
「そうよ……」とキャロルも言った。「エリックはだめよ」
その時突然、電話が緊急シグナルを鳴らした。――警部は電光石火の早さで、受話器をとると耳にあてた。
「なに？」
と一言いっただけで、警部はただだまって、電話にききいった。――視線がちら、とアイドホールの画面を見た。そのうち口がへの字に曲げられ、眉が片方だけ、高く高く吊り上がった。
「よし……」と警部は最後にかすれた声で言った。「つづけろ。絶対手をゆるめるな」
電話を切ると、警部は、ふうっと大きく溜息をつき、禿頭をゆっくりなでて、インターフォンのカフをあげた。
「もういいぞ……」と警部はがっかりしたような声で言った。「みなさん、おひきとりねがえ。――丁重にな」
「どうしたんです？」とぼくはきいた。「何があったんですか？」
「やつがたった今、K地区にあらわれた……」とファット警部は、歯がみするようにうめいた。「今度は通行中の女性がおそわれた。なぐられて重傷だが、命はとりとめそうだ。何もとられておらん。非常警戒中の警官がかけつけ、麻痺銃（パラライザー）を三発うちこんだが、運河にとびこ

んで逃げられた。――水上警察が網をはっている。やつは、昨夜の服装のままだそうだ……」

四

警察署からのかえり、やっぱり〝ベビイ〟による事になった。――かえる途中にあるのだから、つい習慣でドアをおしてしまう。ぼくにしてみたら、あのいまいましい新米バーテンの証言が、なぜ「だめ」なのか、エリック自身にきいてみたい気がしたのだ。
だが、〝ベビイ〟には、エリックはいなかった。かわって、なつかしい後ろ姿がカウンターのむこうに見えた。
「マックス！」とぼくは思わず叫んだ。「なんだ！――かえって来たのかい？」
「今日、また急によびかえされましてね……」マックスは、なつかしい笑顔をふりむけた。
「新しいバーテンがくるまでの臨時です……」
「じゃ、エリックは……」
「エリックは具合が悪いのです」マックスはちょっと悲しそうな表情をした。「いま、精密検査をうけております……」
「申告したんだな……」エドはみみず脹れだらけの顔をキャロルにむけて言った。
「したわよ」とキャロルはうなずいた。「誤解しないで。別にサービスの態度が悪かったから、とか、注文をまちがえたから申告したんじゃないのよ。――問題は、エリックが、あの時、殺人をとめようとしなかった事よ。これは重大な事だし、義務として知らせておかなきゃ……」
「何になさいます？」マックスはきいた。「アンチョビーのピザ？」
「ううん、今夜はね――ええっと、サラミにする……」とキャロルは言った。「コーヒーはエスプレッソ……」
「LTB（レタス・トマト・ベーコンのサンドイッチ）にモルト・ミルク……」ナプキンをとりながら、エドが言った。
「クロック・ムッシュにカナダ・ドライ……」とぼくは言った。
「みなさん、今夜は少し変化をつけましたね」マックスは笑った。「それがいいです。たまには、このマックス自慢のスパゲッティなど召し上がってみてください……」
「スパゲッティ……」エドは、何かを思い出したように、顔をあげた。「そうだ、マックス……スパゲッティに〝ヴォミーサ〟って種類がなかったかな？」
「いいえ……」マックスはふりかえって首をふった。「〝ヴェルミチェルリ〟というのはあります。――細い、スープなんかにいれるやつです。それにあさり（ヴォンゴレ）を入れたのもありますが……〝ヴォミーサ〟ってのはありませんね」
「じゃ何か……〝ヴォミーサ〟って名の、香料（スパイス）か、食物か――あるいは、そういう単語その

ものがないかね？」

「いいえ……」ちょっと宙を見て考えてから、マックスは言った。「ありませんね。よく似た言葉で、イタリア語に〝ヴォミト〟という言葉がありますが……ちょっとここでは言いにくい意味です」

「何て意味？」とキャロルはきいた。

「お食事前にはおききにならない方がいいと思いますよ」マックスは肩をすくめた。「〝反吐〟って意味です……」

エドはがっかりしたように肩をおとし、ナプキンの上に、ボールペンで、〝ヴォミーサ〟という言葉をいくつも書きつけては考えこみはじめた。

カウンターにすわっていると、どうしても眼は、入口にちかい方のはしに行ってしまう。――今夜は誰もすわっていないが、わずか二十四時間たらず前、同じ場所で、あの惨劇があったと言う事が、本当に悪夢のように思えた。

警察の現場検証は昨夜のうちにすんでしまったらしいが、床の上にはまだ、死体の位置をしめす白い線がうすくのこっている。

昨夜――わずか二、三分の間に、このひなびた町の、静かな郊外のスナックが、むごたらしい殺人現場と化したのだ……。

「エリックは気の毒でした……」

マックスが料理をはこんで来ながら、つぶやいた。――手早く、まちがえず、しかも、出来栄えは絶品で、エリックとは大変なちがいだった。

「エリックと同期の連中も、みんな勤務先からよびもどされて、精密検査をうけています」

「じゃ、おかしいのはエリックだけじゃなかったの？」キャロルは眼をまるくした。

「あの時、エリックと同じ訓練所を、同期に出た連中は、一応全部ね……」マックスはうなずいた。

「いったいどうしたんだ？」ぼくはジンジャーエールをグラスにつぎながらきいた。「訓練システムに欠陥でもあったのかい？」

「もっと、大変重要な所に問題があったようです。まだよくわかりませんが――私は一種の〝事故〟だと思いますね」とマックスは首をふった。「原因は――おそらく、あのものすごい落雷ですよ。……あなたがたには、おわかりにならないでしょうけど、はげしい雷というのは、私たちにはずいぶんこたえるんです」

「私たちだってこたえるわよ」とキャロルは言った。「私、雷きらいよ。雷が近づくと、頭痛がして、気分がめいって……」

「あなたたちの場合は、温度、湿度、気圧の急変が影響するんでしょう。――でも、私たちの場合は……電気なんです。むろん、消磁装置や、安全装置はついていますが、空中電気や地雷流の帯電パターンが、急激に変化すると、体全体にこたえるんです。近くに落雷した時

なぞ、まったく脳天や背骨をどやされたようなショックを感じ、私でもいらいらします。この間の大落雷の時なども、ほんとうに仕事をほうり出して、かけ出したいような気持ちがしました……」

「ちょっと！……」

突然ぼくは心臓の動悸がはやまるのを感じた。ある事が……今まで考えもしなかった、ある可能性が、突如として、もやもやとある形をとりはじめたみたいだった。

「エリックは……じゃ、あの工場の訓練所を出たのかい？」

「エリックが言いませんでしたか？」マックスは不思議そうな顔をした。「先週の週末、つまり木曜日に、一切の訓練を終えて、金、土、日、三日間の休日の間に、新しい職場へ配置されたんです」

「じゃ……エリックたちが、訓練所で最後の晩をすごした、その夜に――あの大落雷があった……」

「ええ――もう、最終訓練ラインからほとんどが切りはなされていましたし、金曜日の朝、配置の前に、もう一度総合チェックをうけた、と言いますが――やっぱり、すぐにはわからない影響をうけていたんですね……」

「マックス……」ぼくはまだ手をつけていないクロック・ムッシュの皿を押しやって、体をのり出した。「今すぐ、工場の管理課を電話でよび出してくれないか？――夜だけど、宿直

はいるだろう。エリックの事をききたいんだ……」

「何を考えてるの？ イシ……」キャロルは、はっ、としたように、ぼくの腕をおさえた。

「あなたは、まさか……」

「まだ何とも言えないよ。――可能性といっても、まだ、まるで影みたいにあいまいなものだ。だけど――とにかく、きいてみたいんだ」

「工場が出ました……」とマックスが、ヴィジフォンの所からいった。「管理責任者が出ていますが……」

ぼくはストゥールからとびおり、ヴィジフォンの方へかけよった。

「そんな……そんな事あり得ないわよ！」背後からキャロルが、かすれた声で叫んだ。

「……人を殺すなんて……ロボットは、人間を殺せないわ！――殺せないようにできているはずよ……」

ぼくはかまわずヴィジフォンにとびついて、先方と話をはじめた。――キャロルはなぜか、ぼくの背後にこず、ストゥールの上に凍りついたようにすわって、こちらを見ていた。ナプキンに、しきりに何か書きつけていたエドも、顔をあげて、じっとぼくと相手の通話を見つめていた。

「やっぱりだ……」先方に別の緊急電話がかかって来たらしいので、一たん通話をきったぼくは、ゆっくり二人の方をふりかえった。「金曜日午前中に工場を出荷されて、新規配属さ

れた二十体のサービスロボットのうち、エリックをふくむ三体が〝倫理回路〟に、落雷の影響らしい〝歪み〟を生じているらしい事が、今日の午後、発見されたそうだ……エリックは、第一条B項回路第二条A項回路に、若干の狂いを生じていたって」

エドとキャロルの顔は、紙のように白くなった。――二人とも……いや、ぼくたちだけでなく、警察の誰もが、考えもつかなかった、おそろしい可能性が、ワン・ステップ、姿をあらわにするのを感じたにちがいなかった。

〝ロボット倫理回路〟――一名「三原則回路」というものは、人間型（ヒューマノイド）ロボットが、人間のよきパートナーとして社会の中に共存しはじめた当初から、何度も吟味され、ロボットの対人間・社会行動規制の根本原則として、どのロボット用電子脳（ブレイン）の中枢にもくみこまれている「規制回路」だ。

規制は、次のような三つの基本原則からなっている。

一　A、ロボットは人間に危害を加えてはならない。
　　B、また危険を看過することによって人間に危害を及ぼしてはならない。

二　A、ロボットは人間に与えられた命令に、服従しなければならない。
　　B、ただし、与えられた命令が第一条に反する場合はこのかぎりでない。

三　ロボットは、第一条、第二条に反するおそれのないかぎり、自分を守らなければならない。

エリックは、あの工場でつくられ、サービスロボットとしての訓練をうけ、職場に配属になる直前に、あの史上稀に見る大落雷の影響で、第1条B項回路――「危険を看過することによって、人間に危害を加えてはならない」という規制回路がうまく働かなくなってしまい、そのために、あの時、あわれな被害者が、眼の前で殺されるのを、ぼんやり見すごしてしまったのだ。――第二条A項回路も、少し具合が悪くなっていたのだろう。エリックは、注文をまちがえた……。「とめて！」と叫んだキャロルの命令にも、反応しなかった……。

「おどろいたわね……」キャロルは青ざめた顔をこわばらせてつぶやいた。「あんなに重要な――あんなに厳重に保存され、安定していると思った倫理回路がくるう事があるなんて……」

「例外的な事故さ――。おそらく確率何千万分の一以下の……」ぼくは咳ばらいしながら言った。「第一、この地域で、あんなものすごい大雷雨がある、という事は例外的な事だ。まして、あんな、世界の観測史上はじめてという、とんでもない大球雷が、あの工場をおそった、なんて事も例外だ。そして、その落雷事故の時、たまたま最終訓練ラインに、何体かのロボットがいた、という事も……」

「でも、〝三原則回路でも狂う事がある〟っていう事がはっきりした以上、可能性は出て来

たわけよ。——ロボットが人を殺す、という……」

「たしかに、論理的な可能性は出て来た。——だが、現実性はなさそうだ」ぼくは気のぬけたジンジャーエールをがぶりと飲んで言った。「今、工場できいたんだが——この二週間の間、あの工場から送り出されたロボットは、エリックたちの同期生二十体だけで、それも全部回収された。しかし、そんなにひどく狂ったものはなかったという。——この地区以外から、〝狂ったロボット〟がはいって来たとしても、それは移動記録ですぐわかる……」

「待てよ。——今言った、あとの方が肝心な事だ」エドはカウンターをどん、とたたいた。「よそからはいって来たのなら、必ず記録でわかるし、すぐ気がつく。——が、記録によれば、そんなものはない。ロボットにしろ、人間にしろ、あんなごついやつが、この町へ、外からはいって来て、町の中をうろうろしていたのなら、必ず眼につくはずだ。だが、あらゆる交通機関の記録でも、この二週間、該当する奴がはいりこんだ形跡はない。と言って、さっき面通し（ラインナップ）をしたのでもわかるように、町の住民にも、該当者はいない。じゃ、やつはどこから来たのか？——町のすぐ傍のロボット工場から来たとするなら、この謎は簡単にとける。それにロボットなら——何も、ホテルやモーテルにとまる必要はない。エネルギー補給の必要が起こるまで、どこにでもかくれていられる」

「しかし——落雷事故の時、もうすでに訓練を終了し、配属もきまって、出荷するばかりになっていた二十体をのぞいて、工場のラインにあった全製品は、いま出荷停止になっているぜ……」ぼくは体の芯がふるえ出すのを感じながら、一応エドの言葉をさえぎった。「ラインにあった半製品は、一応全システムのＣＣＣによるチェックがすむまで、倉庫にしまわれている、とさっき管理課の人が言っていた。システムチェックがすんだあと、半製品全部にわたるチェックが……」

「マックス、もう一度工場へつないでくれ」とエドはどなった。「ラインの、最終段階にあったロボットを全部チェックして、ぬけ出したものがいないか、しらべるんだ……」

「おかしい——電話が通じません」マックスはヴィジフォンの前で言った。「さっきはちゃんと通じたのに——ほかの所もだめです。線が切れたらしいです」

ぼくたちは思わず顔を見あわせた。——たった今、通じたヴィジフォンの線が、突然切れたのは、一体どうした事か？

「車の無線で警察をよんでみましょうよ、エド」と、キャロルが紙のような顔色をして言った。「テルジアム警部に、私たちの考えを話した方がいいと思うわ」

「そうしよう……」エドは唇をかんでうなずいた。「だけど、テルジアム警部って、誰だ？」

「あら、ファット警部の事よ。おぼえてないの？」キャロルがストゥールから腰をうかしながら言った。「ほら、私たち学生時分、メグレ警部の名前をひっくりかえして、彼の綽名に……」

その一言をきいた時のエドの顔ったらなかった。——顔色は青を通りこして土気色になってしまい、一面にのこるみみず脹れまで、紫色に変色した。

「どうしたの？」キャロルはおどろいて立ちすくんだ。「何なのよ、エド……」

エドの視線は、じりじりと動いて、カウンターの上にそそがれた。——カウンターの上のはいって来た時からずっと彼が落書きをしていた紙ナプキンに……

「そうか……わかったぞ！」エドはかすれた声で言った。「〝ヴォミーサ〟って言葉の意味が……やっとわかった！」

そういうなり、エドは落書きだらけのナプキンをわしづかみにして外へとび出した。——ぼくとキャロルも、わけがわからないままにあとを追った。

五

外は昨夜とおなじようにうっとうしい雲に空一面がおおわれ、星一つ見えないまっ暗な夜だった。——相かわらず、遠くで低く雷鳴がひびき、時おり雲がパーッと白く光る。この地域では、たとえ季節の変り目にしても、こんなに長い間——先週木曜の大雷雨以来だから、もう一週間——うっとうしい天気がつづくのはまったく珍しいのだが、どうやら最近は気象の長期パターンがかわりつつあるらしい。

ぼくたちは、いつものくせで、車を駐車場の一番はし、市街からくる道路に面した入口か

らはいってすぐの所においていた。〝ベビイ〟の店からは一番遠く、直線で百二十メートルぐらいある。——店は、その道路が、もう一本の道路と交叉する角に面してあり、ほそながい駐車場は、ちょうど店の裏の方にのびていた。

市街からくる道路にそって、駐車場との間に幅二十メートルほどの川が流れていた。道路から駐車場へは、小さな橋で川をこえてはいるようになっている。——川は市街にはいりこみ、街を縦横に流れる運河につながっている。

その事を、ぼくたちは、うっかり忘れていた。あの凶暴な犯人が、その夜、また市街地であらわれ、女性をおそったと警察できいたが、それがずっと遠い、K地区の事だったので、つい警戒心がゆるんでいたのである。

エドのあとを追って、からっぽの駐車場にポツンと一台だけとまっているエドの車のそばまで来た時、空を横切ってパーッと光った幕電のうす明りに、川から上がって、駐車場を横切って店の裏手へむかってつづいている、ぬれた、巨大な足あとと、水たまりのあとを見て、背筋に、ずん！　と氷の棒をつきたてられるような衝撃が走るのを感じた。

ついさっきまで、犯人がロボットだ、という可能性を考えてもみなかった。そして、犯人の行動は、すべて人間としての「生理的制約」にしたがうものだ、という先入観が、まだ生きていた。——だから、この駐車場のすぐ横を流れる川が、遠くK地区の、犯人がとびこんでのがれた、という運河にもつながっている事を、考えもしなかったのだ。

「エド……」かすれた声で、ぼくはエドの背中に言った。「見えるか?……足あと……」
エドは車のそばできっとふりかえった。――稲妻の光なしで、彼にその足あとが見えたかどうかわからなかった。だが、見えても見えなくても、次の瞬間、〝ベビイ〟の裏手あたりであがった、キャロルの鋭い悲鳴が、すべての事態を一瞬に明らかにした。
「やめて!――ちかよらないで!」キャロルは、金切り声で叫んでいた。「エド!――助けて。あいつ、ここにいるわ!」
「キャロル!」と叫んで、エドは脱兎のごとくかけ出した。「今行く! 逃げちゃだめだ。逃げないでたちむかえ!」
あとを追おうとしたぼくをふりかえって、エドは鋭く言った。
「イシ!――車……明り……」
ぼくは一足とびに走りかえって車にとびこみ、エンジンをスタートさせた。ライトをつけ、ハンドルをぎりぎりまわしながら、片手でカー・テレフォンのマイクをつかみ、緊急回線のボタンをおしながら、警察にむかって、事態をわめきちらしていた。
店の裏手へむけてつっかけると、ヘッドライトの光芒の中に、こけつまろびつ逃げまどうキャロルと、その背後に、両腕をつき出してつかみかかろうとしている、あいつの姿がうかび上がった。帽子もレインコートも昨夜のままだったろうが、凍った運河の水の底をわたって来たため、まるで泥水の化け物のように見えた。――二メートルのやつは、それほど急いでいるように見えないのに、大きなストライドで、泥水をしたたらせながら、たちまちキャロルを追いつめそうになった。

「やめて!……こないで!」
とキャロルは息もたえだえに叫んでいた。
「だめだ、キャロル!」と、キャロルの傍にかけよりながらエドはどなった。「逃げたらやられるぞ。――たちむかうんだ!」
「どいてくれ、エド!」ぼくは車をひきまわしながらわめいた。「車をぶつけてやる!」
「だめだ。こいつには、そんな小型車はきかん……」とエドは手をふった。
エドは、半分這うようにして逃げて来るキャロルと、そいつの間にやっとわってはいった。エドとそいつの距離は二メートルもなかった。――一歩ふみ出し、でかいそいつが腕をふれば、エドの首は簡単にへし折られてしまうだろう。
「さあ、こい!」エドは、またもや無謀にもカラテのかまえをしてどなった。「かかって、こい! 化け物!」
ライトの中で、それはまさに竜車に向う蟷螂(とうろう)の斧を絵に書いたような光景だった。だが――次の瞬間、また、昨夜と同じことが起こったのだ。瘠せこけた、小柄なエドの挑戦に対して、あの「狂った機械」が、たじろぎ、あとずさりしたのだ。一つかみで、頸の骨をへし折ったあの強力な機械の腕手を宙にうかせたまま……。

「ほらほら……」エドはじりじりと相手にせまりながら歯をむき出した。「どうした？　かかってこい！——おれを殴れ！」
おそろしいうめきが、そいつのどもとからもれた。——一層重くたれこめた雲から、稲妻がはためくと、そいつは両手でがっと頭をおさえた。まるではげしい偏頭痛の発作におそわれたみたいに……。
「さあ、やれ！」エドは声をはげましてどなった。「おれを殺せ！」
その瞬間、雲をぬって樹枝状の電光が走った。パリパリグヮラグヮラという雷鳴が、雲の上をかけめぐった。——そのとたん、おどろくべき事が起こった。そいつは、身をもむようにして、
「ヴォミーサ！」
とわめくと、頭にかけた両手に力をこめて、自分の頭を胴体からもぎとり、地面へなげつけたのだ。——首のもげたあとから、パチパチといくつものスパークがふき出した。だが、それで終りではなかった。首なしの体で、そいつは自分の胴体をどかんどかんたたきはじめた。右手で左手をつかんでぬきとり、片方の足でもう一方の足を蹴り折った。地面にくずれおれても、そいつは、のこった一本の腕で、自分の胴中をたたきつけるのをやめなかった。レインコートなど、とうのむかしにずたずたになって消えうせてしまい、ついに特殊合金製の胴が破れると、そいつはぼろぼろの骨だけになった右腕をぐいとその破れ目につっこんで、

からまりあったコードやパイプをつかみ出した。
「伏せろ！」とエドが叫んだ。「爆発するぞ……」

＊

「第二条B項……ただし、〝裏倫理〟のね……」とエドは言った。「それが、回路として作動していない、という事に賭けたんだ。——ずいぶんむちゃな賭けだったがね」
「前の晩の経験からだね」とぼくは言った。「だが、あの時は、ただ無鉄砲からむかって行ったんだろう？」
「そりゃそうさ。もしロボットとわかってたら、いくらかっとしたって、あんな無茶はできやしない。——だけど、あれをやっておいたおかげで、やつの裏がえされた〝倫理回路〟の〝第二条B項〟が作動していないんじゃないか、と直感的に思ったんだ。——それに、エリックの事もあったしね。彼の場合は、第一条B項つまり、第一条の、条件回路だけが、歪みをうけていたから、基本原則回路と条件回路との間にはそういう事も起こり得るんだな、と、漠然と理解していたんだな。だから……」
「いったいどういう事なのよ……」マックスから、気付けの飲物をもらって、やっと人心地がついたらしいキャロルが、物倦そうに、口をはさんだ。「どうして、あいつは、あなたにはおそいかからなかったの？　どうして自爆しちまったの？　わかるように説明してちょう

だいよ」

「うん、まあね……」とエドはうなずいた。「どこから説明していいかわからないが――とにかく、イシが工場に問いあわせて、〃倫理回路〃――つまり〃三原則回路〃というものが、狂う可能性がある、という事がわかった時に、ある事が閃いたんだ。まず、われわれが、ロボットは殺人を絶対におかさない、という固定観念で、事件を見ていたが、一番重要な〃倫理回路〃が狂う可能性があるとすれば、――〃殺人ロボット〃というものが出現する可能性がある。しかも、基本原則のうちでももっとも重大な、第一条A項――〃ロボットは人間に危害を与えてはならない〃という項目が狂っているようだったら……〃三原則回路〃がことごとく、狂っている可能性もある、と思った」

「だが、エリックは、部分的に狂ったんだぜ……」

「まあ待ちたまえ。――ぼくは、ある事から、やつの〃倫理回路〃が落雷の影響で完全に裏がえしになってしまったんじゃないか、と突然思いついた。そうすると、やつのとった残酷で奇妙な行動が――やつを、狂ったロボットとして、だよ――理解できるような気がした」

「〃倫理三原則〃が狂った……というのは、どう狂ったのよ?」とキャロルがきいた。「〃ロボットは人間に危害を加えてもかまわない〃ってわけ?」

「いや、そうじゃない。あの三原則を、裏がえすんだ。するとこうなる……」

エドは紙ナプキンをとってひろげると、ボールペンで、ぐいぐい書きつけて行った。――

彼のにぎったペンの下から、戦慄すべき〃三原則〃がうかび上がって来た……。

一　A、ロボットは人間に危害を加えなくてはならない。
　　B、また危険をつくり出す事によって危害を及ぼすべきである。

二　A、ロボットは、人間の命令に服従してはならない。
　　B、ただし、命令が第一条に反しない場合はこの限りではない。

三　ロボットは、一、二条に反する惧れのある場合は、自分を破壊しなければならない。

「狂ってる!」ぼくはぞっとしてつぶやいた。「正気の沙汰じゃない!」

「そう、狂気の沙汰さ。――あの見事な〃三原則〃を、ひっくりかえすと、こんなに恐ろしい、〃狂った殺人機械〃の行動指針があらわれるんだ……」

「じゃ、あいつは……キャロルも息をのんだ。「人間に危害を加えるために、つくられた機械になったのね」

「何も、そんなにおどろく事はないぜ。兵器をはじめ、人間に危害を与え、殺すための機械なんて、かつてごまんとつくられたんだからね……」エドは皮肉っぽく言った。――ちょっとした所で、気障っぽく哲学者ぶって見せる所が、エドの悪いくせだった。「ただ、やつは、そいつを自律的行動規制の原則として、ビルト・インされていただけさ……」

それにしても、おそるべきやつだった——。これは、あとでわかった事だが、やつは、ちょうど落雷事故の時、〝倫理回路〟の最終調整ラインにのっていた。森林レインジャーに、タフな仕事に堪えるようにつくられたロボットだった。そして、全操業システムのチェックの時、係がまちがえて、そいつの動力源スイッチをオンにしたまま、倉庫へしまいこんでしまった。——金土日とつづく三日の週休のため、人間の責任者は、宿直をのこして休んでしまい、その間に〝狂ったロボット〟は独りでに倉庫をぬけ出した。彼は「内面の声」にしたがって、一直線に人間に危害をあたえにやって来た……。彼の存在理由（レゾン・デートル）は「人間に危害をくわえること」だったのだ！

「おどろいたわね」と、エドの書いた三項目をつくづく見ながら、キャロルは嘆息した。

「それであなたは……私に、〝やめて〟とか〝こないで〟と言わないで、たちむかえと言ったのね。つまり、この第二条A項を逆手にとった……」

「そう——だが、その時、さっき言ったように第二条B項が、作動していないだろうという推測が、一つの賭けだったのさ。でなきゃ、たとえ、やつが、〝人間の言われた事に服従してはならない〟という規制をうけていても、〝ただし、人間にとって危害となる場合はこのかぎりでない〟という条件回路が発動されて、〝殺せ！〟というぼくの命令に従って、殺しにかかったかも知れないからね。——でも、大丈夫だろう、という事は、あの前の晩、やつがぼくをおそえなかった事から、大体見当はついたけどね——」

「そして、第一条と第二条の間の矛盾にはさまれ——ついに第三条を発動して自爆しちまったわけね」キャロルはほっと溜息をついた。「でも、いったい、いつ、どうして、あいつの〝倫理回路〟が裏がえっているんじゃないかって見当がついたの？」

「あの〝ヴォミーサ〟って言葉の意味がわかった時さ」エドはにやりと笑った。「そしてそれがわかったきっかけは……君たちが、ファット警部につけた妙な綽名——メグレのひっくりかえしの名前を思い出させてくれた時さ……」

エドはジャンパーのポケットから、くしゃくしゃになった紙ナプキンをとり出した。——〝ベビイ〟にはいって来た時、さんざん落書きをしていたやつだ。

「ほら、これをごらん……」とエドは、

Vomisa（ヴォミーサ）

と書いた文字を指さした。

「こいつを逆に読んでみたまえ……」

ぼくたちは、あっ、と声をあげた。それを逆から読むと、

Asimov（アシモフ）

という言葉になったからだった。

「ロボットの〝倫理回路〟——つまり行動規制三原則回路が、一名〝アシモフ回路〟ってよばれている事は知ってるだろう？——まだロボットがこんなに使われていない半世紀以上前

に、ロボットSFをたくさん書いたI・アシモフってSF作家がいて、彼がこの三原則の基礎を考え出したんだ。その後、ロボット工学が発達して、いろんなものがつけくわわったが、この原則はほとんど変っていない。今の世間は、ほとんどこの名を忘れちまっているけど、古いロボット工学者なんか、まだこの名で呼んでいるよ。三十年ほど前にこの三原則の創始者を記念して、この名を正式の呼称としようと言う提案も学会にあったし、その時は、〝レーザー〟みたいに、何かややこしく、長ったらしい言葉の略号になったはずだ。忘れちまったけど……。――ぼくは学生時代、必須過程でいやいやロボット工場へ実習に行かされて、その時知ったんだけど、その時、ロボットの全システムに、緊急反応体制をとらせる時のシグナルに、この〝ASIMOV〟ってコードがつかわれているのを知って、とても面白かったのをおぼえている。――ロボットの電子脳(ブレイン)や、サブ電子脳(ブレイン)が、時空分割方式で、多元的行動処理をやっている時、何か突発事態が起こって、緊急にそれに対して行動体制をとらなければならない時、電子脳(ブレイン)の各パートが、分担してやっているこまごました仕事から、一時的に解放されて、全システムが、いっせいに当面の緊急事態に対する解析判断体制をとる――その緊急コードが、〝ASIMOV〟さ。――そうだね? マックス……」

「その通りです……」とマックスは棚からグラスをとりながらうなずいた。「〝アシモフ〟って名は、――私たちロボットにとっては、まあ、あなたたちの中のクリスチャンにとって、モーゼやキリストの御名みたいなものです。ちょうど、あなたたちが――私は人間の宗教に

ついてはよく知りませんが――何かの時に、キリストの御名や、神の御名、アラーの御名を叫ぶみたいに……私たちの回路の中にも、そのコードが、何かといえばなりひびきます。それは、システム、サブシステムがそれまで分担処理している問題からの、一時的緊急解除のシグナルであると同時に、行動基本原則回路の第一次励起シグナルでもあるわけです。――ルーティン以外の新事態に対処するためには、まずまっさきにあらゆる事態に対する行動基本原則が、システム全体の判断条件としてよび出されなければなりませんから……」

「つまり、君たちにとっては、カントの定方命令みたいなものだな……」とぼくは嘆息した。

「で、あの狂ったロボットは――発声機構未調整のままだったから、何かと言えば、アシモフ――いや、そのひっくりかえしの〝ヴォミーサ〟って、声に出して叫んだ……」

「エド――こっちへいらっしゃいな……」キャロルが、うっとりとした眼つきで手をのべた。

「あなたって、ほんとにすばらしい人……あなたのすばらしい推理のおかげで、私の命が救われたんですもの――。お礼のキスさせて……」

「推理だけでなく、カラテ修行によってつちかわれたぼくの敢闘精神にも、感謝してほしいね」キャロルにベタベタにキスされて照れながら、エドは言った。「カラテをならってなかったら、最初だって、二度目だって、とにかくあいつに立ちむかう勇気なんて湧いてこなかったろう、と思うよ。ぼくまでおびえて逃げていたら、到底君の命はすくえなかったろう。だからやっぱりカラテのレッスンは……」

ピシャッ！――とエドの頬がえらい音で鳴った。

「何すんだよ！」

キャロルにひっぱたかれた頬をおさえて、エドは口をとがらせた。

「まあ、あなたって人は！――あれほどやさしく言ってきかせてあげたのに、まだわからないの！」ストゥールから立ち上がったキャロルは、腰に手をあて眼をつり上げて、じりじりとエドにせまった。「カラテの敢闘精神ですって？　何さ！　恩になんか着せないで！――もしあいつが、あんなに都合よく狂っていてくれなかったら、あなたはいったいどうなってると思うの？　もし、第二条B項が生きていたら、今どきあなたなんかずたずたにされていて、私はこの若さで、黒いヴェールをかぶった、美しい未亡人になって、泣きくずれているのよ。あんた私がそんな事になってもいいの？　もし、相手がロボットじゃなくて、ほんものの人間のプロレスラーだったら、私は一生あなたの車椅子を押してくらさなきゃならないのよ！――そんな事がまだわからないの？　やさしく言ってわからないんだったら、今度こそ、骨身に沁むようにわからせてあげるわ！」

「イシ！――助けてくれ！　キャロルをとめてくれ！」とエドはわめいた。

「だめだよ。――あのデカ物をやっつけた君がかなわない相手を、とめる自信はないよ。第一ぼくはカラテを習ってないしね……」ぼくは自動販売器からとり出したピーナッツを口にほうりこみながら、背後のバリバリガリガリいう音に背をむけた。「ほら、パトカーのサイ

レンがちかづいてくるよ。――ファット警部が到着したら警察に保護をたのんでみるんだな」

「助けてくれ！　マックス！――やめろ、キャロル……」

ちらと背後を見ると、キャロルはさっき縦にみみず脹れをこしらえたエドの頬を、今度は横にひっかいていた。――明日の朝、エドの顔には餅網型のひっかき傷ができているだろう。せっかく五分の四ほどのこっていたひげも、三分の一ぐらいになっているかも知れない。

「マックス助けて！　どうして助けてくれないんだ？　お前も狂ったか！　第一条B項違反だぞ！」エドは泣きながらわめいた。「〝ロボットは、人間にとっての危険を看過する事によって、危害を及ぼしてはならない〟……はずじゃないか！――〝ヴォミーサ！〟……じゃなかった。〝アシモフ！〟〝アシモフ！……〟」

「残念ですが――ロボット工学の基礎には大変おくわしいようですが、最近の発展ぶりには、あまり通じておられないようで……」マックスは、ぼくにちょっとウインクして、キュッキュッと音をたててグラスをみがきつづけた。「私どもの年式から、〝基本倫理回路〟に、夫婦喧嘩非介入回路〟という、補正条件回路がつくようになりましてね。生命に別条のない、と判断されるかぎりは、ロボットは夫婦喧嘩に介入してはならない事になっております。一名〝夫婦喧嘩はロボットも食わない〟回路と申しまして……」

初出誌一覧

終りなき負債	ＳＦマガジン	昭和37年12月号
Ｄシリーズ	笑いの泉	昭和39年7月号
ＳＯＳ印の特製ワイン	初出誌・掲載年月日不明	
宗国屋敷	別冊小説新潮	昭和41年10月号
機械の花嫁	オール讀物	昭和43年6月号
サマジイ革命	話の特集	昭和44年2月号
ヴォミーサ	ＳＦマガジン	昭和50年7月号